

玉 手 山 遺 跡

1983、1984年度

1987年3月

柏原市教育委員会

は　し　が　き

玉手山丘陵は、低平な河内平野から見る時、府県境の二上山系の前面にあって、まず始めに望見される低い丘陵地帯です。緑濃い背後の山塊と比較すると、玉手山丘陵、特にその北半部は人家やマンションが密集し、ごく一部にしか緑が残されていないことがわかります。この緑が残されたところが古墳にあたります。

丘陵の尾根上に連なる前方後円墳は、5世紀代に出現する日本最大の古墳群－古市古墳群を指呼の距離に見下す位置にあり、しかもその前段階の4世紀代に築造されたとみられることから、河内に出現した古代王権の出自を探る貴重な資料といわれています。ところが丘陵上の古墳や遺跡については、眺望の良さや大阪近郊という利点から開発が急速に進み、埋蔵文化財に対する関心の高まりや、行政的な措置が講じられる以前に姿を消してしまった古墳が多く、その実態については明らかではないのが現状です。

こうした宅地開発の結果は、逆にそこに住む人々の自然的（木々の緑）、文化的（埋蔵文化財等歴史遺産）な住環境を悪化させる大きな要因になっているのです。これから街づくりには、周辺環境との調和という問題が大きな課題になっています。こうした意味で、今回の調査で横穴群の現状での保存を計ることができた点は、街の中に歴史的環境を取り入れることのできる可能性を残した点で、遺跡の保護という視点からだけではなく、将来的な展望に立った都市づくりという観点でも一つの成果であると考えます。今後とも、こうした事例が増加するよう努力を重ねてまいりたいと思います。

昭和62年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は柏原市玉手町145-35番地におけるマンション建設工事に伴い、柏原市教育委員会が実施した事前緊急発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は株式会社トーメン（代表取締役 田原 修）の依頼に基づくもので、発掘調査、整理作業に係わる費用は同社の負担による。
3. 調査対象面積は9711.95m²、発掘調査は2期にわけて行ない、第Ⅰ期調査は昭和58年10月3日～11月5日、第Ⅱ期調査は昭和59年5月7日～10月2日の期間行なった。
4. 発掘調査は柏原市教育委員会社会教育課 桑野一幸が担当した。
5. 整理作業は桑野が担当し、仲井（旧姓松田）光代、竹下彰子、戸中優香の助力を得た。
6. 本書の編集、執筆はおもに桑野があたったが、第3章・4・d～oは仲井が担当した。
7. 本書で使用した方位は全て磁北（真北は磁北から約6°東に偏している）、標高は全てT.P.である。
8. 調査、整理にあたっては帝塚山短期大学 山本 昭、奈良大学 水野正好、大手前女子学園 藤本史子の諸氏に御助言いただいた。また、調査全般、横穴群の保存に関してトーメン 土地開発株式会社 山田春樹氏には種々の御足労をお願いした。記して感謝いたします。
9. 調査の参加者は下記の通りである。

石田 博	竹下 賢	北野 重	花田勝広	安村敏史	広岡 勉
石田成年	秋田大介	井宮好彦	上條裕典	佐藤 尚	辻本登志夫
服部 雅	山中 茂	麻 栄一郎	朝田行雄	井上岩次郎	奥野 清
川端長三郎	谷口鉄治	玉野正一	西岡武重	分才春信	道旗 基蔵
山田貞一	山本芳一	飯村邦子	乃一敏恵	松成早苗	村口ゆき子
横関勢津子	吉居豊子	谷口京子	福木理香		

東海アナース株式会社
10. 出土遺物、図面、写真は柏原市歴史資料館で保管し、出土遺物の一部は展示を行なっている。

目 次

はしがき

例 言

第1章 調査経過

1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査の方法と経過.....	1
3. 横穴群の保存.....	4

第2章 位置と環境

1. 地理的環境.....	6
2. 歴史的環境.....	6

第3章 調査成果

1. 地形と遺構の分布.....	9
2. 層序.....	9
3. 遺構と遺構出土の遺物.....	12
4. 包含層出土の遺物.....	26

第4章 横穴群の調査

1. 位置と地形.....	69
2. 各横穴の概要.....	69
3. 横穴群の変遷と年代.....	79

第5章 まとめ

82

挿 図 目 次

図1 調査対象地の現地形と第I期調査 のトレンチ配置	2	図28 形象埴輪(2)	41
図2 調査地位置図	7	図29 須恵器、土師器、土製品	42
図3 第II期調査区の旧地形と遺構の分 布	10	図30 束縛系須恵質土器	43
図4 層序	11	図31 瓦器	44
図5 墳輪棺周辺の地形	13	図32 瓦質擂鉢	46
図6 墳輪棺1実測図	14	図33 瓦質羽釜	47
図7 墳輪棺1の円筒、朝顔形埴輪	16	図34 瓦質盤、火舎、火鉢	49
図8 墳輪棺1の円筒埴輪	17	図35 瓦質火舎、火鉢	50
図9 墳輪棺2実測図	18	図36 瓦質、土師質甕	51
図10 墳輪棺2の円筒、朝顔形埴輪	19	図37 灰釉おろし皿	51
図11 溝実測図	21	図38 土師質皿	52
図12 溝出土の土器	22	図39 土師質土釜、鉢	55
図13 古墓実測図	23	図40 土師質土釜、蓋、焙烙、手焙り、 火鉢、鉢	56
図14 古墓出土蔵骨器	23	図41 陶磁器(1)	59
図15 祭祀土塚実測図	24	図42 陶磁器(2)	61
図16 ピット1、2(4EⅣ、5EⅠ区)、 3~6(3GⅢ区)実測図	24	図43 陶磁器(3)	62
図17 井戸実測図	25	図44 軒丸、軒平瓦瓦当文様	64
図18 繩文(4~6)、弥生土器	27	図45 軒丸、軒平瓦断面図	65
図19 石器(1)	29	図46 丸瓦実測図	67
図20 石器(2)	30	図47 平瓦の凸面の叩き文様	68
図21 石器(3)	31	図48 横穴群地形図	70
図22 石器(4)	32	図49 1号横穴実測図	71
図23 石器(5)	33	図50 2号横穴実測図	73
図24 円筒埴輪(1)朝顔形埴輪(1)	37	図51 3号横穴実測図	74
図25 円筒埴輪(2)	38	図52 4号横穴実測図	75
図26 円筒埴輪(3)朝顔形埴輪(2)	39	図53 5号横穴実測図	77
図27 形象埴輪(1)	40	図54 5号横穴出土遺物	78
		図55 玉手山丘陵の横穴群玄室規模、形 態の比較	80

表 目 次

表1 墳輪棺1に用いられた埴輪観察表	15
表2 墳輪棺2に用いられた埴輪観察表	19
表3 石器観察表	28
表4 包含層出土円筒、朝顔形埴輪観察表(1)	35
表5 包含層出土円筒、朝顔形埴輪観察表(2)	36
表6 瓦器観察表	45
表7 瓦質羽釜観察表	47
表8 土師質皿観察表	53
表9 土師質土釜観察表	54

図 版 目 次

図版1 調査地遠景、第1期調査	図版15 墳輪
図版2 井戸、埴輪棺1、谷2、谷1	図版16 家形埴輪、溝、古墓出土の土器
図版3 谷2の堆積、谷1の堆積	図版17 瓦器椀、土師皿
図版4 墳輪棺1、埴輪棺1	図版18 瓦質、土師質甕、瓦質、陶質擂鉢
図版5 墳輪棺1、埴輪棺1墓址底の礫床	図版19 甕、擂鉢、釜、鉢
図版6 墓輪棺1検出時、棺体の支持、棺体 結合部の礫床	図版20 蓋、鉢、火舍、陶磁器
図版7 溝、遺物の出土状況	図版21 軒丸、軒平瓦
図版8 古墓、炭層と蔽骨器	図版22 全景、1、2号横穴
図版9 祭祀土塙、瓦溜まり、瓦溜まり	図版23 4、5号横穴、3号横穴
図版10 円筒埴輪出土状況、ピット1、井戸	図版24 1号横穴、2号横穴、3号横穴
図版11 繩文・弥生土器、石器、石核	図版25 5号横穴、5号横穴棺台と土器
図版12 墓輪棺1に用いられた埴輪	図版26 5号横穴入口の堆積、5号横穴陶棺 出土状況、5号横穴壁面
図版13 墓輪棺1に用いられた埴輪	図版27 5号横穴土器、陶棺
図版14 墓輪棺1、2に用いられた埴輪	

第1章 調査経過

1. 調査に至る経過

柏原市は大阪市のベッドタウンとして近年人口の増加が著しく、宅地開発の波も年を追うごとに激しくなっている。市域は中央を東西に流れる大和川を挟み柏原地区と国分地区とに大きく区分されるが、かつては柏原区域に多くの人口が集中していた。しかし、衛星都市としての発展に伴い、最近では人口の配分は逆転し、国分地区がより多くの人口を擁するようになってきた。昭和57年に完成した近鉄大阪線国分駅前再開発事業は、こうした状況を顕著に示すものであろう。この国分地区の西部にある玉手山丘陵は、頂部に南北に連なって築かれた古墳群が存在する地域として学界に注意されていたが、最高所の標高が102.0mという眺望の良さや市域には平坦地が少ないという地形的制約もあり、宅地や工業地として早くから開発の波に晒されてしまった。この間丘陵地の削平とともにいくつかの古墳が消滅してしまっている。近年文化財保護に対する意識の昂揚とともに遺跡の保護や精緻な発掘調査が行われるようになってきたが、そうした意識や活動が進展するにつれ、改めて以前に失ったものの重要性が増していくよう思われる。特に、ここ数年はマンション建設が目立ち、勢い調査面積も大きくなる傾向がある。こうした中で、昭和58年株式会社トーメンからマンション建設に先立ち、文化財保護法第59条の2に基づく届け出があった。本市教育委員会では同社より依頼を受け、昭和58年10月3日から調査に着手した。

2. 調査方法と経過（図-1）

調査は2期にわけて行った。第1期は約9700m²に及ぶ調査対象地内に6ヶ所のトレンチを設定し、遺構および遺物の出土状況を把握することを目的とするとともに、位置的に安福寺横穴群と近いことから、横穴の有無の確認も行なった。期間は昭和58年10月3日～11月5日であった。

第1期調査では、調査対象地のはば中央部、尾根状地形部に設定した1～4トレンチで遺物が出土した。1トレンチでは表土を剥ぐとすぐに地山の凝灰岩層が露出する部分が多く、1A区において地山に掘り込んだ溝と、溝中から完形に近い土師器・甕が押し潰された状態で出土した。2トレンチは1トレンチ同様表土下はすぐに凝灰岩層になっていた。3トレンチではB区において平安時代以降の屋瓦を中心とした瓦溜まりが検出された。4トレンチでは中世の土器、近世の陶磁器類が多量に出土すると共に、埴輪棺（埴輪棺2）が検出された。また、調査対象地北半に設定した5、6トレンチでは、6トレンチ部にみられた降起があるいは古墳の可能性もあると考えたが、そうした遺構は存在せず、遺物も全く検出されなかった。さらに



図-1 調査対象地の現地形と第Ⅰ期調査のトレント

調査対象地南端の小谷状を呈する地区では、5基の横穴が発見された。

こうした第Ⅰ期調査の成果をもとに、第Ⅱ期調査では調査区を対象地中央部の尾根状地形部に設定するとともに、横穴群の実測調査を実施し、調査依頼者である株式会社トーメンとの間で横穴群保存に関する検討を行った。第Ⅱ期調査の期間は昭和59年5月7日～10月2日であり、約4100m²を対象とした。

調査日誌抄

第Ⅰ期（昭和58年）

- 10月3日 調査開始。トレンチの設定、草刈り。
- 10月5日 調査対象地南端の小谷で横穴発見。
- 10月8日 3トレンチB区で瓦溜まり検出、瓦器碗出土。
- 10月15日 1トレンチA区で構検出。
- 10月17日 1トレンチA区溝内から土師器、須恵器片とともに布留式の甕が潰れた状態で出土。
ほぼ完形になるとみられる。4トレンチで大型の円筒埴輪片出土（この埴輪片は中世の土器や磧などと混在していたため誤って取り上げたが、後日埴輪棺と判明。本報告書では埴輪棺2とするものである）。中世の遺物も多い。
- 10月20日 4トレンチの東部（斜面上部）を掘削するが、他のトレンチのように凝灰岩層露出せず。湧水激しい。約2m程掘り下げるが瓦器碗、埴輪片などと共にサスカイト片出土。
- 10月24日 横穴群周辺の伐採、入口の精査。
- 10月27日 5、6トレンチ調査開始。
- 10月29日 5、6トレンチ周辺は、かって斜面地に段状に畑地を開いていたようである。
- 10月31日 各トレンチ埋め戻し開始。
- 11月2日 横穴入口を土囊で閉塞する。
- 11月5日 埋め戻し終了。器材撤収。

第Ⅱ期（昭和59年）

- 5月7日 調査開始。湿地水抜き。草刈り。現場仮囲い。グリッドの設定。
- 5月15日 3～6・D～F区について重機により表土剥ぎ、北側に排土を置く（1区）。
- 5月22日 人力掘削開始。
- 5月28日 5D区で埴輪棺1検出。I区外に延びており西に拡張。
- 6月2日 古墓検出。
- 6月8日 壁輪棺1、古墓実測終了。谷2掘削終了。下底部の磧層からは弥生土器片、サスカイト片がわずかに出土している。
- 6月21日 ピット1内からは土師器・小皿出土。
- 6月22日 湿地の底にあたる部分（6F区）で井戸検出。

- 7月4日 地形図、土層図終了。
- 7月5日 I区埋め戻し。1～5・E～H区をII区とする。
- 7月9日 II区重機による表土剥ぎ終了。表土下は地山が露出する場所が多い。
- 7月19日 4～5・F区で瓦溜まり検出。本日だけでコンテナ20箱程出土。
- 7月24日 第I期調査時に検出された溝の周辺から円形のピットを4基検出。溝は黒灰色土で埋められている。
- 7月27日 溝の掘削。土師器、須恵器片、埴輪片などが比較的多く出土するが細片が多い。また時期的にも古墳、奈良時代のものがあり、溝の時期を決めるのは難しい。
- 8月2日 4E区で土師器・小皿、丸瓦を埋置した浅い土塹を検出。
- 8月6日 地形図作製。
- 8月10日 II区実測図等終了。夏休み郷土史講座（市内小学6年生）生見学。
- 8月16日 1～5・A～C区を第III区とし重機による表土剥ぎ。
- 8月21日 横穴群草刈り、樹木伐採。
- 8月24日 横穴群地形測量開始。
- 8月31日 墓輪棺1北西部に谷2が存在することが判明。この谷内から墓輪棺1の破片や蓋形埴輪、弥生土器、石槍などが出土する。谷2の残り部分も掘削開始。
- 9月5日 柏原市立玉手小学校郷土史クラブ見学。
- 9月14日 各横穴実測開始。
- 9月17日 4D区、谷1最上部で古墳時代後期の円筒埴輪が土圧で押し潰された状態で出土。完形である。
- 9月26日 空撮。横穴の実測終了。
- 10月1日 横穴の入口を土嚢で閉塞する。地形図終了。
- 10月2日 器材撤収、調査終了。

調査は以上のような経過で推移したものであるが、第I期調査は範囲確認調査としての性格をもち、その概要については本項の記述で替え、以下の報告書の主たる記述は第II期調査および横穴群の実測調査の概要報告であることを断わっておきたい。

3. 横穴群の保存（図-1）

第I期調査の際調査対象地南端に位置する西に開く小谷から横穴が5基検出された。この横穴群は、大阪府史跡に指定されている安福寺横穴群から北にわずか100m程離れているだけで、比較的大きな谷筋に開口した安福寺横穴群の一部を構成し、その北限を示す一支群と判断された。当初提出された発掘届け出書に添付されたマンション建設の計画図では、この横穴群部分についても建物が予定されていた。

第Ⅰ期調査後、本市教育委員会では調査対象地における遺構および遺物の出土状況を調査依頼者に報告するとともに、横穴群という遺構の重要性に鑑み、建物の計画変更および横穴群の保存に関する協議を行った。その結果、依頼者には遺構の重要性を認識して戴き横穴群の位置する小谷周辺の土地には建築物の配置、土地の削平等を行なわない旨の合意が成立し、新たに設計書が提出され、それに基づき第Ⅱ期調査を実施したのである。

この間大阪府教育委員会では昭和59年5月1日付をもち、本横穴群を大阪府指定文化財史跡安福寺横穴群に追加指定を行った。調査依頼者側では、史跡指定の通知を受け、独自にこの横穴群の維持管理を行なうことは困難と判断され、本市に史跡指定地を寄贈されるとともに、その維持管理を依頼された。地番は柏原市玉手町145-351、面積は1233.89m²である。

こうした経緯のもとに横穴群は保存されることになった。これは調査依頼者である株式会社トーメンの御好意と埋蔵文化財に対する深い理解に基づくものであり、本市教育委員会としても、今後の開発と埋蔵文化財の保存という相反する方向を融和させた一つの試金石として、本横穴群保存の過程を評価し、今後の文化財行政に役立てていきたいものと考えている。



昭和60年1月25日付讀者新聞

第2章 位置と環境

1. 地理的環境

調査地は大阪平野の東奥部、奈良県の水を集め大阪湾に注ぐ大和川が、生駒山系、二上山系を画する山間を縫って平野部に流出する地点にあたっている。府県境にあたる二つの山系を平野部、西から眺めると、その前面に低い玉手山丘陵をまず見ることができる。玉手山丘陵は生駒山系の一部であり、南河内の水を集めて北流する石川と、二上山麓から大和川に注ぐ原川とに挟まれ独立丘状を呈している。調査地はこの玉手山丘陵の北半部、標高20~40m、傾斜度16°~18°の西斜面に位置し、眼下には石川右岸に広がる低地帯を望むことができる。

玉手山丘陵は第3紀中新世の噴出物である二上層群によって基盤が形成されているが、丘陵南半部ではその上を大阪層群が被覆するとされている。⁽¹⁾したがって、丘陵北半分にあたる調査地では、基盤として二上層群が考えられた。マンション建設に伴い、ボーリング調査が実施されており、ここではその概要を紹介しておく。図-1に示す調査地北半部、急斜面地は、二上層群の疊混り砂岩を基盤とする。調査地南半、尾根状地形部は二上層群の凝灰岩を基盤としている。両者の関係は、疊混り砂岩を、炭化物を含む泥岩を挟んで凝灰岩が不整合に覆うという状況にあった。また地下水位は高く、凝灰岩の上部に湧水が認められた。

玉手山丘陵は、丁度調査地周辺から南部では尾根、谷があり組み、複雑な地形を呈している。玉手山丘陵は、古墳、横穴、古墓など原始~古代の墓域としての利用が目立つが、頂部に連なる前期古墳群を除くと、丘陵中央~南部に集中化する傾向があり、これも地形を一つの要因としているのかもしれない。

2. 歴史的環境

玉手山丘陵では、丘陵北端部や3号墳付近でサヌカイト製ナイフ形石器、石核が出土しており1万年以上前の先土器時代にまで歴史を溯ることができる。縄文時代の遺物としては石鏃が出土している。これらはいずれも断片的な資料であり、長期的な居住の痕跡を残すような資料は発見されていない。

弥生時代の遺構としては6号墳下に堅穴式住居址、丘陵南半・円明町の中小企業団地造成の際に⁽²⁾集落跡（溝などが発見されている）などが発見され、遺物も1号墳、9号墳の周辺で出土し、ほぼ全城が該期の生活の場となっていたらしい。また銅鏡、銅鐸なども出土している。平地部に近い円明地区では中期から居住が始まわり、丘陵上や斜面から発見される遺物は後期のものが多いため、高地性集落も営まれていたものと思われる。

古墳時代前期には全長100mを前後する前方後円墳が、丘陵頂部に南北に連なり築かれていっ

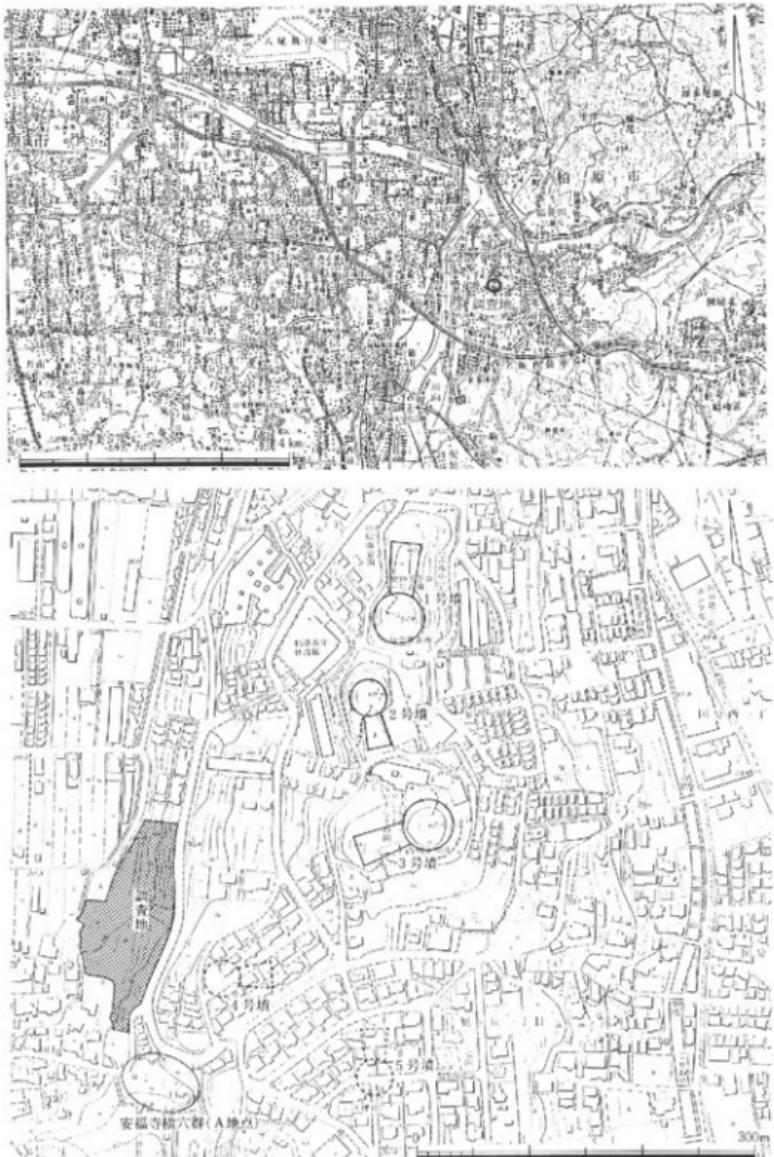


図-2 調査地位置図

た。調査報告されているものは少なく、一部にはすでに消滅しているものも存在するが、玉手山9号墳の報文では、9号墳あるいは玉手山古墳群の特性が分析され、9号墳の古式な様相や山城地域の前期古墳との関係が明らかにされている。⁽⁴⁾中期、後期になると古墳の数は急減するといわれている。前期古墳が丘陵頂部に築かれているのに対し、当該期の古墳は丘陵頂部から派生する尾根や斜面地に築かれるという、立地上の問題とも大きく関係しているように思われる。つまり、より開発の影響を受け消滅しやすいということであり、事実こうした地形上にあつたと考えられる消滅古墳がいくつかの地点の調査から推定されるのである。また、安福地横穴群、安福寺横穴群から約600m南に位置する玉手山東横穴群など、横穴を墳墓形態とする墓域が形成されているのも注意される。調査地はこの安福寺横穴群の北側、4号墳の西斜面下にあたっているが、4号墳は後円部中央に竪穴式石室、西に粘土櫛をもつ古墳で、はたして前方後円形を呈するかについては擬議が提されている。⁽⁵⁾さらに、4号墳の東からは箱式石棺、埴輪円筒棺が発見されている。⁽⁶⁾

飛鳥・奈良時代には、丘陵あるいはその周辺は片山庵寺、原山庵寺、五十村庵寺、玉手庵寺、安宿大寺などの古代寺院が建立されたが、こうした寺院に関する氏族の生活域は丘陵上にも展開していたものと思われ、その墓域の一部は丘陵南端部などに発見されている。玉手山丘陵は河内国安宿郡域にあたっており、円明地区から発見された該期の建物群は郡衛跡ではないかといふ見解も出されている。⁽⁷⁾

平安時代以降玉手山丘陵周辺の状況は明らかではないが、断片的な資料からは、丘陵上は墓域として利用されていたらしい。また、最近調査地眼下の水田下から鎌倉期の居館と考えられる建物群が検出されている。⁽⁸⁾

註

- (1) 笠間太郎・梅田甲子郎・岡崎 励（1956）『地質』『二上村史』
- (2) 柏原市教育委員会（1983）『柏原市埋蔵文化発掘調査概報1982年度』
- (3) 堅田 直（1976）『玉手山丘陵南端部の調査』『古代を考える』7 古代を考える会
- (4) 安村俊史（1983）『玉手山9号墳の検討』『玉手山9号墳』柏原市教育委員会
- (5) 柏原市教育委員会（1984）『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1982年度』
タ （1983）『片山庵寺塔跡発掘調査概報』
- (6) 石部正志（1980）『大阪の古墳』松緑社
- (7) 大阪府教育委員会（1970）『南河内石川流域における古墳の調査』（大阪府文化財調査報告第20輯）
- (8) 註2に同じ。
- (9) 柏原市教育委員会（1985）『玉手山遺跡』

第3章 調査成果

1. 地形と遺構の分布（図-3）

第II期調査区は、玉手山丘陵から石川右岸の低地地帯に張り出した低い小さな尾根とその南北の谷状地形とからなっている。平坦地は少なく、西下する斜面地が大半である。調査に際しては、東西方向を10m毎に区切りA、B、C………とし、南北方向を10m毎に区切り1、2、3………とし、10m四方の大グリッドを設定した。すなわち調査区の北西隅から東にA 1区、B 2区………、南にA 2区、A 3区………である。大グリッド内は5 m四方の小グリッドで4分割し、やはり北西隅から右回りにI、II、III、IV区とした。

図-3は、表土および包含層調査後の變灰岩からなる地山面の地形図である。調査区東部、T.P.35m以上に傾斜の緩い区域があり、そこから西に尾根が張り出している。その尾根の南側、調査区東南部にはT.P.30m前後の平坦地があり、そこからも西に小さな尾根が張り出している。調査区中央部の大きな尾根と南側の小尾根とに挟まれた小谷を1とし、小尾根の南側から調査区内に延びる部分を谷2としておく。谷2ではかなりの湧水がみられた。また調査区東南端には、図-1の調査地地形図に示したように小さな土手が築かれ、溜池として利用された湿地がみられるが、やはりかなりの湧水がみられた。谷の部分を除くと表土下すぐに地山になっているところが多く、若干の堆積土のみられる部分でも時期を限定できるような包含層はない。したがって、土塙やピットなどの時期を明確にするのは難しい。

こうした地形上にあって遺構の分布をみると、谷1、2に挟まれた尾根上に埴輪棺1、2が築かれていた。いずれも長軸方向を東西にとっており、頭部は東にあったものと思われる。調査区東部、T.P.35m以上のわずかな平坦地に、土師器・甕、須恵器・壺などが埋没し、黒灰色土で埋められた溝が検出された。遺物は古墳～奈良時代のものであった。埴輪棺1の南東、谷2の肩部近くに、古墓が検出された。これは土塙内に炭が充填されたものである。平安時代に相当するものであろう。4 E区の祭祀土塙は、皿状の土塙に土師器・小皿と丸瓦が並べて埋置されていたものである。ピットは4、5 E区、3 G区の2ヶ所に計6基が検出されたが、いずれも柱穴のような並びは示さず、性格は不明である。また、現状では湿地になっている6 E区から、近世の井戸が検出された。

2. 層序（図-4）

調査区内では、ほとんどの場所で明確な包含層は存在しない。しかし谷の堆積状況からは、堆積の時期や、時期的な地形の在り方をわずかに観察することができる。ここでは4・5区境界ライン上的一部分、谷1、2の層序を図示しておく。

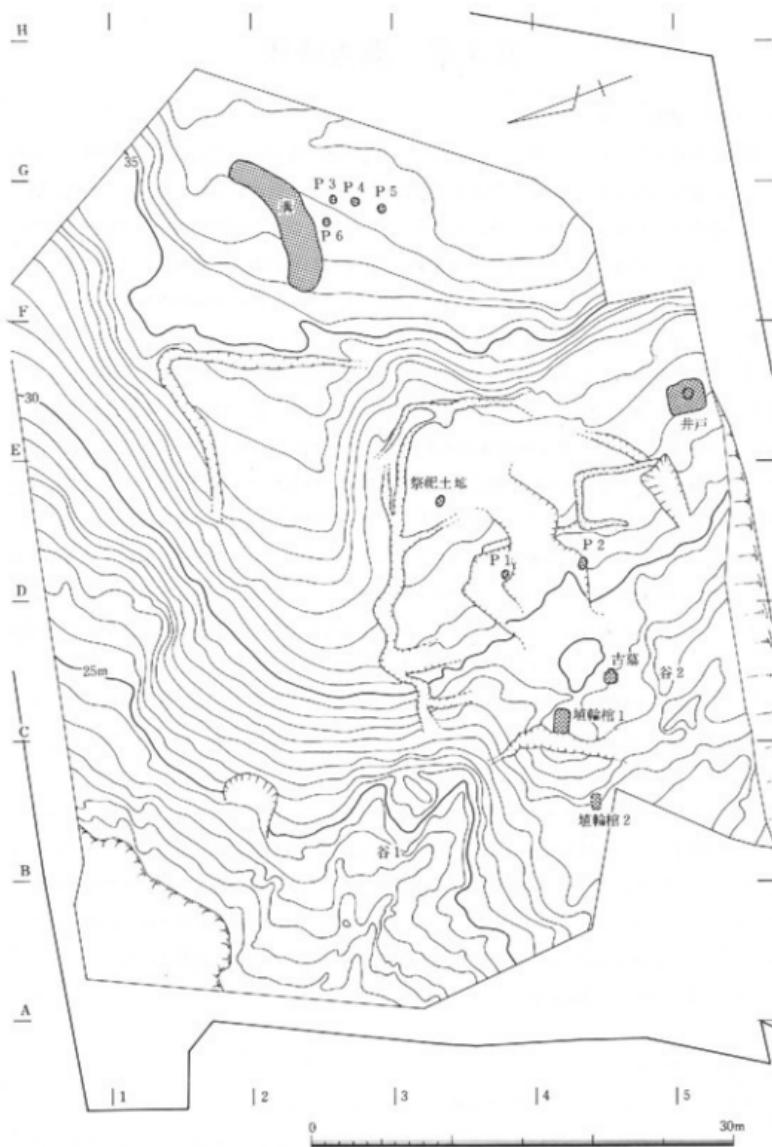


図-3 第II期調査区の旧地形と遺構の分布

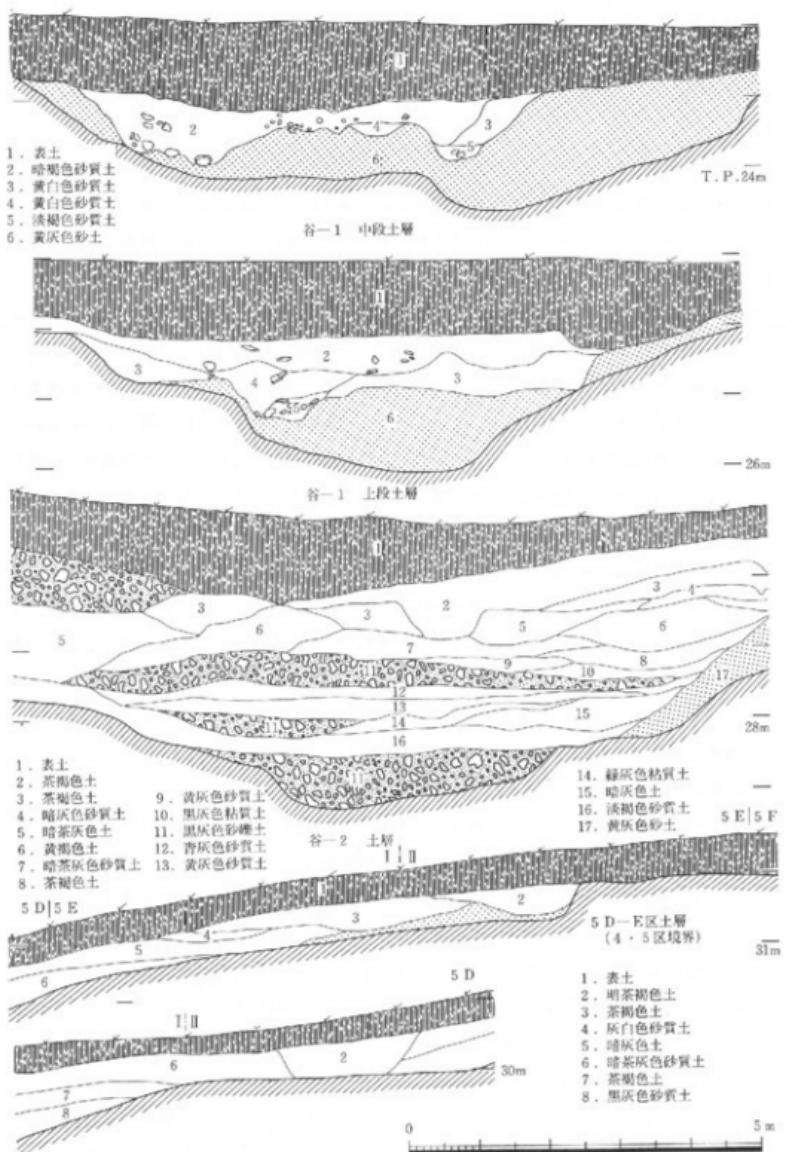


図-4 層序

5 D-E区の土層図に示すように、調査区内では、高所にあたる東部、尾根部分は表土を剥ぐとすぐに地表面が露出する。地形的に凝灰岩層が崖状になっている部分、あるいは谷に向かう部分には茶褐色土が混じったような砂質土が堆積している。遺物はこうした表土や薄い堆積土に包含されている。

谷1と2とでは堆積の様相を異にしている。谷1では下部に砂層が厚く堆積している。そして、この砂層を抉るように谷状、流路状の地形が形成され、そこに砂質土が堆積する。弥生土器片・石器片は下部の砂層からも出土するが、その他の遺物はすべて上部の砂質土あるいは表土からの出土である。谷2は深さが4m程もある大きな谷である。砂質土、砂礫土等が細かく堆積し、かなりの流水があったものと思われる。T.P.28.5m付近に堆積する砂礫土より上部には各時期の遺物が含まれるが、特に陶磁器類はこの上位層に限定される。下位層には土師器・皿や瓦器碗に代表される中世、中世以前の遺物が含まれている。ただし最下位層部の砂礫土からは弥生土器片しか出土していない。また、谷1では2層以下、谷2では11層以下から埴輪棺を構成する円筒埴輪片が出土している。また谷2の北側斜面に、地形に沿って堆積する17層上には、谷の肩部付近に平安時代の古墓が築かれている。このような谷の堆積と遺物、遺構の関係をみると、埴輪棺や古墓が築成された時代、すなわち古墳～平安時代にかけては、谷1、2共に流水や自然堆積のみられる本来の谷状地形を呈していたものと考えられる。その後、谷では中世～近世の時期に埴輪棺などの破壊を伴って谷が埋められた。さらに近世以降、谷1、2は陶磁器などを含む多量の土砂で埋め立てられて本来の地形を失い、一部には狭隘な谷口の水田、畠地として利用されていったものと思われる。

3. 遺構と遺構出土の遺物

a. 墓塚1（図-5、6）

5 D I区、旧地形では谷1、2に挟まれた西下する小尾根上に位置する。小尾根の端部は、尾根から切断された独立丘状の地形になっており埴輪棺はその頂部に築かれている。西端部は水路状の溝によって失われている。埴輪棺上半部も攪乱を受けており、棺を被覆するマウンド状、あるいは粘土糊状施設の在否は不明である。

墓塚は最大幅0.95m、現存長2.85m、深さ0.3mを測る。南側辺部は2段に堀り込まれており、棺は北辺に沿って置かれ、南辺部には幅0.2m以上の空間があった。墓塚底には小礫が敷きつめられている。棺はこの砂礫の上に置かれている。

棺身は1、2の円筒埴輪を、2の口縁部に1を差し込むようにした複棺式である。縦断面図に示したように、1、2の円筒埴輪の重ね合った部分には、両者の間に小礫が認められた。これは、棺身の水平を維持するための細工の一つであり、2の円筒埴輪が墓塚内西部に置かれた後に1の円筒埴輪を組み合わせたことを示している。さらに、完形の円筒埴輪を用いて狭い墓

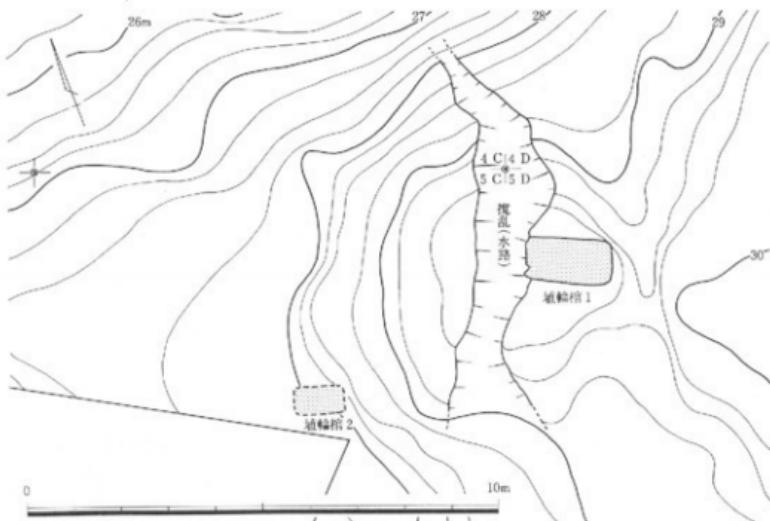


図-5 墓輪棺周辺の地形

境内でこうした作業を行なうことは困難であると思われ、擾乱によって埴輪棺の上半部は破壊されてはいるが、棺身を安置する際には半裁した状態のものが用いられたものと推定される。棺身の透孔は円筒埴輪片を用いて完全に塞がれていた。棺身小口の閉塞は、西側は擾乱のため不明であるが、東部は朝顔形埴輪によって行なわれ、花部口縁を1の円筒埴輪の口縁に重ねるように用いられていた。この状態では頭部の部分で大きな円孔が開口することになるが、ここをどのように閉塞していたのか、現状では不明である。この東側小口の蓋と棺身の接合部には、円筒埴輪の底部破片が2段に重ね合わされて置かれていた。おそらく死者の頭部を支持する枕として利用されたものであろう。この円筒埴輪は、棺身に用いられた1の円筒埴輪の底部の可能性がある。この枕を頭位方向とすると、S-67°-Eを示している。棺身の安定のため、数多くの埴輪片が棺身と墓底、砾床の間などに置かれていたが、棺身、棺身透孔の被覆、棺身の支持などに用いられた埴輪棺を構成する埴輪の総数は、少なくとも9個体以上になる。そして、これらは完形品がそのまま用いられたものは1つも存在せず、用途に応じて意識的に打ち割られて利用されたものであった。

埴輪棺1を構成する埴輪（図-7、8）

埴輪棺に用いられた円筒、朝顔形埴輪は9個体が確認された。円筒埴輪8、朝顔形埴輪1個体である。円筒埴輪のうち、接合はしないが3の底部分は1と同一個体の可能性がある。

円筒埴輪は外面の調整法の違いにより大きく2区分することができる。

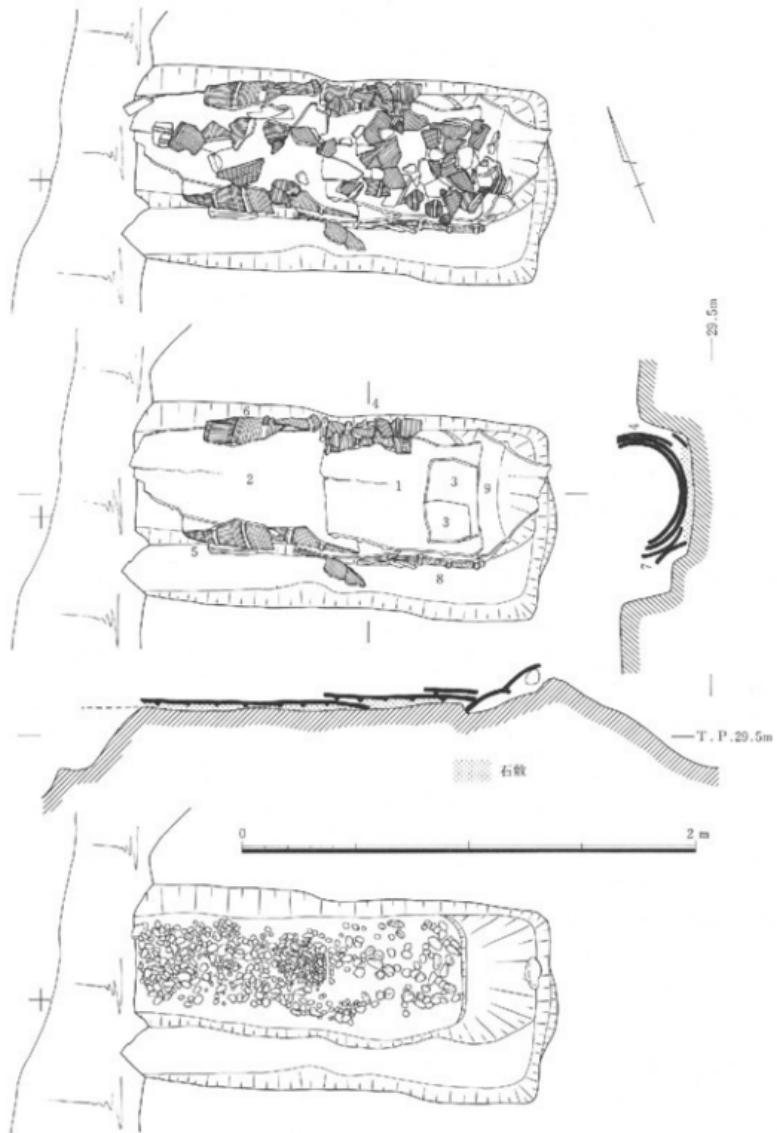


図-6 墓室 1 実測図

番号	種類	法	新	色調	焼成	胎土	内外面の手法	凸帯	凸帯間	透孔	里質	備考
1	円筒 埴輪	高 口径	(87.0) 53.0	淡黄 褐色	良好	やや粗 長石、雲母 くさり織	外面 タテハケ(9本/cm)+ナデ 口縁、凸帯ヨコナデ 内面 ヨコハケ(9本/cm)+ナデ、ケズリ 凸帯ヨコナデ	台形	12.0 ~ 13.5	円形	○	棺身東半
2	タ	高 口径	(99.5) 50.5	淡茶 褐色	タ	やや粗 長石、くさり織	外面 タテハケ(9本/cm)+ナデ、一部ヨコハケ 口縁、凸帯ヨコナデ 内面 ヨコ、ナナメハケ(11本/cm)+ナデ、 ケズリヨコナデ	台形	13.0 ~ 13.5	円形	○	棺身西半 ヘラ記号
3	タ	高 底径	(27.0) 36.0	淡黄 茶色	タ	粗 長石	外面 タテハケ(11~12本/cm) 凸帯、底部ヨコナデ 内面 ナナメハケ(11~12本/cm)+ナデ 底部、凸帯ヨコナデ	台形		○	枕として 使用	
4	タ	高 底径	(50.0) 42.5	明茶 褐色	タ	粗 長石、雲母 チャート くさり織	外面 タテハケ(10本/cm)+C種ヨコハケ (7本/cm, 10本/cm)凸帯ヨコナデ 内面 ナナメハケ(8本/cm)+ナデ、下平は 指オサリ	低い M形	13.0	円形	○	鳥魚の線 刻 ヘラ記号
5	タ	高 底径	(57.5) 38.0	明茶 褐色	タ	粗 長石、雲母 くさり織	外面 タテハケ(12本/cm)+C種ヨコハケ(12 本/cm)+ナデ 内面 ナナメハケ、ヨコハケ(12本/cm)+ナデ 底部指オサエ+ヨコナデ	低い M形	12.5 ~ 14.0	円形	?	
6	タ	高 底径	(41.0) 38.0	明赤 褐色	タ	粗 長石、雲母 くさり織	外面 タテハケ(7本/cm)+C種ヨコハケ(8本 /cm)、凸帯、底部ヨコナデ 内面 ナナメハケ(7本/cm)+ナデ	低い M形	12.5	方形	?	透孔は1 つの凸帯 間に4ヶ
7	タ	高 底径	(44.0) 41.0	明赤 褐色	タ	粗 長石、雲母 チャート くさり織	外面 タテハケ(8本/cm)+B種ヨコハケ(8 本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 ナナメハケ(8本/cm)+ナデ底部指オ サエ+ヨコナデ	低い M形	13.0 ~ 13.5	方形	○	
8	タ	高 底径	(42.6) 42.8	明禮 褐色	タ	粗 長石、雲母 くさり織	外面 タテハケ(8本/cm)、B種ヨコハケ(8 本/cm)、凸帯、底部ヨコナデ 内面 ナナメハケ、ヨコハケ(8本/cm)+ナ デ	低い M形	13.0 ~ 13.5	方形	○	
9	輪郭形 埴輪	高 径	(31.6) (61.6)	暗茶 褐色	タ	粗 長石、雲母 くさり織	外面 タテハケ(11本/cm)+ナデ凸帯ヨコ ナデ 内面 ヨコナデ(11本/cm)+ナデ	低い M形		○	棺東蓋 外面丹彩	

法量の単位はcm

表-1 墓輪棺1に用いられた埴輪観察表

a類：外面の調整は、基本的に1次調整としてのタテハケのみである（1～3）。

b類：外面の調整は、1次調整のタテハケ後、2次調整としてヨコハケを施す（4～8）。

a類の埴輪は棺身、枕として使用されたものに限定される。器形は口縁部がわずかに開く形態を呈し、底部は欠損していて全体の大きさは不明であるが、口縁部、底部の他に体部は少なくとも6段存在し、器高は1mを超えるものと思われる。3は枕として使用されたものであるが、調整、焼成、径などから1の底部と考えられる。透孔は円形で、体部の上から2、5段目に同一方向に1対づつ、計4個が穿たれる。凸帯はヨコナデ調整されるが、上部は強くナデ調整されていないため、断面形は台形を呈している。凸帯の設定については、埴輪器面に浅い凹線を巡らせた後に行なわれており、器面からの離脱が目立っている。これは凸帯の製作が、埴輪の器体が整えられ、ある程度粘土の乾燥が進んだ後に行なわれたことを示している。器体の製作には、幅4～5cmの粘土帯が積み上げられている。内面の調整はハケ調整が用いられるが、しばしばこのハケメの上を粘土が覆う部分が認められ、こうした痕跡は粘土帯3～4段毎にみることができる。おそらく、円筒埴輪の製作にあたり、粘土帯3～4段が積み上げられ、調整が行なわれた後に一定の乾燥期間があったことを示すのであろう（乾燥単位）。この乾燥

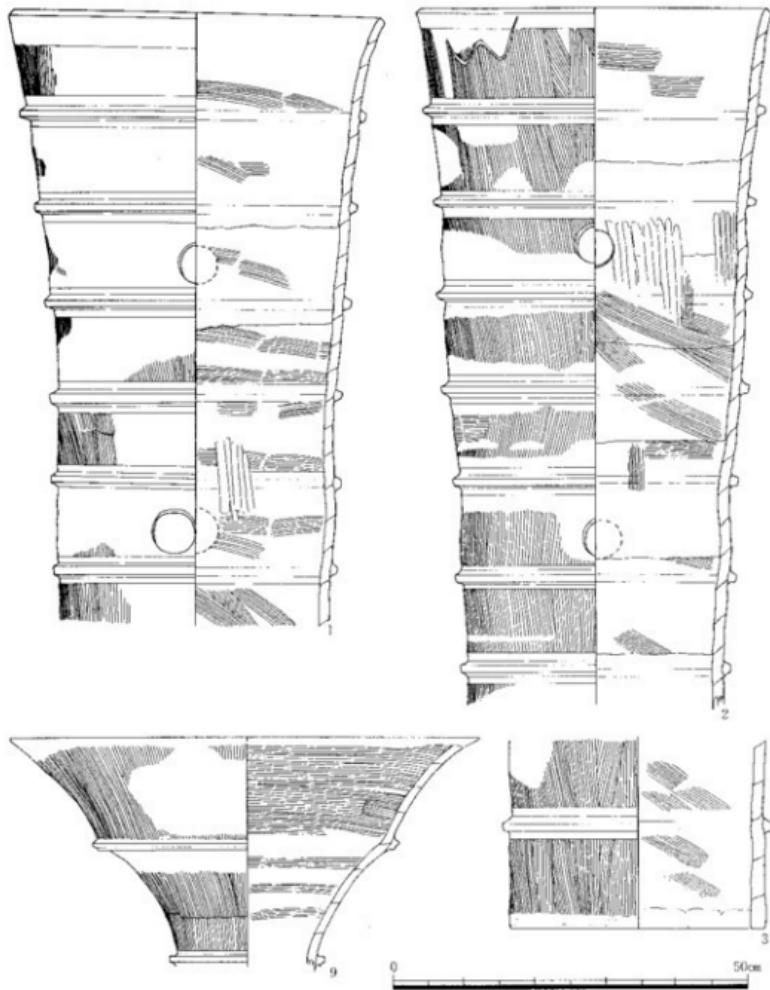


図-7 墳輪棺1の円筒、朝顔形埴輪

単位毎の円筒を結合する際、はみ出した余分な粘土を取り除くように、工具は不明であるが、内面には削り痕が残されている。

b類は2次調整のヨコハケ調整が施されるものであるが、その種類によって

b-1類：B種ヨコハケの施されるもの⁽³⁾（7、8）

b-2類：C種ヨコハケの施されるもの（4～6）

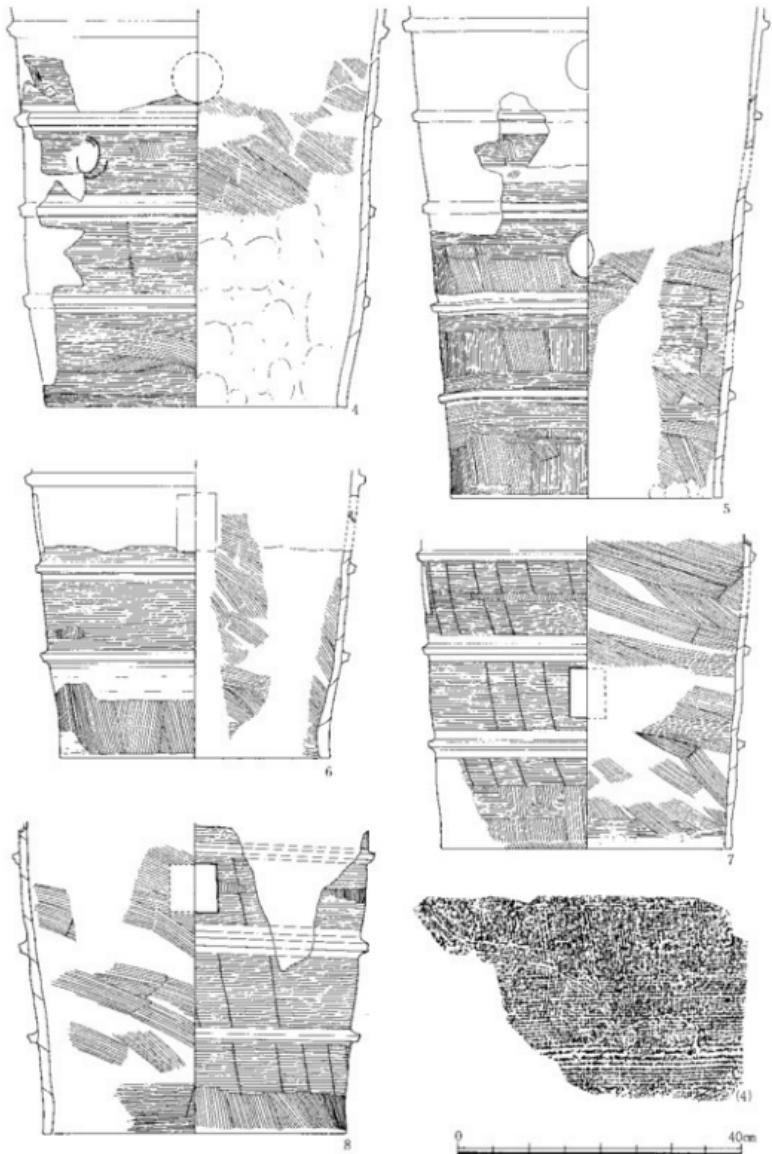


図-8 墓輪棺1の内筒埴輪

に区分される。b類の埴輪は底部から体部の破片で、全周の1/3程度のものであり、器形、調整法などについての観察は、あるいは不備な点があるかもしれない。

b-1類の埴輪には方形の透孔が穿たれている。7の円筒埴輪は、現状では体部の下から1段目に1対、2段目に90°方向を変えて1対の4個がみられ、8には体部下から2段目に1対の2個がみられる。凸帯は1次調整のタテハケメの上に貼り付けられており、断面形は低いM字形を呈している。器体は幅5~8cmの粘土帯を積み上げて製作される。内面の調整はヨコハケ、ナナメハケ調整が用いられるが、凸帯に対応する内面のナデ調整はみられない。また乾燥単位を示すような痕跡は明瞭ではない。胎土、色調、焼成は両者類似しており、これはb-2類の方形透孔をもつ6とも共通している。

b-2類の円筒埴輪には円形の透孔をもつものと、方形の透孔をもつものとがある。円形透孔の位置は、4では体部下から3段目に1対の2個、5では1段目に1対、2段目に90°方向を変えて1対、3段目に90°方向を変えて1対の6個、方形透孔の位置は、6で体部の下から2段目に2対の4個を確認することができる。凸帯はb-1類に類似し、断面形は低いM字形を呈し、1次調整のタテハケメの上に貼り付けられている。内面の調整にはヨコハケ、ナナメハケ調整が用いられる。4の体部には、ハケ調整後鳥?、魚の線刻がみられる。

b-1、2類の埴輪の調整には、各個体毎にハケメの精粗はあるものの、外面1、2次調整、内面調整一貫して同種の工具が用いられている。また、円形透孔をもつものと方形透孔をもつものとでは、色調に茶褐色系、赤褐色系という相違がみられるが、a類の円筒埴輪も含め黒斑のみられるものであり、共通した胎土を用いて製作されている。b類の埴輪は、川西宏幸氏の編年案に従えば、大略5世紀前半に考えられるものであるが⁽⁴⁾、調整の種類や透孔など細部では若干異なる点も見出すことができる。

朝顔形埴輪は花部のみであるが、外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整である。M字形の凸帯が付されており、外面は丹彩される。口唇部をわずかに欠いている。

b：埴輪棺2（図5、9）

埴輪棺2は第1期調査の際に発見されたものである。第4トレンチ東部の北壁際に、中世の土器や近世の陶磁器、あるいは礫などと共にその一部が検出されたため、誤って取り上げてしまった。擾乱を受けて欠損している部分はあるものの、器種構成として埴輪棺と考えられるものである。したがって、墓塚の確実な規

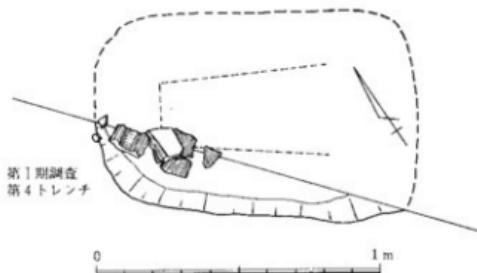


図-9 墓塚2実測図



図-10 墓輪棺 2 の円筒、朝顔形埴輪
孔は円形で、10は体部下から 1段目に 1対 2個、2段目に
方向を変えて 1個、3段目に方向を変えて 1対 2個、5段

番号	種類	法 長	色 調	施成	胎 土	内 外 面 の 手 法	凸 帯	凸 奇 間	透 孔	黒 斑	備 考
10	円筒 埴輪	高 (77.0) 底径 24.0	淡 青 褐色	やや 軟	粗 石英、雲母 くさり繊	外面 タテハケ(7本/cm)+C 帯ヨコハケ(5 本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 挖オサエ、ナデ	台形	10.2	円形	○	
11	〃	角 (30.8) 底径 25.6	〃	良好	やや粗 石英、雲母 くさり繊	外面 タテハケ(13本/cm)+C 帯ヨコハケ (13本/cm)、底部はタタテハケのみ、凸 帶ヨコナデ 内面 ナナメハケ(13本/cm)+ナデ、凸帯ヨコ	台形	8.2	円形	○	凸 帶 面 に 有 る 凸 張 部 には 想 像 付 着
12	朝顔形 埴輪 (花器)	口徑 55.4	明 褐色	〃	粗 石英、雲母 くさり繊	外面 タテハケ(7本/cm)+ナデ、凸帯ヨコ ナデ 内面 ヨコハケ+ナデ	方筋	×	×	○	

法量の単位はcm

表-2 墓輪棺 2 に用いられた埴輪観察表

目に同方向に1対2個、11は2段目に1対2個が穿孔されている。調整工具は個体毎に精粗の相違はあるが、1、2次調整共に同種のものが用いられる。内面の調整は、10はナデ調整、11はハケ調整後ナデ調整であるが、基底部は特に丁寧に調整されている。

朝顔形埴輪花部（12）は全周の1/3程度遺存しているのみであるが、おそらく棺小口の閉塞に用いられたものであろう。外面タテハケ調整後、頸部ナデ調整、内面はヨコハケ調整後ナデ調整である。埴輪棺1の朝顔形埴輪のように、外面の丹彩はみられない。

これらの埴輪は胎土、色調に共通性がある。また黒斑を有する埴輪もある。黒斑の有無は窖窯焼成の出現を証するものであり、時期的には5世紀前半と中半以降を画する大きな目安になるとされている⁽³⁾。その意味では、埴輪棺2に用いられた黒斑を有する埴輪は、5世紀前半代に比定できるものであろう。

c. 溝（図-11）

調査区東部、調査地内では最高所にあたる2G・H、3G・H区の平坦地に、弧状を呈する深い溝が検出された。溝幅は狭い部分で約1.6m、広い部分で約2.5mあり、深度は約0.3mを測る。現在1/4円程度であるが、溝東北部は次第に浅くなっていて、薄い表土の下に溝の肩部がすぐ検出されるという状況にあり、かなり削平が行なわれたものと考えると、本来半円程度の長さがあったものとも考えられる。

溝の堆積十層は大きく上、下層に分けることができる。上層は黄色、灰色系の砂質土で、溝外の凝灰岩地山面を覆う土砂でもある。下層は黒灰色土で炭化物片も含まれている。この下層の土は、調査地内では溝以外からは検出されていない。遺物は上、下層共に出土している。上層では弥生、古墳（埴輪含む）、奈良時代の遺物が出土し、瓦器片などもみることができる。調査地内全体の状況として、表土と、表土と地山間の薄い包含層からは、各時代の遺物が混在して出土しており、溝上層の遺物も同様の傾向にあるようだ。下層の黒灰色土から出土する遺物は、古墳時代の土器、埴輪が多く、中世以降のものはない。下層の遺物は1、2の土師器・甕以外は小片のため図示できなかったが、他に短かい立ち上がりをもつ須恵器・蓋杯や、「包含層出土の遺物」の項で分類したb、c類の埴輪が出土している。

こうした溝の形態や埋没の状況、堆積土と遺物の時期的な相応を勘案すると、この溝は古墳の周溝の可能性があろう。溝内側の円弧から推定すると、径11m前後の円墳が推定される。しかし、現状の地形では古墳の墳丘を示すような高まりは全く残っておらず、墳丘の盛土に相当するような堆積土もみられなかった。

仮にこの溝から古墳を推定すると、その立地はどうであろうか。全体としては調査地中央部を東西に延びる尾根の上に立地しているが、微地形からみると、尾根に南を区切られた谷の奥部上に立地しているようにみえる（図-3）。ただしこの谷は小さなものではなく、幅40m程の比較的大きなものである（図-1）。

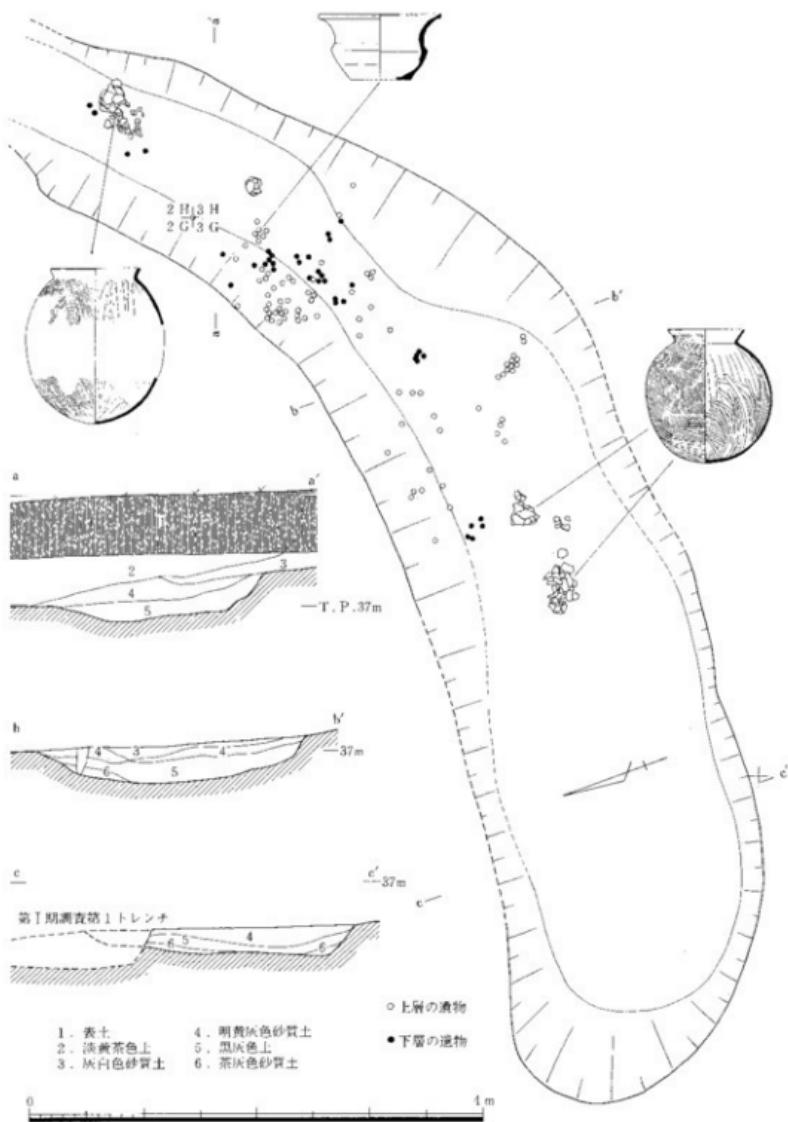


図-11 溝実測図

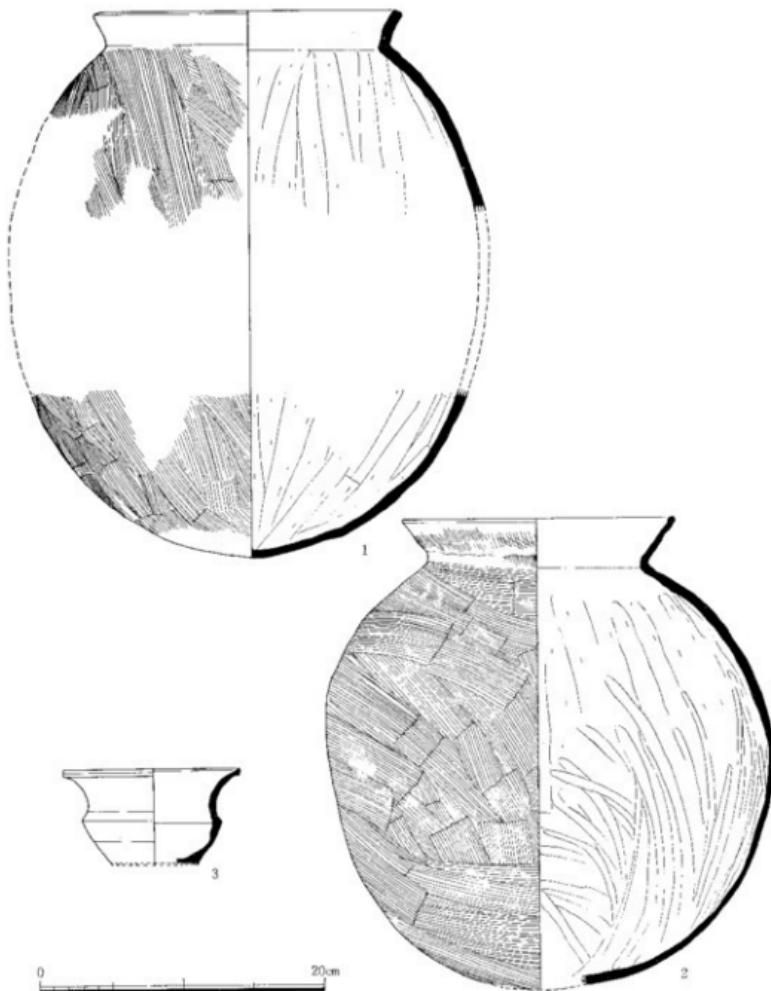


図-12 溝出土の土器

溝出土の土器（図-12）

1、2は下層出土の土師器・大形甕。1は上、下部接合はしないが同一個体と思われ、復元すると高さ39cm、口径22cmになる。口縁部ヨコナデ調整、体部外面ハケ調整（8本/cm）、内面ケズリ調整。明橙色を呈し焼成良好、胎土は粗く石英、雲母、くさり礫などが含まれる。2は高さ33.5cm、口径19.3cm、体部径31.6cm。口縁部はハケ調整後ヨコナデ調整、体部外面ハ

ケ調整（6本/cm）、内面ケズリ調整後ナデ調整。明橙色を呈し焼成良好、胎土は密で長石粒等を含む。3は上層出土の土器で須恵器・広口壺。高台は欠損しているが、高さ6.8cm、口径は12.4cm。内外面共に回転ナデ調整。灰白色を呈し焼成堅敏、胎土は密で微細な長石粒を含む。

1、2は5世紀代、3は8世紀代に相当するものであろう。

d. 古墓（図-13）

埴輪棺1の東南、調査地東南部の平坦面から谷2への傾斜変換点付近に位置する。形状は不整形を呈しており、実測図上では最大長1.22m、最大幅1.32m、最大深度0.32mを測る。検出時点ですでに墓塚、藏骨器の上半部が削平されていた。

墓塚内は炭で充填され、中央やや西寄りに、土師器・杯を蓋にした甕が倒立した状態で置かれていた。蓋は杯を逆さまに用いたものである。甕の中からは骨片等は検出されず、炭層中からも骨片、鉄釘等は検出されなかった。

藏骨器（図-14）

藏骨器として利用された土器は、土師器・高台付杯（4）および甕（5）である。4の杯は高さ4.6cm、口径16cm。杯体部の傾斜度は大きく浅い器形で、高台は高く外方に広がる。手捏ね器形を整えた後、内外面ともナデ調整される。赤橙色を呈し焼成良好、胎土は粗い。5

の甕は現存高12.2cm、口径16.6cm。口縁端部の断面形は方形を呈し、頸部は短かく体部は球形である。器壁は極めて薄く、内外面共にナデ調整されるが、外面肩部には指頭痕、体部には指腹によるナデ調整痕が残る。赤橙色を呈し焼成は良好、胎土は粗い。4については、杯というよりもむしろ蓋として作られたものかもしれない。これらの土器は10世紀代に相当するものだろう。

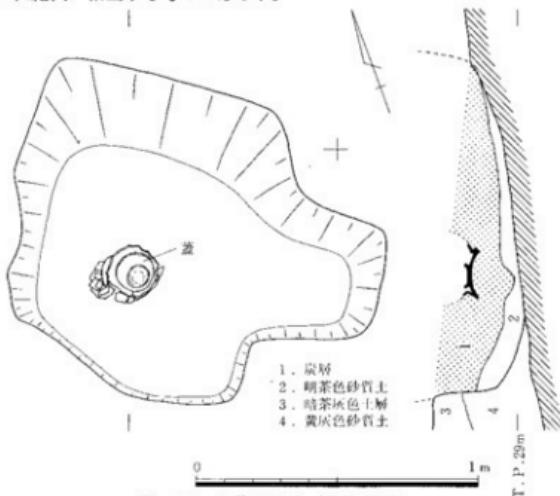


図-13 古墓実測図（5DⅣ区）

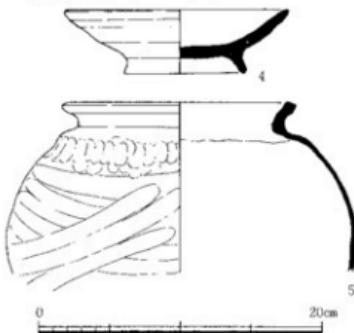


図-14 古墓出土藏骨器

e. 祭祀土塚（図-15）

調査地東南部の平坦面の中では北に位置し、中央部の尾根の南斜面裾部にある。長径0.8m×短径0.62m、深さ0.16mの浅い楕円形の土塚。内部に土師質皿（173）、丸瓦（19）が置かれていた。皿は正位に、丸瓦は玉縁付きの半損品のもので凹面を上に向けていた。意味は解らないが、何らかの祭祀的な意図をもつものであろうか。

f. ピット（図-16）

ピット1、2は調査地東南部の平坦面に、地山

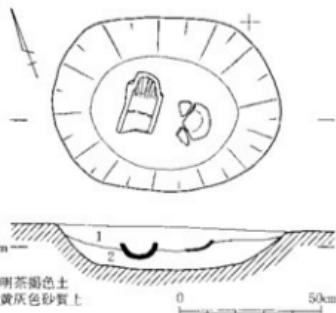


図-15 祭祀土塚実測図（4 F II区）

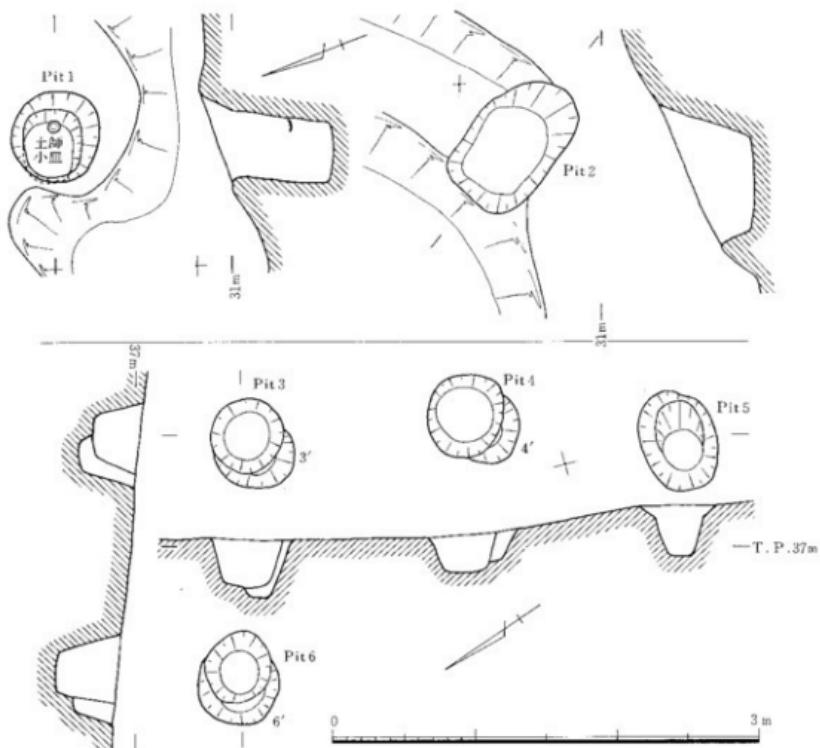


図-16 ピット1、2（4 E IV、5 E I区）、3～6（3 G III区）実測図

を削り込んで造り出された西南から東北に上るような道状のスロープの南、北に位置する。1は長径0.65m、深さ0.92mの円形、2は長径1m、短径0.65m、深さ0.62mの楕円形を呈す。1からは土師皿(155)が出土している。1、2は対をなし、柱を2木もつのような建物、例えば門になるのであろうか。その時期は明確ではないが、14世紀以降ではあろう。

ピット3は長径0.52m、深さ0.32m、4は長径0.58m、深さ0.26m、5は長径0.72m、深さ0.36m、6は長径0.5m、深さ0.42mの円形を呈し、調査地東部のT.P.37m付近の平坦面に位置している。各ピットは約1.6mの間隔で並んでおり、建物の柱穴かもしれない。また、それぞれのピットは同位置で重複している(3' ~ 6')。

g. 井戸(図-17)

6F区、湿地の泥土を取り除くと、地山面から掘り込まれた井戸を検出した。湿地は周辺の平坦地や斜面が耕作地として利用されていた時期には、灌漑用の溜池として機能していたもので、井戸はそれ以前のものである。出土遺物からみて、近世以降の井戸であろう。

長辺2.5m、短辺1.8m、深さ1mの長方形の掘り方の南寄りに、径1m程の掘り込みを設ける。長方形掘り方には、円形の掘り込みの部分を除き、約0.5mの深さで疊が充填されていた。円形の掘り込みの底には竹編籠が置かれ、井戸内からは井戸枠や上屋に用いられたと思われる板材、丸木材、中・近世の遺物が出土した。

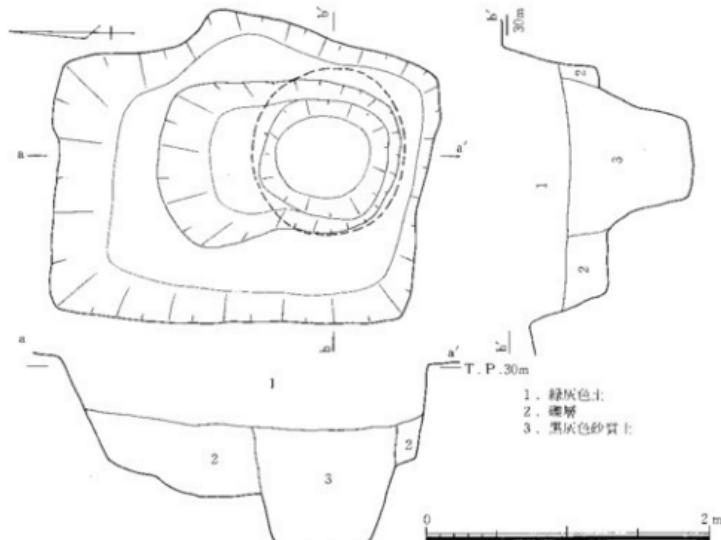


図-17 井戸実測図(6F区)

4. 包含層出土の遺物

埴輪、中世以降の土器、陶磁器、瓦を中心に多量の遺物が出土している。先述した遺構出土の遺物以外はすべて2次的な出土状況にあると判断し、包含層出土遺物として一括し報告する。

弥生土器、石器は谷1、2、3G区を中心に出土している。埴輪は圧倒的に谷1、2からの出土量が多い。土師器、須恵器も谷1、2からの出土量が多いが、3G区からも比較的まとまって出土している。中世の土器類、瓦では谷1、2、4～5F区、5G区からまとめて出土している。4～5F区、5G区は崖下にあたり、中世の遺物をまとめて廃棄した観がある。陶磁器類は谷1、2からの出土量が多い。

a. 繩文・弥生土器（図-18）

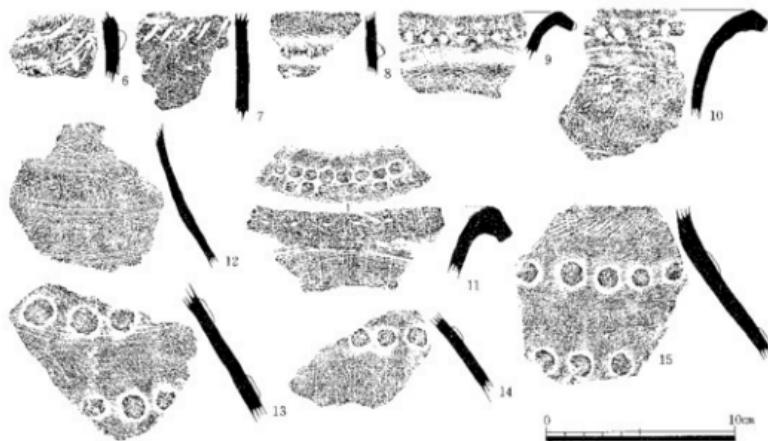
6～8は繩文土器、6は曲線的な隆帯の外側に粗い間隔で刺突がみられる。7は横方向に連続して刻目が施されている。8は隆帯の上に粗い間隔で刻目が施されている。6、8の所属時期は不明であるが、8は刻目突帯を口縁部と胴部にもつ晩期後半の土器であろう。

9～23は弥生土器、9～11は壺の口縁部、12～15は頸部～胴部である。出土した弥生土器片は約350点を数えるが、大半は無文のものであり、次に図示したような櫛描の直線文、廉状文の壺の破片が多い。いずれも角閃石、雲母、長石などを含み茶褐色を呈している。16は太頸壺口縁部と思われる。口径28.5cmに復元され、櫛描廉状文の上に円形浮文が施されている。角閃石、長石、雲母を含み暗褐色を呈す。17、18は脚・台部。19～21は高杯。19の杯部と脚部は接合しないが同一個体と思われる。外面ミガキ調整、杯部内面暗文風のミガキ調整がみられる。20、21はハの字状に開く脚部をもつ。いずれも角閃石、雲母を含み暗褐色を呈している。22は小形の土器。外面はミガキ調整、内面はナデ調整される。わずかに石英粒を含み黄茶褐色を呈す。23は長頸壺、高さ23.8cm、口径11cm、胴径14.8cm。内外面共にミガキ調整されている。長石、クサリ礫を多く含み明灰茶色を呈す。

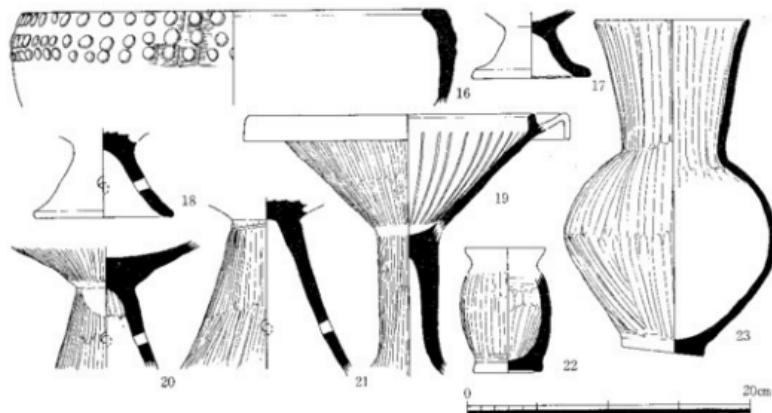
弥生土器は櫛描文で飾られた中期後半～後期のものである。胎土に角閃石、雲母を含み茶褐色系の色調を示すものが圧倒的に多く、いわゆる生駒西麓産の胎土をもつ土器が大半である。しかしわずかではあるが櫛描文で飾られた壺には黄白色系の色調を示すものがあり、また後期の長頸壺も含めくさり礫が胎土中に観察できるものも存在している。土器片はそれ程磨滅しておらず、谷の周辺部から落ち込んだものではあろう。

b. 石器（図-19～23）

136点の石器が出土している。すべてサスカイトを石材にする。磨製石器は出土していない。組成は石鎚・1、同未製品・1、小形尖頭器・1、石槍・2、削器・10、搔器・1、石核・9、剝片、碎片・111点である。石器の出土する地区では弥生土器、わずかではあるが繩文土器も出土しており、石器の所属時期を明確にすることは難しい。風化度には個体ごとにかなりの違いがあるが、本遺跡が丘陵地形にあり、二次的な出土状況であることを考慮すれば、遺存した



0 10cm



0 20cm

図-18 繩文（4～6）・弥生土器

環境にもそれぞれかなりの相違があり、風化度に違いを示すことも考えられる。こうした点も時期判別を困難にしている要因である。全体としては、石器は風化度が少なく、石核は風化度が大きい。また剣片、碎片類はかなりバラツキがある。

石鏃（1）は整った形状をもちワタクリは比較的ふかい。小形尖頭器（3）は基部が平縁になり、先端折損面から再調整されている。比較的厚みがあり、調整加工も進んでいないので加工途中で折損したものかもしれない。石槍（4、5）は細身のものである。两者とも断面形が菱形に仕上げられている。4の調整は粗雑であるが、5は丁寧に調整され、側縁は細かい鋸歯

No.	器種	長さ	幅	厚さ	素材	石質	風化度	備考
1	石礫	2.60	2.00	0.50	?	サスカイト	3	完形。
2	小石礫	5.05	3.20	0.95	横長剝片	"	3	木製品。
3	小形尖頭器	(4.95)	2.85	1.20	"	"	3	先端折れ面から再調整。
4	石槍	(12.40)	2.50	1.50	?	"	3	基部折れ。
5	"	(17.85)	2.20	1.20	?	"	3	"
6	削器	9.10	4.40	1.60	横長剝片	"	2	片刃、刃角大きい。
7	"	3.35	7.40	1.30	"	"	3	片刃、刃角大きい。
8	"	3.70	(4.75)	0.40	"	"	2	片刃。
9	"	4.90	6.70	0.80	"	"	2	片刃。
10	"	4.45	6.40	1.10	"	"	3	両刃、打面を強く全縁部。
18	"	7.70	7.20	2.50	縱長剝片	"	1	片刃、打面再生剝片を利用。
	"	5.25	4.40	0.85	"	"	2	片刃、1側縁部。
	"	4.75	(3.70)	0.60	?	"	3	片刃、1側縁部。
	"	3.70	(4.85)	0.70	縱長剝片	"	2	両刃、2側縁部。
	"	(3.10)	(2.20)	0.50	横長剝片	"	3	片刃、1側縁部。
	研器	3.30	(3.40)	0.60	"	"	2	片刃、刃角大きい、打面部。
11	石核	8.50	9.05	4.65	偏平礫	"	1	チョッピングトゥール状。
12	"	10.10	10.00	6.85	亜角礫	"	2	縦長剝片を剝離。
13	"	8.00	8.35	2.50	剝片	"	2	横長剝片剝離、作業面1つ。
14	"	(8.80)	6.25	1.85	"	"	3	横長剝片剝離、作業面2つ。
15	"	8.05	14.80	3.95	偏平礫	"	1	横長剝片剝離、作業面1つ。
16	"	4.95	6.15	3.00	剝片	"	1	横長剝片剝離
17	"	3.50	6.35	1.30	"	"	2	横長剝片剝離
	"	5.65	7.15	1.70	"	"	2	横長剝片剝離
	"	7.50	8.05	1.90	"	"	2	横長剝片剝離、折れ面打面。

単位はcm。風化度は灰白色を1、黒色を3とし、その中間を2と表わした。

表-3 石器観察表

縁を呈している。削器は素材剝片の側縁部を刃部とするもの(4)、打面縁に対する先縁部を刃部とするもの(7~9)、周縁を刃部とするもの(10)とがある。横長剝片を素材とするものが多く、刃部の作出は表裏どちらか片面のものがほとんどである。弥生時代の石器に通有な側縁部の施された定形的な削器は存在しない。撃器は横長剝片の打面を取り除くように刃部を作出したものであるが、破損品のため全形は不明である。

石核には剝出する目的剝片の形状により縦長剝片を剝離するもの(12)、横長剝片を剝離するもの(11、13~17)がある。12は亜角礫を分割して石核の原材としたもの。分割面上に剝片剝離作業面を設定し、特に石核調整、打面調整することなしに自然面を打面として縦長剝片を剝離している。最終剝離面の剝離角は約70.5度である。横長剝片を剝離する石核には次の類型がある。a: チョッピングトゥール状になるもの(11)。偏平礫を原材とする。剝離角84度。b: 偏平礫の平坦面を剝片剝離作業面として設定するもの。打点の移動が全周に及ぶもの(14、

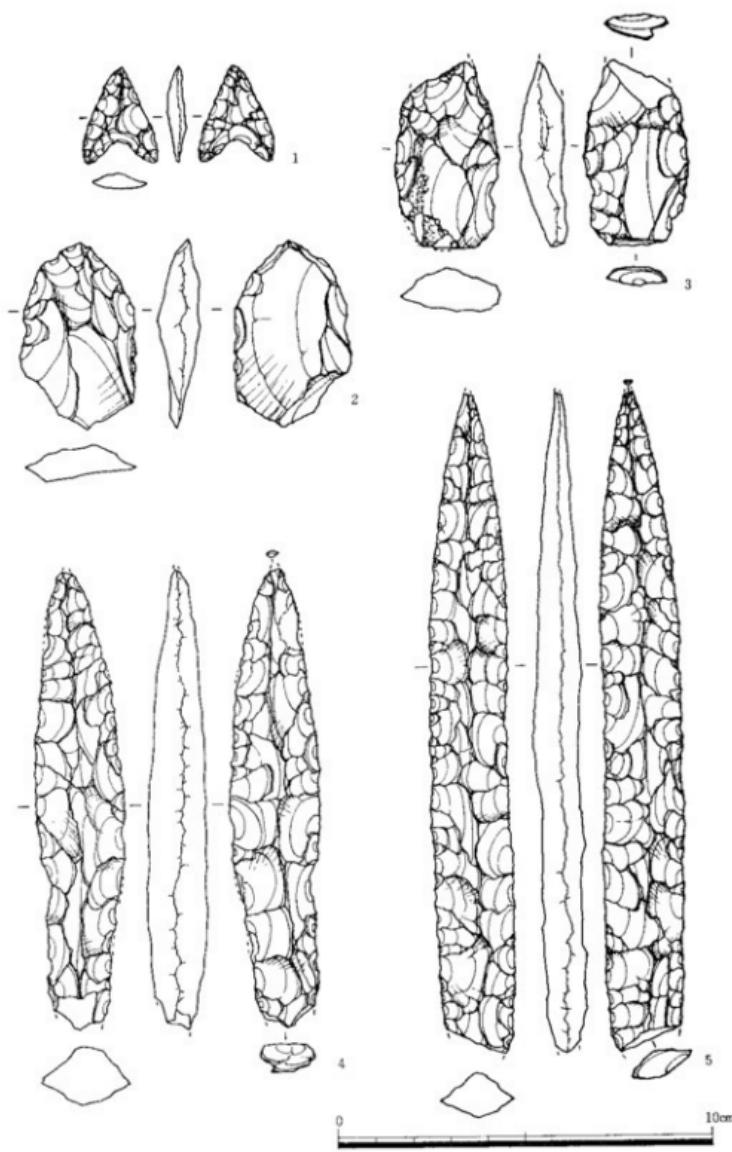


図-19 石器 (1)

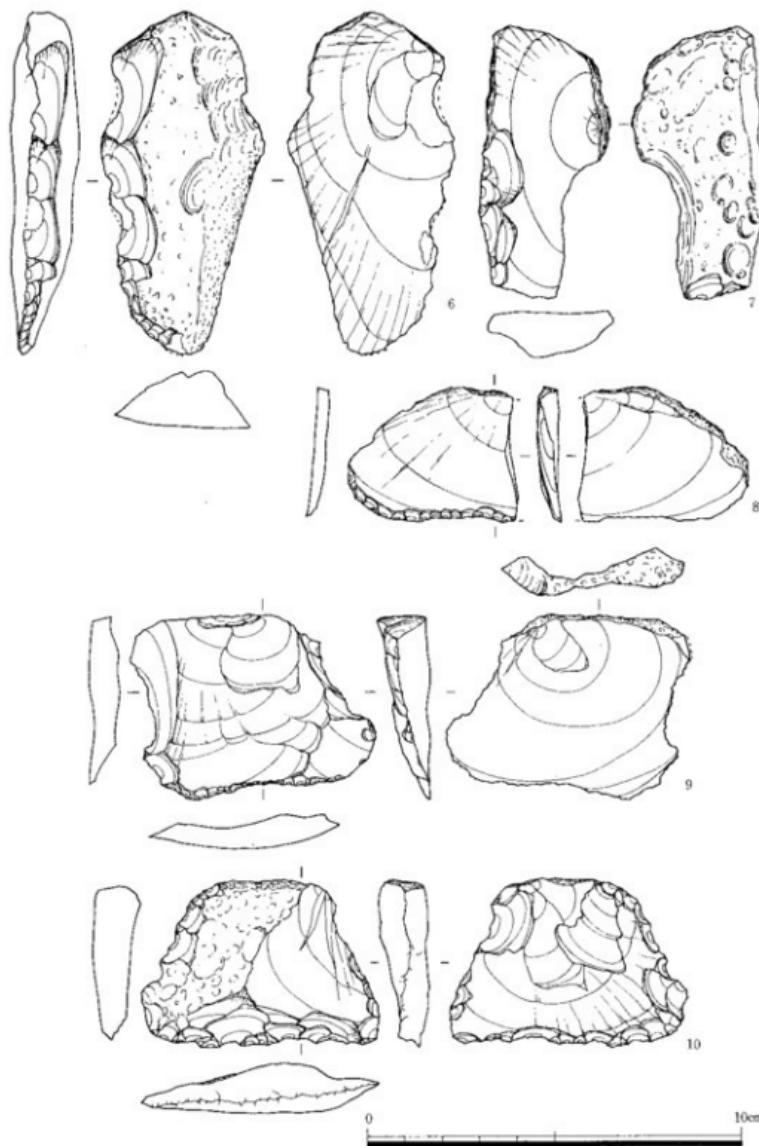


図-20 石器 (2)

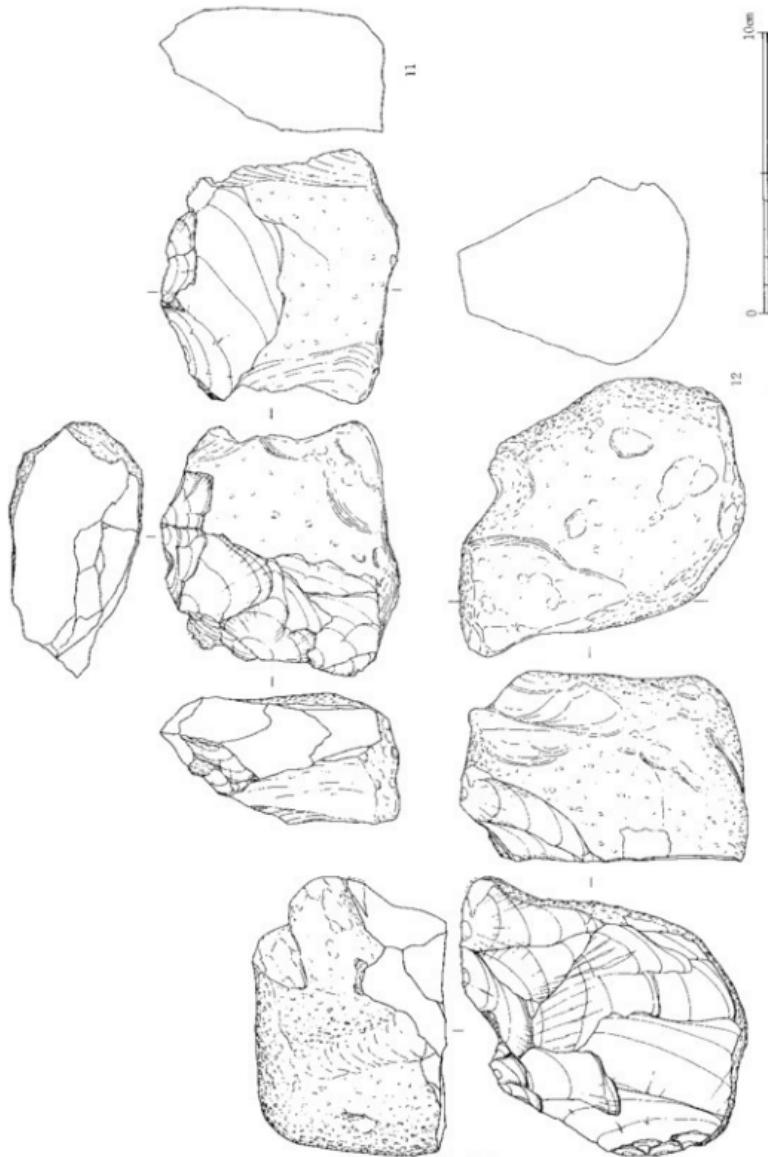
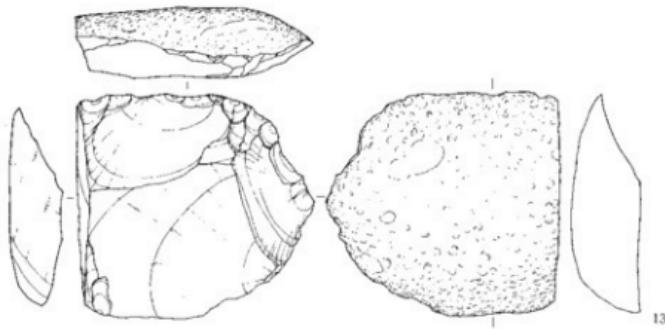
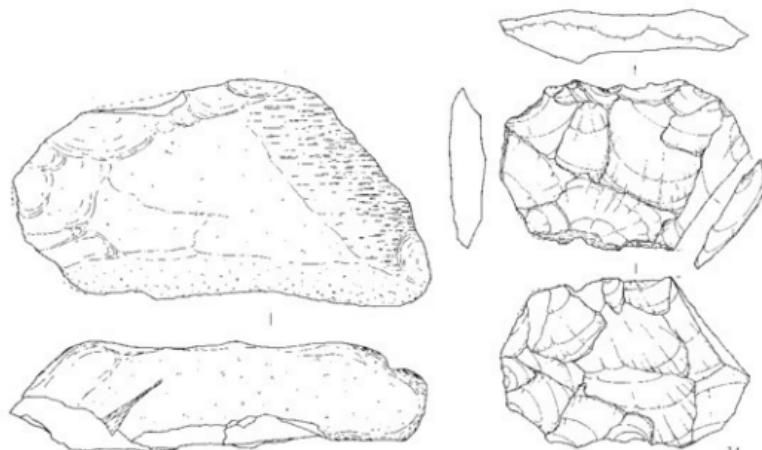


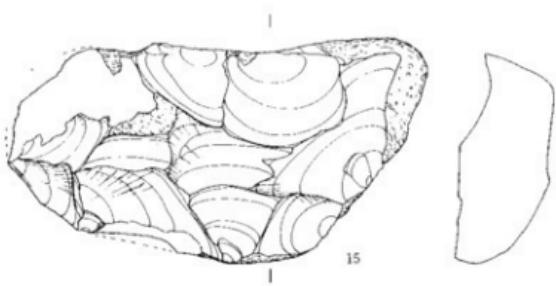
図-21 石器(3)



13



14



15

0 10cm

図-22 石器 (4)

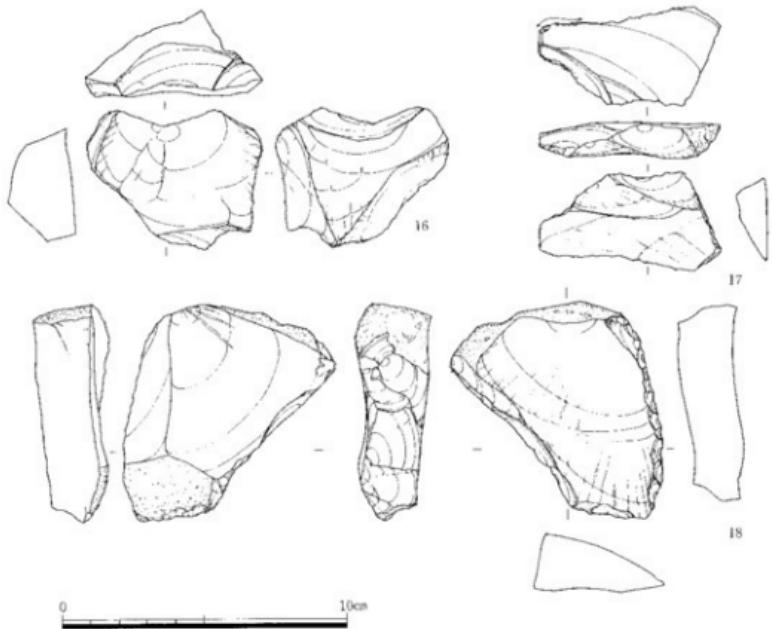


図-23 石器（5）

15)、1縁辺に限られるもの（13、17）がある。剥片を原材とするものが多いが、15は原縫を使用している。いずれも打面調整は行なわれず、自然面あるいは平坦な剝離面を打面とする。14は表裏両面に作業面が設定されている。剝離角は、13は117度、15は97度、17は121度。c：方柱状の分割縫を原材とし、打点を後退させながら1つの作業面から1つの剥片を剥離していくもの（16）。平坦剝離面を打面とする。剝離角121度。

18の存在は注意される。削器として調整されているが素材は縦長剥片を剥離する石核の打面再生剥片である。表面の大きな剝離面を打面とし、連続的に縦長剥片を剥離した痕跡が右側縫に残されている。先に示した縦長剥片石核と合わせると、自然面を打面にするものと打面の更進を行なうものという二種類の縦長剥片石核が存在したことになる。ただし、こうした剥片剥離過程に見合う剥片は出土していない。

チョッピングツール状の石核、縦長剥片石核は、仮に弥生時代の石核として時期を与えると、多様な横長剥片剥離過程をもつ弥生時代の石器生産技術の中で、かなり特異な位置を示すように思われる。周辺地域の当該期における石器生産の様相が明らかでない現状では、こうした石器に時期を与えるには資料的に不充分であろう。⁽⁴⁾今後の事例の増加を待って、再検討していきたい。

c. 塗輪

埴輪棺に使用されたものを除き約3300点の埴輪片が出土している。小片のものが多く、完形のもの、あるいは接合等により器形を復元できるものは極めて少ない。他の遺物同様谷内から出土したものが多く、この中には谷の肩部に検出された埴輪円筒棺の破片と思われる個体も存在する。

円筒埴輪（図-24～26）

円筒埴輪は体部の外面調整、凸帯の形状、透孔等をもとに区分することができる。ただし、破片のために黒斑の有無やヨコハケの詳細についての判断は困難なものが多い。

a類：1次調整としての断続的なナナメハケ調整、断面M形に近い高い凸帯、三角形透孔。

b類：1次調整タテハケ、2次調整ヨコハケ（B種）調整、低い台形を呈す凸帯、円形透孔。⁽⁷⁾

c類：1次調整タテ～ナナメハケ調整、低い台形、半円形、三角形を呈す凸帯、円形透孔。

a類（26）は有黒斑で、外面は丹彩される。口縁部は外曲し、端部は上方につまみ上げられている。内面はハケ調整後ナデ調整される。凸帯間に2対の透孔が上下で方向を変え穿たれる。6～7cm幅の粘土帯を積み上げて製作され、凸帯は指によりナデ調整される。

b類（13、15～18）には器壁の厚さが7～8mmのものと1cmを超えるものがあり、大きさに違いがあったものと思われる。内面はナデあるいはハケ調整されるが、凸帯に対応する部分の調整は特に見られない。凸帯は低い台形を呈し幅の広いものが多く、上面には深い線状痕が残るものが多い。

c類（14、19～23、27～33）の埴輪には完形のもの（30）が存在し、三本の凸帯をもち口縁部、底部、体部2段から構成される。体部には各段1対、4個の円形透孔が穿たれている。凸帯の形状をもとに3種類に区分できそうである。c-1類（19～21）はb類の凸帯に近く、c類の中では比較的高い凸帯をもつ。その調整も、b類同様に深い線状痕が認められる。さらに内面にはハケ調整の痕跡をとどめているものが多く、凸帯に対応する部分も同様に調整されている。c-2類（23、27～31）は極めて低い台形、あるいは半円形状の凸帯をもつもの。凸帯の上下には繰り返し指ナデ調整痕をとどめている。内面はタテ、ナナメナデ調整がほとんどで、ハケメのみられるものは少ない。また凸帯に対応する部分にはヨコナデ調整が認められる。c-3類（32、33）は三角形の凸帯をもつもの。外面は丁寧にタテハケ調整が行なわれ、内面はナデ調整が行なわれる。凸突に対応する部分に特別な調整は認められない。

朝顔形埴輪（図-24、26）

頸部から口縁部分がはとんどで、体部を含めた全体形を復元できるものはない。花部の凸帯の形状には2種類がある。24、34～36、38のように比較的高い方形～台形の形状を呈すものと、37のように極めて低い偏平台形を呈すものである。内外面ともに丁寧にハケ調整され、内面では、その後ナデ調整もみられる。35、36の外面ハケ調整は、1次調整後細かいハケメが等間

番号	種類	部位	法量	色調	焼成	胎土	内外面の手法	凸帯	透孔	黒斑	備考
26	円筒 埴輪～体部	口縁部	口径 39.0	明黄 茶褐色	良好	粗	外面 ナナメハケ(6~7本/cm)、口縁、凸帯ヨコナデ 内面 ナナメハケ+ナデ	後の鏡 い台形	三角 4ツ	○	丹影
13	〃	口縁部	口径 34.0	暗黄 灰色	堅緻	やや粗	外面 ヨコヘナナメハケ(10本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 ナナメハケ(10本/cm)	台形	?	?	
14	〃	口縁	口径 22.0	淡茶 褐色	〃	密	外面 ナナメハケ(8本/cm) 内面 ナデ		?	?	
22	〃	口縁	口径 21.0	茶褐色	〃	〃	外面 タテハケ(7本/cm) 内面 ナデ		?	?	須恵質
15	〃	体部	?	黄褐色	良好	〃	外面 ナナメハケ+B種ヨコハケ(6本/cm)、 凸帯ヨコナデ 内面 ナナメハケ(8本/cm)	台形	?	?	
16	〃	〃	?	明黄 茶褐色	〃	やや粗	外面 B種ヨコハケ(9本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 ナデ	〃	?	?	
17	〃	〃	?	〃	堅緻	〃	外面 タテハケ+B種ヨコハケ(8本/cm)、凸 帯ヨコナデ 内面 ナデ	〃	?	?	
18	〃	〃	?	〃	〃	〃	外面 タテハケ(10本/cm)+ヨコハケ(8本/ cm) 内面 ナデ		?	?	
19	〃	〃	径 18.0?	黄褐色	〃	密	外面 ナナメハケ(10本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 タテハケ(6本/cm)	台形	円形	?	須恵質に 近い
20	〃	〃	径 20.5?	黄茶 褐色	〃	〃	外面 ナナメハケ(8本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 ナナメハケ(8本/cm)	〃	〃	?	丹影
21	〃	〃	径 21.5?	淡赤 褐色	良好	〃	外面 ナナメハケ(6本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 ナナメハケ(6本/cm)	〃	〃	?	
23	〃	〃	径 17.0?	灰色	〃	やや粗	外面 ナナメハケ(10本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 ナデ	低い 台形	?	?	
27	タ	口縁部 ～体部	口径 24.3	明白 褐色	堅緻	〃	外面 ナナメハケ(5本/cm)、凸帯ナデ 内面 ナナメナデ、凸帯部ヨコナデ	〃	円形	?	ヘラ記号
28	タ	体部	径 18.8	黄灰 白色	〃	粗	外面 ナナメハケ(5本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 タテナデ、凸帯部ヨコナデ	〃	〃	?	
29	タ	底部	底径 14.0	〃	〃	〃	外面 ナナメハケ(8本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 タテナデ	〃	〃	?	
30	タ	完全形	口径 22.4 高 40.6	明茶 褐色	良好	やや粗	外面 ナナメハケ(6本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 タテナデ、凸帯部ヨコナデ	〃	円形 4ツ	×	ヘラ記号
31	タ	底部	底径 15.0	黄灰 白色	堅緻	密	外面 ナナメハケ(9本/cm)凸帯ヨコナデ 内面 タテ、ヨコナデ+タテハケ(8本/cm)	手円形	円形	?	
32	タ	底部	底径 13.0	明茶 褐色	〃	やや粗	外面 タテハケ(6本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 ナデ	二角形	〃	?	
33	タ	体部 ～底部	底部 13.0	〃	良好	〃	外面 タテハケ(6本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 ナデ、手捏ね	〃	円形 4ツ	?	
24	朝顔形 埴輪	頭部	?	淡茶 褐色	良好	やや粗	外面 ナナメハケ(10本/cm) 内面 ヨコハケ(10本/cm)	台形	?	?	

法量の単位はcm

表-4 包含層出土円筒、朝顔形埴輪観察表(1)

番号	種類	部位	法量	色調	焼成	胎土	内外面の手法	凸帯	透孔	黒斑	備考
25	朝顔形 埴輪	肩部	?	淡茶 褐色	良好	やや粗	外面 ナナメハケ(10本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 ナデ	低い 台形	?	?	
34	〃	頭部	径 28.5	明赤 褐色	〃	〃	外面 タテハケ(6本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 ヨコナデ(6本/cm)	台形	?	?	
35	〃	〃	径 27.7	淡白 褐色	〃	密	外面 ナナメハケ+タテハケ(9本/cm)、凸帯 ヨコナデ 内面 ナナメハケ(9本/cm)	〃	?	?	
36	〃	〃	径 24.0	淡黄 茶色	〃	粗	外面 タテ、ナナメハケ(8本/cm)、+ナナメハ ケ(12本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 ヨコハケ、ナナメハケ(8、12本/cm)	〃	?	?	丹彩
37	〃	〃	径 23.5	淡白 褐色	〃	密	外面 ナナメハケ(8本/cm) 内面 ナナメハケ(8本/cm、12本/cm)	低い 台形	?	?	
38	〃	〃	径 21.5	淡黄 赤色	〃	やや粗	外面 タテハケ(7本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 ナナメハケ(7本/cm)	台形	?	?	
39	〃	肩部 —体部	径 21.0	明茶 褐色	〃	やや粗	外面 ナナメハケ(6本/cm)、凸帯ヨコナデ 内面 ナデ、手捏ね	半円形 4ヶ	円形	×	ヘラ記号
40	〃	〃	径 18.0	淡白 褐色	やや 軟	〃	外面 ナナメハケ(8本/cm) 内面 ナデ	〃	円形	×	ヘラ記号

法量の単位はcm

表-5 包含層出土円筒、朝顔形埴輪観察表(2)

間に施されており、多分に装飾的要素が強いもののように思われる。

体部は円形の透孔を2対もち、ナナメハケ調整が施されるもので、半円形の低い凸帯をもつ。内面はナデ調整される。肩部と体部の境が屈曲するもの(40)としないもの(39)とがある。

形象埴輪(図-27、28)

形象埴輪としては蓋、家形埴輪が出土しているが、量的には多くない。

蓋形埴輪の羽根飾りにはハケ調整後長方形の透孔や線刻をもつもの(41、42)、ハケ調整だけのもの(43、44)の2種類がある。前者は明橙色を呈し焼成良好、胎土はやや粗く長石、石英、雲母粒を含む。表裏で若干線刻位置が異なり、4個体出土している。後者は黄褐色を呈し焼成良好、胎土には長石、石英、くさり礫等が含まれ、線刻をもつものとは異なる。笠部分(45)は直径46.5cm、高さ32.5cm。円筒器台に1対の円孔が穿たれる。外面はハケ調整後一部ナデ調整、内面はナデ調整。黄褐色を呈し焼成良好、胎土には長石、石英、くさり礫が含まれる。色調、胎土からみると、ハケ調整のみの羽根飾りと組み合わるものであろう。

家形埴輪は数個体あるが、いずれも小片のため全形は復元できない。屋根(46~49)には傾斜のきついものと緩やかなものがある。48の妻部分には方形の小孔が貫通する。壁体部(50~57)には底部近くに水平の縁がつくもの(56)と凸帯が貼り付けられるもの(57)とがある。幅8~8.5cmの粘土帶貼り付けにより柱が表現されている。タテハケ調整後一部ナデ調整、その後直線状、矢羽根状の線刻を横走、梯子状の線刻を縦走させるものがある。色調には黄褐色、赤橙色のものがあり、胎土はやや粗く、石英粒が目立つ。

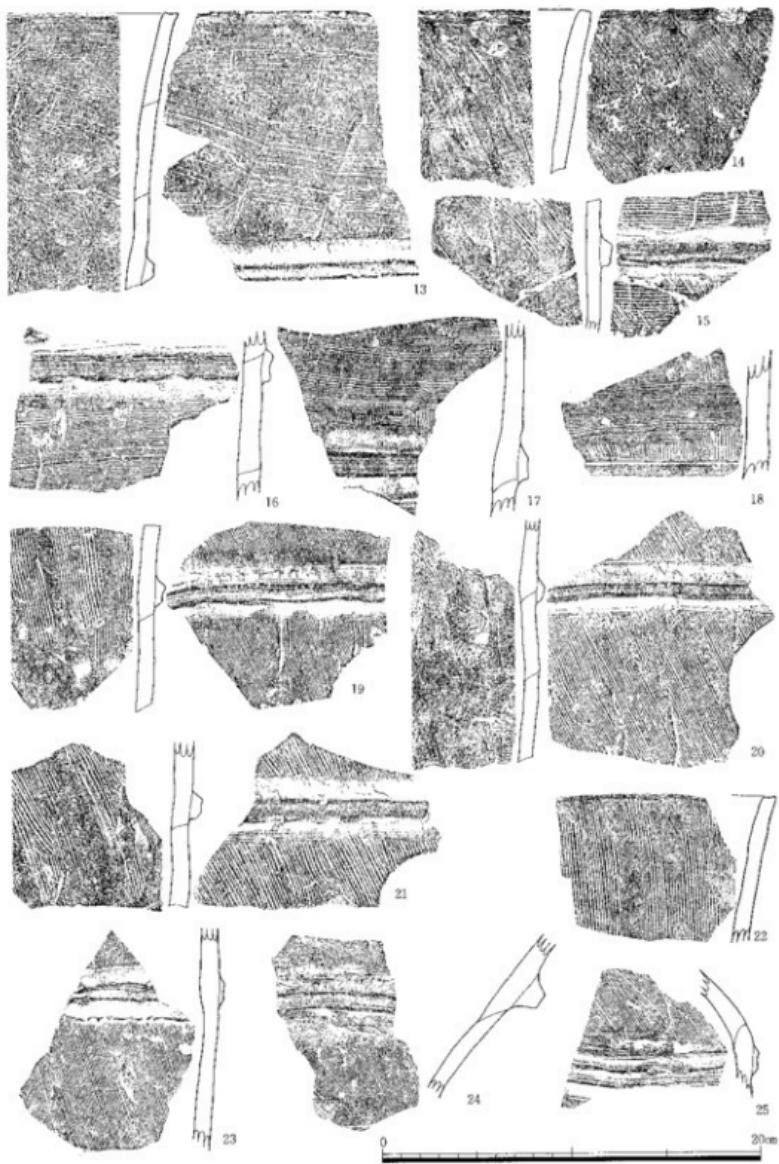


図-24 円筒埴輪(1)、朝顔形埴輪(1)

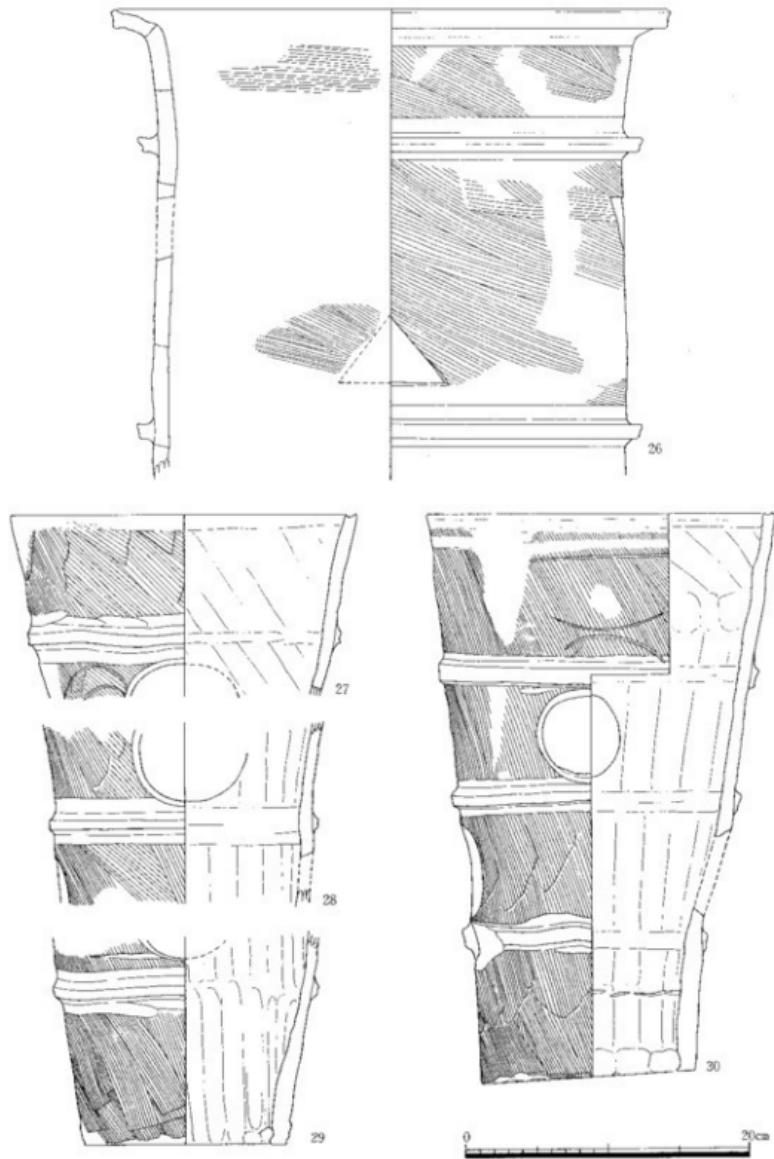


図-25 円筒埴輪(2)

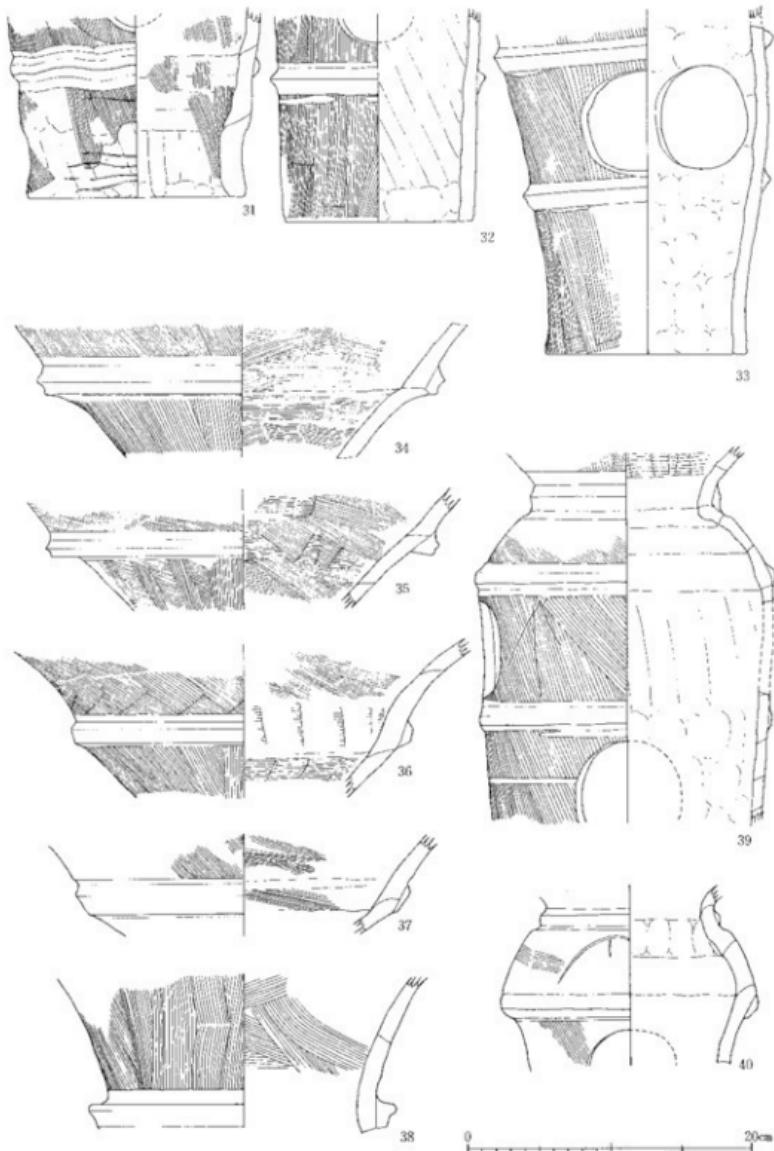


図-26 円筒埴輪（3）、朝顔形埴輪（2）

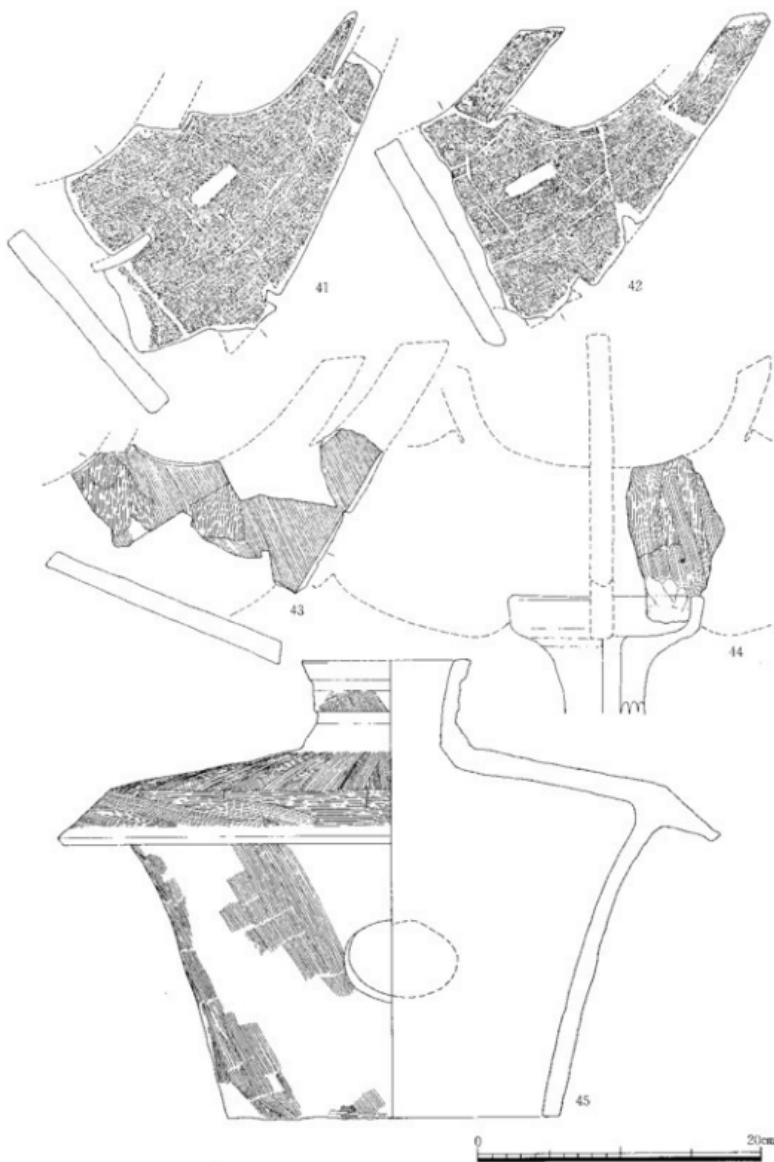


图-27 形象埴輪 (1)

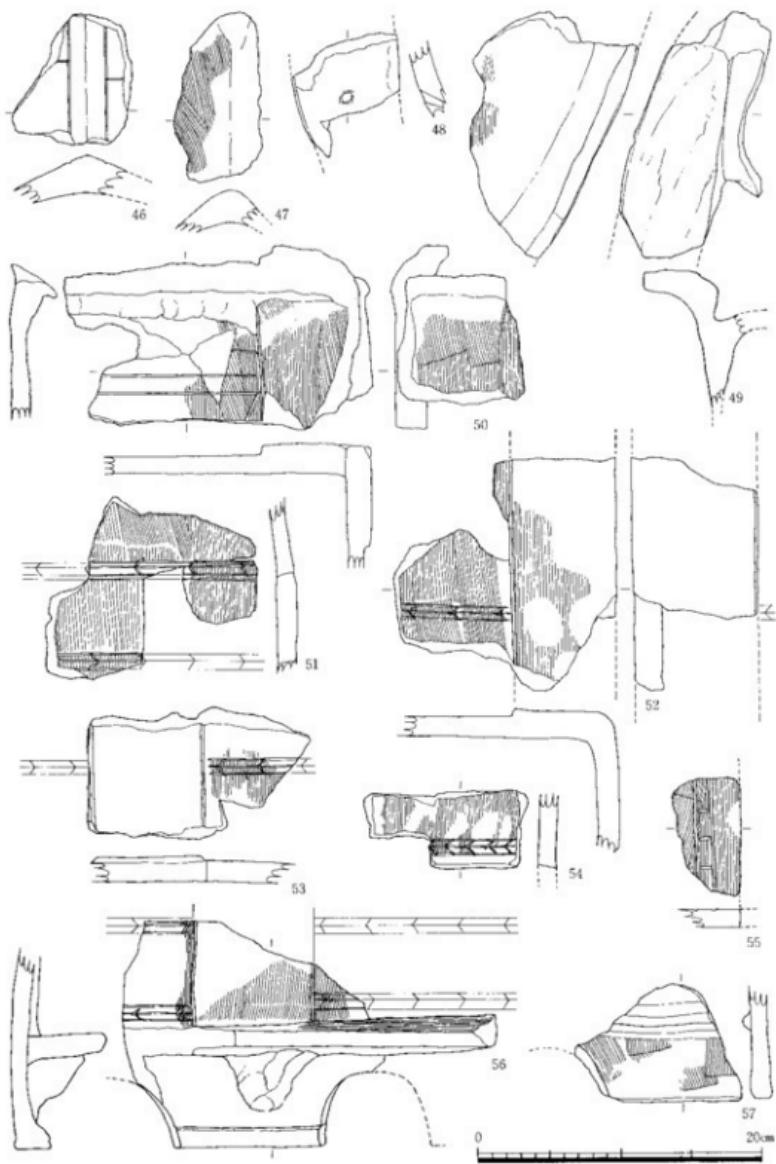


図-28 形象埴輪 (2)

d. 須恵器、土師器、土製品（図-29）

24~49は古墳~奈良時代のものである。24~41は須恵器、42~46は土師器、47~49は土製品。24、25は杯蓋。いずれも稜は退化し、天井部から口縁部にかけて丸くなだらかなカーブを描く。26~28は杯身。26、27は6世紀代のものであるが、28は8世紀に含まれる。29~32は高杯。30は2条の凸線の間に斜線文を施す。31は有蓋高杯。杯身の下半にカキメをつける。32は長脚二段透しになるもの。脚部に2方向より長方形の透孔を穿つ。柱状部内面にシボリメがみられる。33~35は甕およびその口縁部。33は外面に格子タタキメがみられる。34と35は口縁部に凸線をもつ。36~38は壺。36には蓋がつくと思われる。外面を波状文とカキメで加飾している。37は短頸甕。回転ナデ調整であるが、欠損している部分は回転ヘラケズリ調整と思われる。38

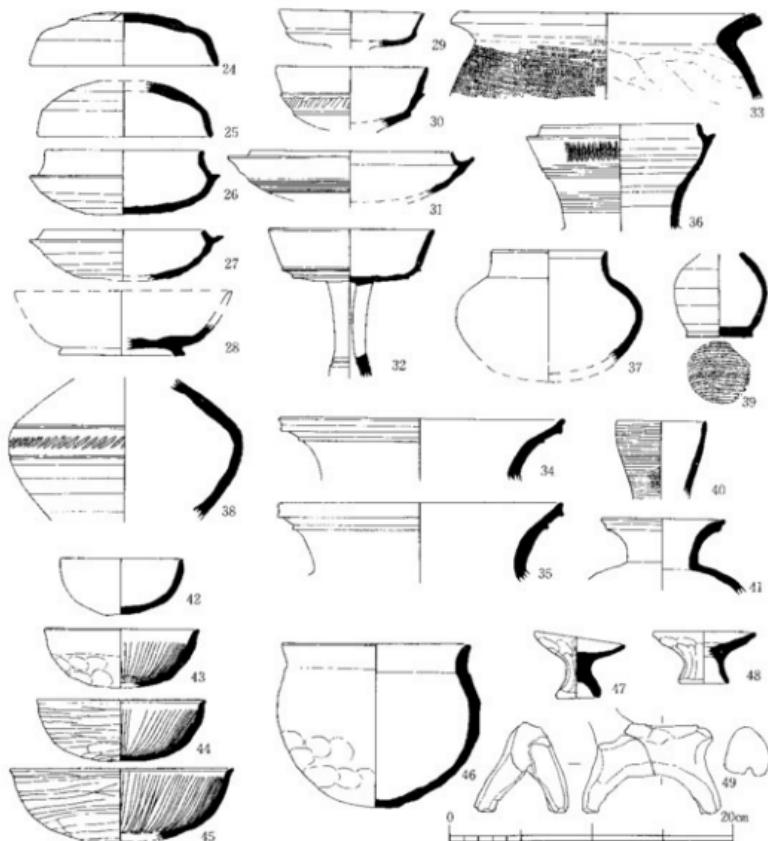


図-29 須恵器、土師器、土製品

は長頸壺の体部。2条の凹線の間には刺突文がみられる。39は瓶子。底部外面は静止糸切り未調整。頸部を欠くが、破損面は磨いたように平滑になっており、肩部端で口縁部として再利用したものであろうか。40、41は提瓶の口縁部。40の口縁部にはカキメがみられる。41の口縁部は外反し端部に面をもつ。

42~45は杯。42は内外面ナデ調整。43は正放射+ラセン暗文がみられる。外面口縁部横ナデ、体部は指オサエ。44、45の口縁部は外反する。外面口縁部から体部は横方向のヘラミガキ、底部はヘラケズリを行なう。45は正放射+ラセン暗文がみられる。46は小形甕。球形の体部に緩く外反する口縁部がつく。外面に軽い指オサエ痕が残るが、内外面ナデ調整で仕上げている。

47、48小形の手捏高杯。47の杯部は浅い皿状を呈する。脚部は裾部で内湾し、内面は浅い円錐状の削りをもつ。48の杯部は同じく浅い皿状を呈するが、脚部は斜めに開く。いずれも外面を指によるナデ調整で仕上げている。49は土馬。頸部を欠く。調整は手捏ね及び板ナデによるものである。

包含層から出土した須恵器、土師器は広い時間幅をもっているが、須恵器は6世紀代、土師器は7世紀代のものが比較的多いように思われる。

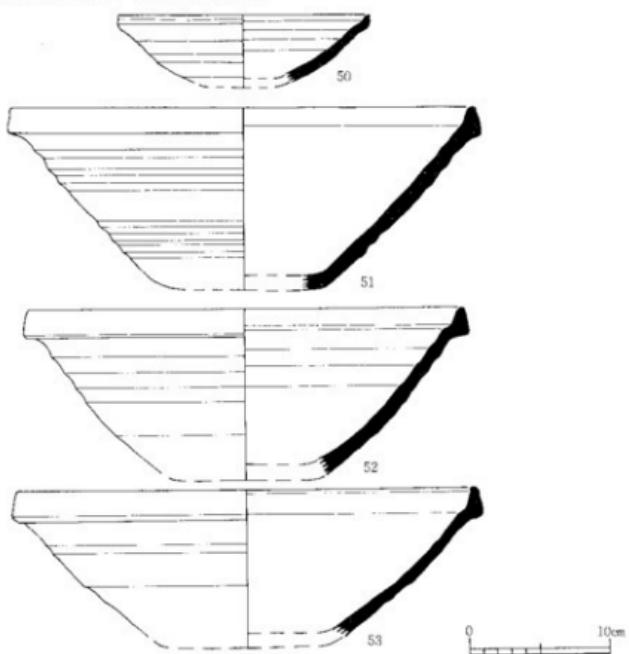


図-30 東播系須恵質土器

e. 東播系須恵質土器 (図-30)

50～53は東播系の須恵質捏鉢。口縁部の稜は鋭さに欠けている。体部にはゆるいロクロナデがみられる。51は口縁部がやや内傾し面をもつ。端部は上方につまみ上げたような形態になる。比較的強いロクロメが残る。52の口縁部は水平に近く外方に屈曲し、やや内傾して立ち上がる。内面に段をつくる。53は口縁部内面に段をもち、端部を内側につまみ出している。全体にゆるいロクロナデが残る。

大きさは、口径をみると50は18cm、51は32.5cm、52は30.4cm、53は32.8cmを割り、51の器高は13cmである。50は極めて小ぶりの捏鉢である。51～53の内面には使用痕が認められる。色調は50、52が青灰色、51、53が淡褐色で、胎土には微小の白色砂粒を含み、どれも堅緻な焼き上がりになっている。

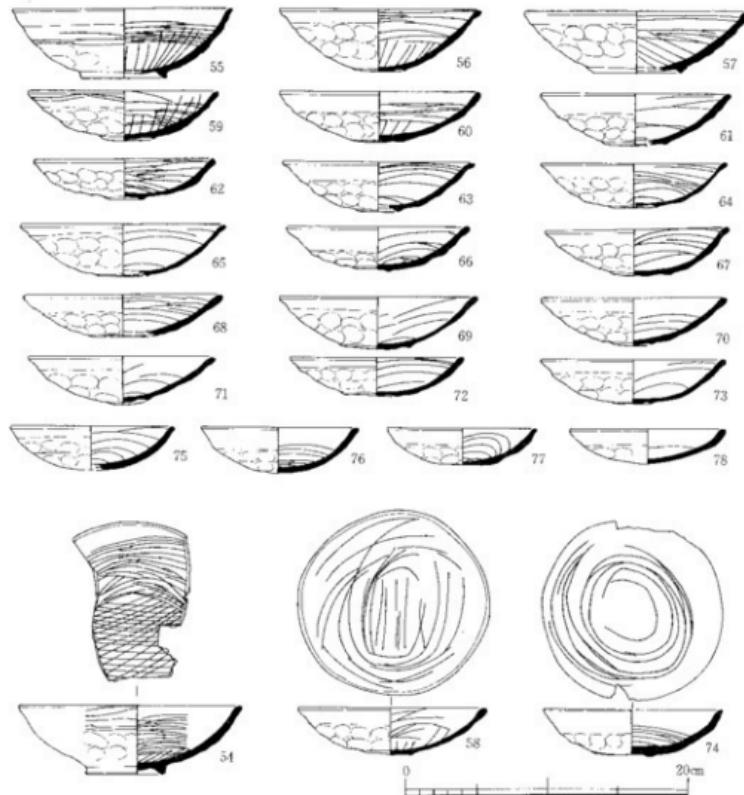


図-31 瓦器

f. 瓦器（図-31）

54は見込みの暗文が斜格子のもの。外面に横方向のヘラミガキが認められる。高台も比較的広くしっかりとしている。時期的には12世紀後半に含まれるものであろう。

55～60は見込みの暗文が平行のもの。55は外面のヘラミガキが残っており、高台はやや断面三角形に近い形態になる。内面の平行暗文は長い。56では外面のヘラミガキがみられなくなり、高台も断面二角形を呈している。56～60にかけては、見込みの平行暗文は疎になつていて、高台も退化し、器高も低くなっている。外面の調整はヘラミガキが省略され、口縁部は横ナデ、体部は指オサエのみとなる。こうした形態、調整の特徴をもつ瓦器は、13世紀代に考えることができるだろう。

63～78は、見込みと周縁部の暗文、ヘラミガキが一体化したような状態になり、内面全体を一本のラセン状に磨くものである。高台は低く申し訳程度のものとなり、75～78においては消失している。61～74は13世紀後半～14世紀代、75～78は14世紀後半～15世紀初頭に考えることのできるものであろう。

土器番号	出土区	色調	胎土	焼成法	口径 厘米	土器番号	出土区	色調	胎土	焼成法	口径 厘米
54	3 B III	白灰色	やや粗	良好	(15.4) 4.8	67	4 F IV	乳白灰色	やや粗	やや不良	13.0 3.2
55	3 B III 内側	白灰色 淡黒灰色	やや粗	良好	15.3 4.9	68	5 C II	淡白灰色	やや粗	良好	13.6 2.9
56	4 D I	黒灰色	精良 ほとんど砂利 含まれます	良好	15.8 4.8	69	5 C I	淡黒灰色	やや粗	良好	13.9 3.7
57	5 E I	淡黒灰色	やや粗	良好	(14.1) 4.3	70	5 C II	墨灰色 ～白灰色	やや粗	良好	(13.0) 3.3
58	4 D III	黒灰色	やや粗	良好	13.2 3.6	71	4 D I	黒灰色 ～白灰色	やや粗	良好	12.9 (3.4)
59	4 D IV	淡黒灰色	やや粗	良好	(14.0) 3.5	72	4 C III	白灰色	やや粗	良好	12.2 2.6
60	4 F IV	白灰色	やや粗	良好	(13.3) 3.6	73	5 F I	白灰色	やや粗	良好	(13.0) 3.2
61	4 E IV	淡黒灰色	やや粗	良好	13.0 3.3	74	8 F III	黒灰色	精良	良好	12.5 3.2
62	5 D I	白灰色	やや粗	良好	(12.6) 2.8	75	4 D III	白灰色 ～黒灰色	やや粗	良好	(11.2) 3.1
63	?	黒灰色	やや粗	良好	(13.5) 3.5	76	4 D IV	黒灰色 ～白灰色	やや粗	良好	11.2 3.2
64	3 C III	淡黒灰色	精良	良好	(13.5) 3.2	77	5 D III	淡黒灰色	精良	良好	10.4 2.5
65	5 D IV	黒灰色	精良	良好	(14.3) 3.6	78	6 D II	暗黒灰色 ～白灰色	やや粗	やや不良	11.0 2.4
66	4 C II	明灰黑色	やや粗	良好	12.8 3.1						

単位はcm、()は復元口径、現存高

表-6 瓦器観察表

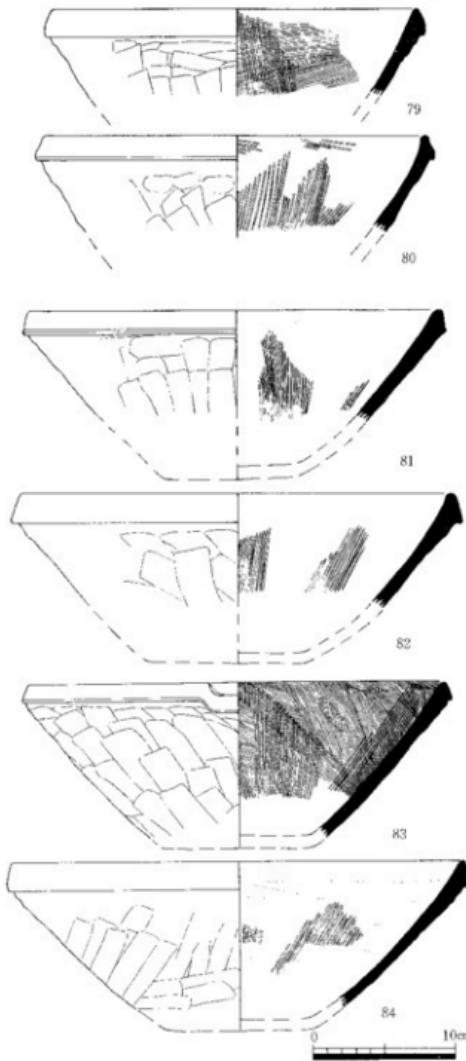


図-32 瓦質擂鉢

横方向のハケ調整、口縁部は内外面ともに横ナデしている。口縁部は内傾するもの（85～92）、直立気味のもの（93～97）がある。胎土はいずれもやや粗く、白色砂粒、雲母粒を含む。燃しきれなかったためか、白灰色あるいは淡黄褐色を呈し、焼成もあまり土師質に近いもの（85、

g. 瓦質擂鉢（図-32）

79～84は瓦質の擂鉢。いずれも口縁部端部を外反させずに、丸く收めるA型式のものである。形態は、体部が直線的に大きく外傾して口縁部に至る。口縁部は面をもち、わずかに下方に垂下する。調整は、すべてが外面をヘラケズリしている。内面は細かいハケ（平均12本/cm）調整の後に、クシ目をついている。いずれも何回もの使用のためにクシ目が磨滅気味である。83は片口部の破片であるが、他の79～82、84も片口になる可能性がある。79は淡黄褐色、82は明灰色、他は淡黒灰色。胎土にはいずれも微小砂粒を含み、やや粗、焼き上がりは堅緻である。

これらの擂鉢は、口縁部の形態からみると時期的に大きな間隔はなく、いずれも15世紀を前後する室町時代中期に比定することができるものであろう。

h. 瓦質羽釜（図-33）

瓦質の羽釜は口縁部に段をもつもの（85、87、89～97）、凹線をもつもの（86、88）、どちらももたないもの（98～100）に分けられる。

口縁に段、あるいは凹線がめぐるものは、体部外面鉗部下を横方向にヘラケズリし、内面底部から体部を

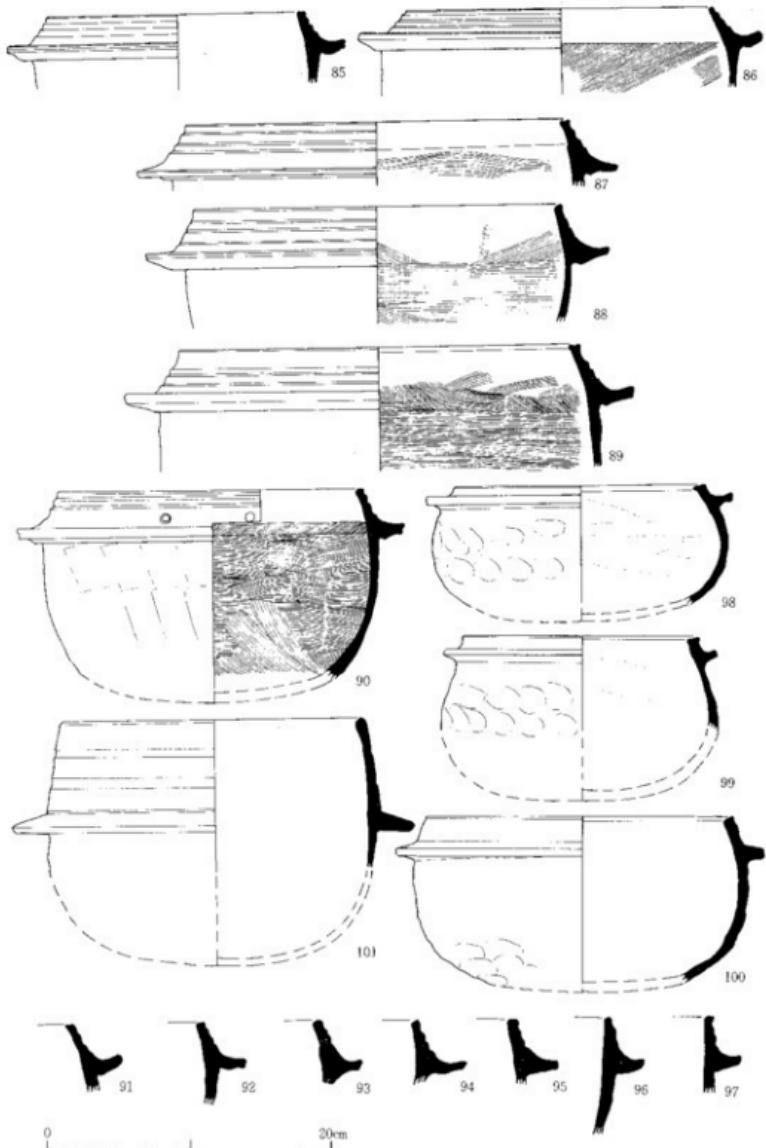


圖-33 瓦質羽釜

87、88、92、93、95、97) がある。どの羽釜にも鉢部下には煤が付着している。90の口縁部、鉢の上部には2つの円孔が穿たれている。

98~100は口縁部に段や凹線をめぐらさないものである。鉢はどれも比較的短く、体部は大きく張っている。口縁部は内傾し、口径は器高よりも大きい。形態的に足釜に似ている感じもあるが、器壁に足が付されていた痕跡はない。今回の調査では足釜は出土しておらず、また、柏原市内において現段階では足釜の出土量は多くない。いずれも明黒灰色を呈し、外面には煤が付着している。

101は以上的一群の羽釜と時期、形態的に異なるものである。口縁部は非常に長く、浅い凹線をめぐらしている。暗黒色を呈し、胎土は精良、微小の白色砂粒、雲母粒を含み焼成は堅緻。

土器番号	出土区	色調	胎土	焼成	法口径 鉢径 器高 mm	土器番号	出土区	色調	胎土	焼成	法口径 鉢径 器高 mm
85	井戸	淡褐色	やや粗	良好	(18.1) (23.6) (5.6)	90	4 C II	淡灰色	やや粗	良好	(21.6) (27.4) (13.5)
86	4 D III	淡灰色	やや粗	良好	(21.5) (28.4) (6.0)	98	6 D II	明黒灰色	やや粗	良好	(17.6) (21.6) (8.6)
87	4 C II	淡乳褐色	精良	良好	(27.0) (33.8) (4.5)	99	4 C II	灰白色	やや粗	良好	(16.8) (19.4) (6.3)
88	4 C II	淡白褐色	やや粗	良好	(25.9) (32.6) (5.4)	100	6 D I	淡黒灰色	雲母含む	良好	(21.8) (26.0) (11.8)
89	4 C I	青灰黑色	精良	良好	(28.2) (35.8) (8.6)	101	6 C IV	暗黒色	精良	良好	21.1 (28.0) (10.5)

単位はcm、()は復元口径、鉢径、現有高

表-7 瓦質羽釜観察表

i. 瓦質盤、火舍、火鉢 (図-34、35)

102は盤。口径42.6cm、器高12.9cm。体部は大きく外傾し、底部外面縁辺に三足を貼り付ける。口縁端部は平坦な面をなす。外面口縁部には太い横方向のヘラミガキ、体部下半は丁寧な横ナデ、内面口縁部は横方向のヘラミガキ、体部は軽い指オサエを残すナデ調整がみられる。灰白色を呈し、わずかに雲母を含むが胎土は精良、堅緻な焼き上がりである。14~15世紀のものであろうか。

103~116は火舍あるいは火鉢。平面形が方形のもの(103、104)、円形のもの(110~112、115、116)、六花形になるもの(113、114)とがある。106~109は体部下半、獸足の破片。

103、104は口縁付近に2条の凸帯をめぐらし、雲文を押印しているもの。104は108のような獸足がつくと思われる。類例を平安京法住寺殿跡のI 13井戸出土遺物に見出すことができる。⁽⁸⁾

円形のものには凹線で文様帯をつくり押印による文様をもつもの(110)、体部に菊花文のスタンプを押捺しているもの(111、112)、口縁部が垂直に立ち上がり、そこに格子目状の装飾を刻むもの(115、116)がある。

106の体部下半破片は格子目状の装飾を刻み、その下に連續した巴文を押捺している。さら

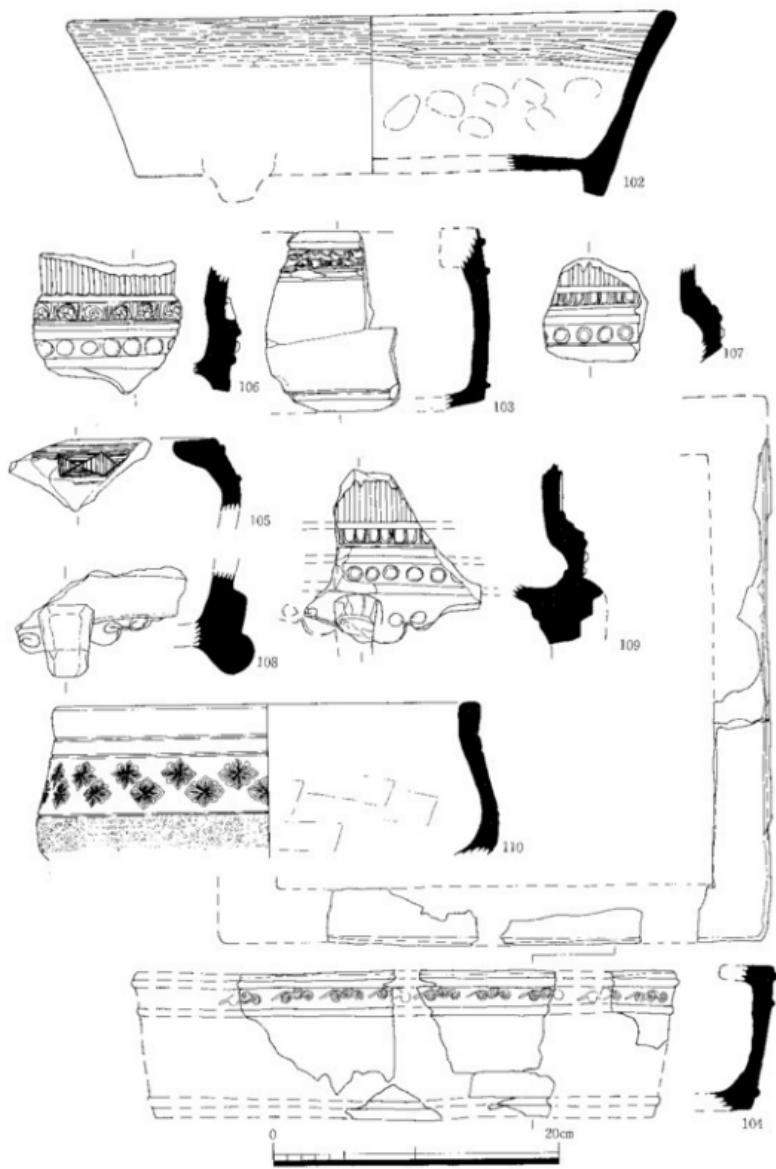


図-34 瓦質盤、火舌、火鉢

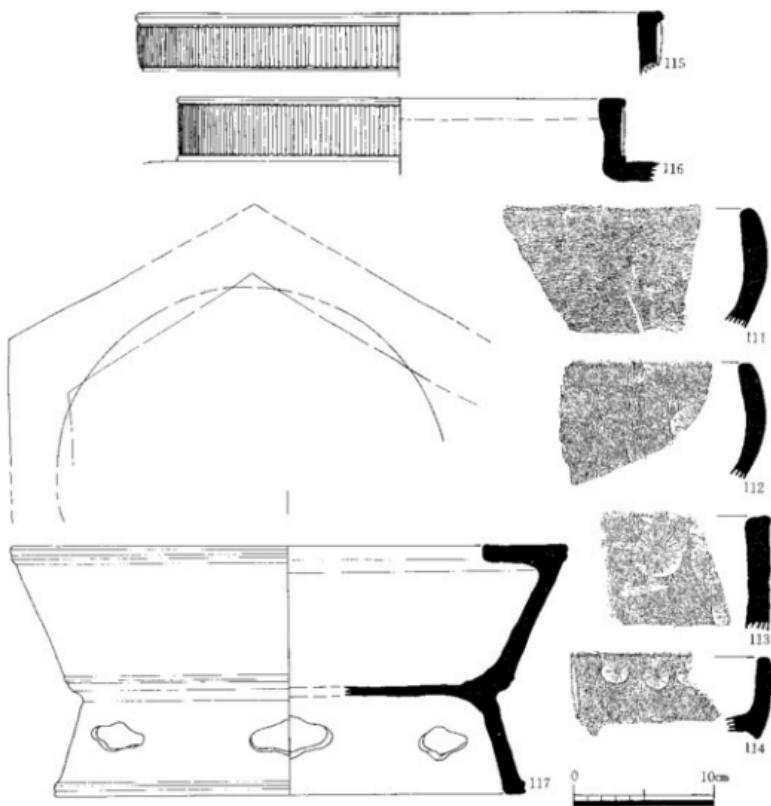


図-35 瓦質火舍、火鉢 (118は土師質)

にその下の凹帶との間に円形粘土を貼り付けている。

117は土師質の火鉢。平面形は六角形を呈し、口縁部に1条の凸線をめぐらす。高い高台が付き6ヶ所に透孔がみられる。灰黒色を呈し焼成はあまり良くない。

j. 瓦質、土師質甕 (図-36)

118、119は瓦質、120～123は土師質。体部外面に平行タタキ痕を残す甕Aとよばれる器形である。

118は口径29.6cm。頸部は直立し、口縁は外反して端部に面をつくる。調整は口縁部内外面共に横ナデ、外面肩部は横方向の平行タタキ。体部は欠損しているが、残存部からみると縱方向の平行タタキに変わるものである。内面はナデ調整。部分的に粘土紐のつぎ痕が残る。体部

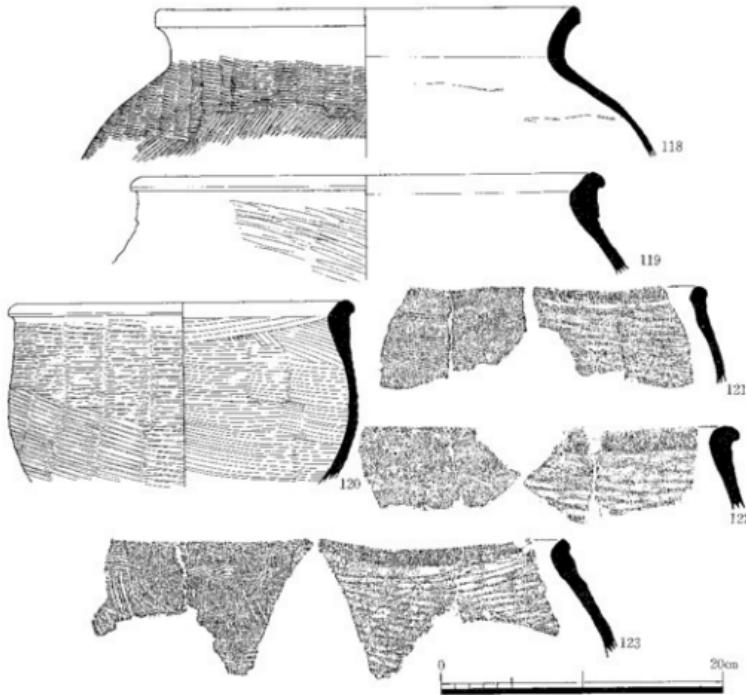


図-36 瓦質、土師質甕

は球形になると思われる。黒灰色を呈し、胎土には微小砂粒を含む。焼成はやや不良。119は口径32cm。頸部は直立し、口縁端部は外に丸く折り返している。外面には斜め方向のタタキ痕が残る。淡黒灰色を呈し、胎土には微小砂粒及び雲母を含む。焼成はやや不良。

120～123は土師質のもので、肩部の張りが少くなり、口縁部と頸部が一体化している。口縁端部は玉縁状を呈する。調整は外面タタキ、内面荒いハケメ調整である。120は口径23.4cm。淡黄褐色を呈し、胎土には3mm程度の荒い砂粒を含む。

堺市小阪遺跡の分類では119は①-1、120～122は①-3、123は①-2にあたる。報告者は①を15世紀中～16世紀と捉え、①の次に出現する口縁端部が台形、あるいは肥厚するものを湊焼としている。⁽⁹⁾ 119～123はこの湊焼への変化の過程にあたるものであろう。また、118は119よりも形態的には明らかに古く、13世紀後半～14世紀初頭に位置するものだろう。

k. 灰釉おろし皿 (図-37)

124は灰釉おろし皿。灰白色を呈し、内面に窓で格子状の刻み目

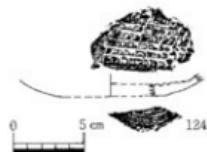


図-37 灰釉おろし皿

を入れている。外面底部は糸切り未調整。

I. 土師質皿 (図-38)

土師質皿には小形で底径が小さく逆台形を呈するもの (125~148、182、184)、小形で平底、底径が大きく短かい口縁が斜め上方に立ち上がるるもの (149~170、183)、口径が13cm前後と大きく、口縁が外反する逆台形を呈するもの (173~175)、同様に大形で平底、底径が大きく短かい口縁が斜め上方に立ち上がるもの (171、172、176~181) とがある。

165~167は口縁部外面の横ナデ調整のため、底部との境が屈曲する。173~175の器壁は極めて薄い。182~184は鉄釉を塗布しており、褐色を呈する。内面に突起をもつものがあり、(184)、底部外面は回転糸切り未調整。逆台形を呈する器形のものには、いわゆるヘソ底のものが存在する (125、128、133、136~140、142、144~148)。しかし、全体的にみてヘソ底の突出度はあまり強くはない。ほとんどのものは口縁部外面をナデ調整して仕上げているが、134はヘラミガキ調整が施されている。126、127、143、161、182、184は口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたと考えられる。

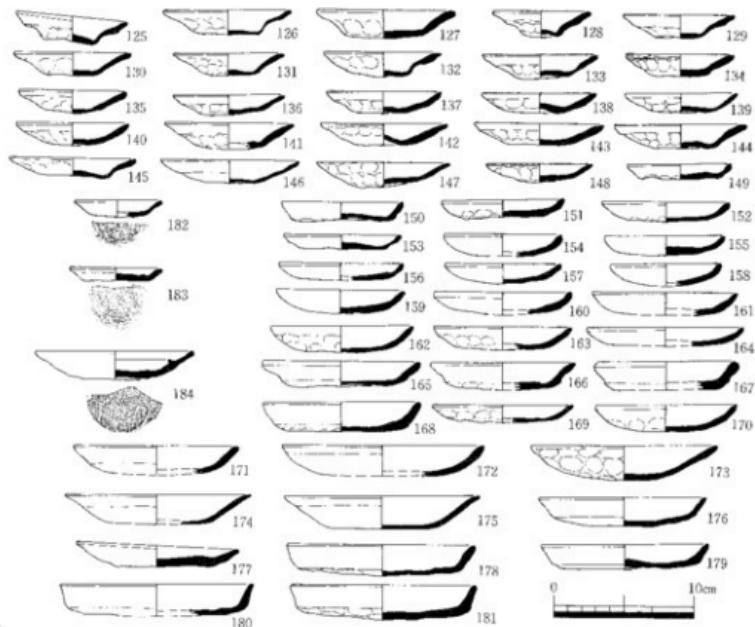


図-38 土師質皿

上部 番号	出土区	色 調	胎 土	焼 成	法 直	口 径	土 壁	出 土 区	色 調	胎 土	燒 成	法 直	口 径
					器 高	器 高	器 高					器 高	器 高
125	4 C III	淡茶褐色	やや粗 雲母含む	やや不良	7.6 1.6	155	5 C II	淡茶褐色	やや粗 クサリ縫合む	良好	8.5 (1.4)		
126	3 C IV	白黃褐色	精良 雲母含む	やや不良	9.1 1.7	156	4 F I	淡乳褐色 ～淡赤褐色	やや粗	やや不良	(8.8) (1.2)		
127	4 C III	黃白色	やや粗 クサリ縫合む	良好	9.5 2.0	157	3 C III	淡乳褐色	精良	良好	(4.2) (1.4)		
128	4 C I	淡褐色	やや粗	やや不良	6.7 1.8	158	5 C II	淡褐色	やや粗 雲母含む	やや不良	(7.9) (1.5)		
129	4 C III	淡赤褐色	やや粗	やや不良	7.8 1.6	159	8 G III	灰茶色	精良 クサリ縫合む	良好	(9.0) (1.6)		
130	4 C III	黃白色	精良	良好	8.0 1.7	160	?	淡乳褐色	やや粗 雲母含む	やや不良	(9.6) (1.5)		
131	4 C II	淡赤褐色	やや粗 クサリ縫合む	やや不良	8.0 1.6	161	4 D IV	淡乳黃赤色	やや粗 クサリ縫合む	良好	(10.2) (1.6)		
132	4 D I	淡赤褐色	雲母・クサリ 雲母含む	やや粗 雲母含む	8.2 1.7	162	4 B IV	黃白色	精良	良好	(10.0) (1.8)		
133	4 F I	明茶褐色	精良 クサリ縫合む	良好	8.1 1.7	163	6 C II	淡茶褐色	やや粗	良好	(9.7) (1.4)		
134	4 F I	明茶褐色	精良 クサリ縫合む	良好	7.7 1.5	164	3 B III	淡乳褐色	やや粗	良好	(11.2) (1.3)		
135	3 C IV	淡乳褐色 ～淡黃褐色	やや粗	良好	7.2 (1.5)	165	3 B IV	淡赤褐色	精良	良好	11.0 (1.8)		
136	?	黃白色	精良 クサリ縫合む	良好	8.0 1.5	166	6 E I	赤褐色	やや粗 雲母含む	良好	10.1 (1.9)		
137	?	黃白色	精良 クサリ縫合む	良好	8.0 1.5	167	6 C II	淡赤褐色	やや粗 雲母・クサリ 雲母含む	やや不良	(9.8) (2.0)		
138	5 F II	黃白色	精良 クサリ縫合む	やや不良	8.0 1.4	168	3 D IV	灰茶色	やや粗 雲母・クサリ 雲母含む	良好	11.0 (2.1)		
139	4 F I	黃白色	精良 クサリ縫合む	良好	8.0 1.4	169	4 C II	淡赤褐色	やや粗 雲母・クサリ 雲母含む	やや不良	(10.0) (1.20)		
140	3 C IV	黃白色	精良	良好	7.7 1.6	170	3 B III	明乳褐色	やや粗 雲母・クサリ 雲母含む	やや不良	(10.0) (2.0)		
141	4 C II	淡茶褐色	やや粗	良好	(9.0) (1.8)	171	3 B III	淡赤褐色	精良 雲母含む	やや不良	(11.4) (2.0)		
142	4 D I	淡茶褐色	やや粗	やや不良	8.8 1.5	172	4 D I	明乳褐色	精良 雲母含む	良好	14.0 (2.2)		
143	4 D IV	淡茶褐色	やや粗	良好	11.0 2.4	173	土 塵	黃白色	やや不良 クサリ縫合む	やや不良	13.3 2.5		
144	5 F II	黃白色	精良 クサリ縫合む	良好	9.1 1.7	174	4 F I	黃灰色	精良	良好	13.2 (2.1)		
145	3 F III	黃白色	精良 クサリ縫合む	やや不良	8.7 1.2	175	4 E II	黃灰色	精良 雲母含む	良好	13.7 2.3		
146	4 E II	黃白色	精良	良好	9.8 1.6	176	3 C III	茶褐色	精良 雲母含む	良好	11.9 2.0		
147	3 B III	黃白色	精良 クサリ縫合む	やや不良	9.2 1.7	177	2 G IV	淡乳褐色	やや粗 雲母・クサリ 雲母含む	やや不良	11.7 1.5		
148	5 F II	黃白色	精良 大粒砂粒含む	やや不良	7.5 1.3	178	4 D I	乳茶褐色	精良 雲母・クサリ 雲母含む	良好	13.0 2.2		
149	4 F I	赤黃色	やや粗	良好	(7.4) (1.1)	179	8 F III	明茶褐色	精良 雲母・クサリ 雲母含む	良好	(12.8) 1.8		
150	5 C II	灰茶色	精良 雲母含む	良好	(4.7) (1.3)	180	4 D II	乳赤褐色	やや粗 雲母含む	やや不良	(13.8) (2.4)		
151	3 B III	淡褐色	やや粗	良好	(4.7) (1.3)	181	4 D I	暗赤赤色	精良	良好	12.8 2.5		
152	3 C III	淡乳白色	精良	やや不良	(9.0) (1.4)	182	4 D I	暗赤褐色	精良	良好	6.2 11.1		
153	4 C II	乳茶褐色	やや粗 雲母含む	やや不良	(8.2) 1.0	183	表 土	淡赤褐色 ～茶赤褐色	精良 クサリ縫合む	良好	6.5 0.8		
154	ビットI	淡赤黃色	やや粗 雲母含む	良好	(8.2) (1.5)	184	5 G III	淡赤褐色 ～赤褐色	精良 クサリ縫合む	良好	11.1 2.0		

単位はcm、()は復元口径、現存高

表-8 土師質面観察表

m. 土師質土釜 (図-39、40)

搬入品 (185~190) と明らかに在地のもの (191~197) に分けられる。

搬入品の土釜は形態により 3 つのタイプに分類できる。

- ①類 口縁部を内傾させ、比較的幅広の鍔のつくもの。口縁端部をさらに内傾させ、肩部下に鍔をめぐらせるもの (186)、口縁端部を内側に折り曲げるもの (186) がある。186 の口縁部は横ナデのためややくぼんでおり、端部は尖り気味になる。

(185、186)

- ②類 口縁部は内湾し、端部を外側に折り曲げて丸く収めるもの。鍔は非常に小さく方形を呈する。

(187~189)

- ③類 口縁部が「く」の字形に屈曲し、端部を内側に折り返す。肩部に方形の小さな鍔をめぐらす。

(190)

調整は、185 は口縁、鍔部横ナデ、186 は口縁、鍔部横ナデで鍔下に煤付着。187 は口縁、鍔部横ナデ、鍔裏側に指オサエ痕、鍔下に煤付着。188 は口縁、鍔部横ナデ、外面煤付着。器壁は薄く、内面は削った後にナデで仕上げたのであろう。189 も口縁、鍔部横ナデ、口縁端部は外面に折り返しのため沈線がみられる。外面鍔下全体、内面全体に煤付着。

これらの土器は大和地方出土の、いわゆる大和型の土釜である。時期的には 14 世紀を中心とする時代が考えられる。⁽¹⁰⁾

在地系の上釜 191~194 は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は外反する。194 は外反する口縁端部が短く、玉縁状を呈している。鍔は肩部に貼り付けており 2~3 cm と長い。調整はいずれも口縁部から鍔にかけて横ナデしている。192、194 は鍔下、193 は口縁部から鍔下まで煤が付着している。これらの土釜は柏原市内でよく出土するタイプのものであり、時期的には

土器 番号	出土区	色 調	胎 土	焼 成	法 律規 定基 準量	土器 番号	出土区	色 調	胎 土	焼 成	法 律規 定基 準量
185		淡黄褐色	粗 雲母・カカリ 鐵合む	やや不良	2.0 27.4 (5.5)	192	4 D I	淡黄赤褐色	粗 2 mm ² の砂粒 多く含む	良好	25.0 36.8 (7.2)
186		赤褐色	やや粗 雲母・カカリ 鐵合む	やや不良	24.1 28.0 (3.7)	193	4 D I	茶褐色	やや粗 雲母・カカリ 鐵合む	良好	26.6 36.8 (5.9)
187	4 C II	乳茶褐色	やや粗 1~3 mm砂粒 雲母含む	良灯	28.8 31.0 (4.5)	194	4 D IV	乳茶褐色	やや粗 1 mm ² 砂粒含む	良好	31.4 45.4 (7.3)
188	第 1 区	乳黄褐色	やや粗 1 mm砂粒雲母 含む	良好	29.6 34.2 (20.0)	195		黄褐色	やや粗 微小砂粒含む	やや不良	31.6 38.0 (9.2)
189	第 1 区	乳褐色	やや粗 1 mm砂粒含む	良好不良	21.7 24.4 11.0	196	5 C III	赤褐色 ~淡黄褐色	やや粗 1 mm砂粒含む	良好	21.1 27.4 (8.5)
190	4 D IV	淡赤褐色	やや粗 雲母・カカリ 鐵合む	良好	28.4 30.4 (8.8)	197		赤褐色	やや粗 1 mm砂粒含む	良好	18.8 23.8 (8.0)
191	3 B III	淡褐色 ~淡赤黄色	粗 0.5~2 mm砂 粒多く含む	やや不良	41.8 47.2 (8.2)						

表-9 土師質土釜観察表

単位はcm、() は復元口径、残存高を表す。

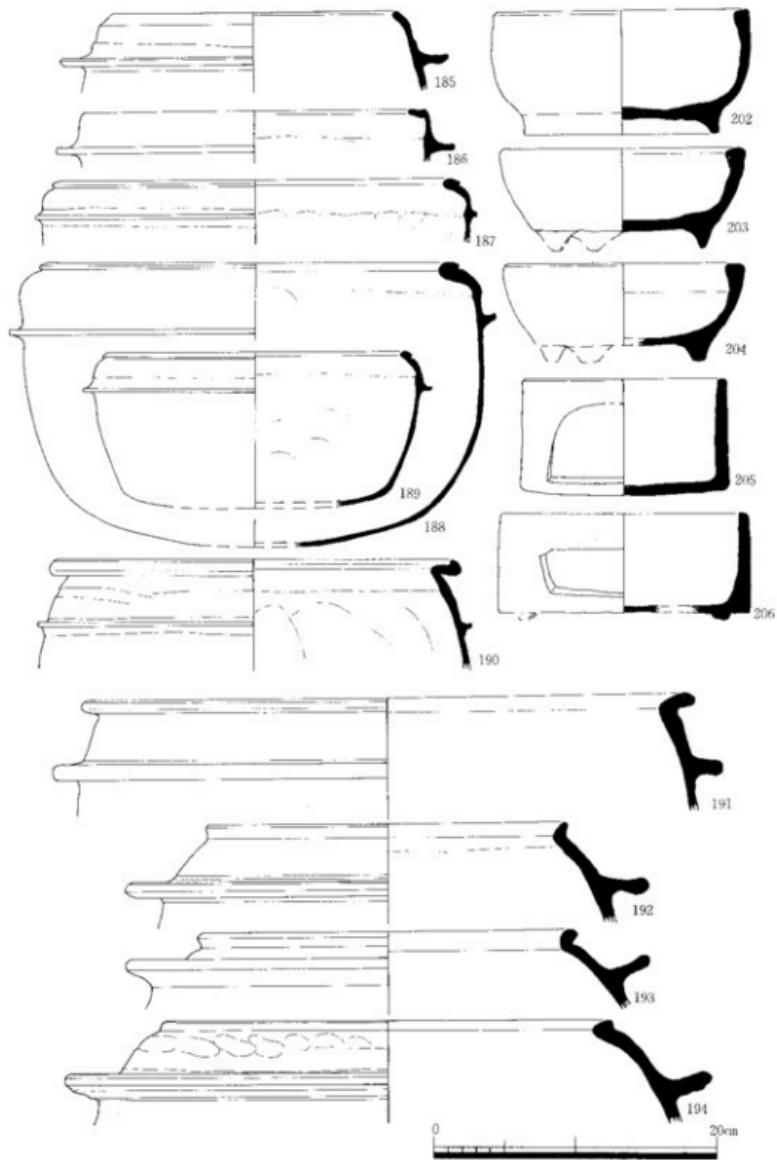


図-39 土師質土釜、鉢

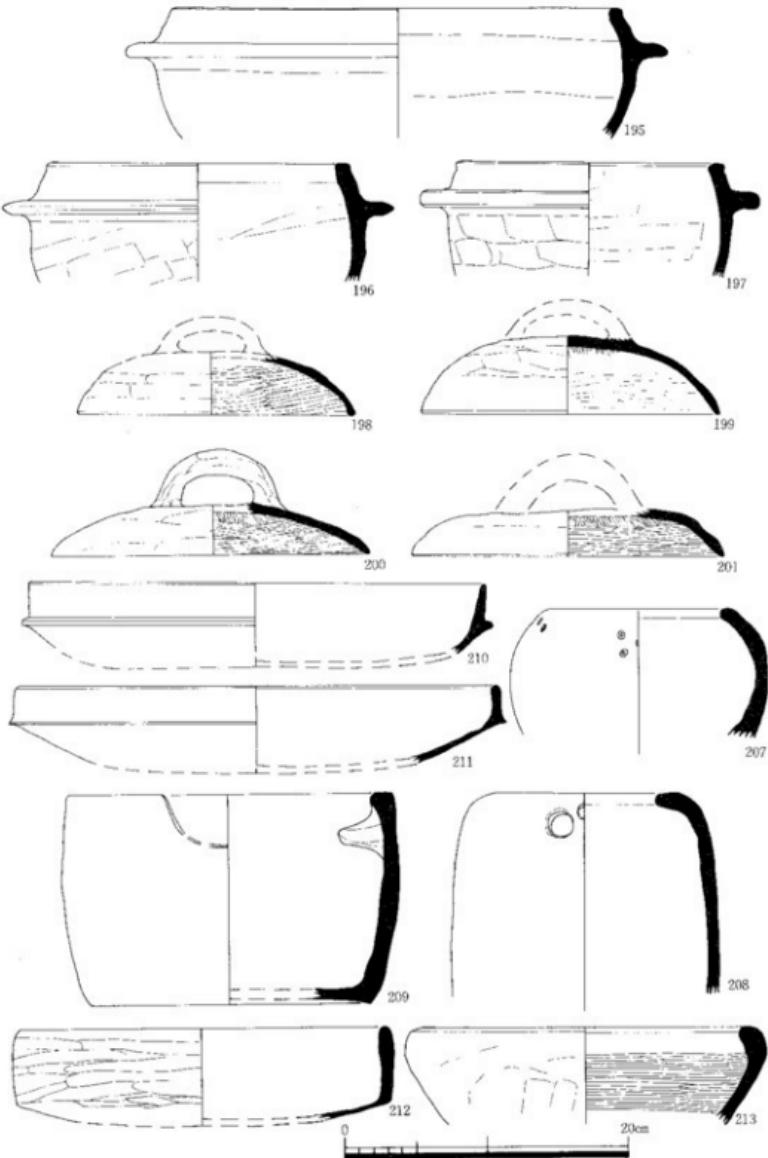


図-40 土師質土釜、蓋、焰焰、手焙り、火鉢、鉢

13世紀後半から14世紀を中心とする時期に位置づけることができよう。

同じく在地系の土釜195～197は、直立あるいは内傾気味の口縁に厚みのある鍔がめぐるものである。褐色系の色調を呈し、胎土は粗く砂粒が多い。調整は、鍔および口縁部内外面は横ナデであるが、外面鍔下はヘラケズリ（195は煤のため不明）、内面は横ナデ（195、196）、板ナデ（197）がみられる。器壁は厚く、口縁端部は四角く終わる。195は浅い器形で、鍋のようなものかもしれない。196、197は、出土した土釜の中では小ぶりである。

n. 土師質鉢、手培り、焰烙、蓋、火鉢（図-39、40）

198～201は蓋。いずれも200にみられるような把手がつくと思われる。調整は外面すべてを横方向にヘラケズリした後、丁寧に横ナデしている。内面は天井部と側面部とに分けヘラミガキを施す。側面部はおそらく四分割のヘラミガキ調整と思われる（199は磨滅のため不明）。199は内面に、198は内外面に煤が付着している。このため火鉢か火舎等の蓋として使用されていたことが考えられる。色調は茶褐色を呈し、胎土には微小砂粒を含むが精良で、焼成は良好である。口径、器高（把手は含まない）は19.5・4.5cm（198）、21・5.5cm（199）、22.2・3.5cm（200）、22・3.2cm（201）である。

202は高台付の鉢。底部に高台を貼り付け、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚させる。調整は内外面ともに口縁部横ナデ、外面高台内未調整。赤褐色を呈し、焼成は良好、胎土は精良。口径18.2cm、器高8.7cm。

203、204は脚付の鉢。底部外周辺の3ヶ所に足をつける。内外面共にナデ調整。赤褐色を呈し、焼成は良好、胎土はやや荒く微小の白色砂粒を含む。口径、器高は15.6・7.1cm（203）、16.8・6.9cm（204）である。

205、206は手培り様の鉢。体部は平らな底部から直立し、口縁端部はそのまま終わる。体部に透し窓を開け、206の底部には小さな足をついている。206は外面全体に煤が付着する。205は口径14cm、器高8.2cm、暗茶褐色を呈し焼成良好、胎土はやや粗く微小の白色砂粒、雲母を含む。206は口径19cm、器高7.6cm、暗灰色を呈し焼成良好、胎土は精良である。これらはコソロのような用途をもっていたものだろうか。

207、208は手培り。207は内湾し立ち上がる体部に、口縁は内傾し端部を丸くおさめる。口縁下に円孔を穿つ。口縁内面に煤付着。全面ナデ調整。赤褐色を呈し焼成は良好、胎土は粗い。口径11cm。208の体部は直立し、口縁を内側に折り曲げている。全面ナデ調整。赤褐色を呈し焼成良好、胎土には微小砂粒を含むが密。口径10cm。口縁内面に煤付着。

209は火鉢。体部は直立し、口縁端部は水平な面をもつ。内面口縁下3ヶ所に突起がある。全面ナデ調整。外面には赤褐色の顔料が塗布されている。焼成良好、胎土には1～3mmの白色砂粒を含む。口径22.6cm、器高14.7cm。

210、211は焰烙。口縁は直立し、体部との境に鍔のような突帯をめぐらす。210の鍔下には

煤が付着する。その他の焙烙の破片の中には、この突帯が図示したものよりも高く突出しているものもある。底部付近には煤が付着しているものが多い。口径は210が31.9cm、211が33.6cm。茶褐色を呈し焼成良好、胎土には雲母を多く含む。

212は焙烙様の浅い鉢。広い底部から体部は直立して立ち上がり、口縁部はやや肥厚する。底部には煤がつく。体部はヘラミガキ、底部はヘラケズリの後ナデ調整が行われる。口径25.6cm。淡赤褐色を呈し焼成良好。胎土には雲母、クサリ礫を含む。213も浅い鉢。体部は緩く外傾し、口縁部は内傾する。内面には荒い横ハケがみられ、外面はヘラケズリ調整。内面に煤が付着する。口径23cm。

9. 陶磁器（図-41～43）

214～226は掘鉢。214は口径22.4cm、器高8.2cmで比較的小形のものである。口縁部は垂直に立ち上がり外面には2条の凹線、端部内面には1条の凹線をめぐらせている。11本を単位とする櫛目で全面におろし目をつける。暗赤褐色を呈し焼成堅緻、胎土は密で1mm程度の白色砂粒を含む。215の口縁部は外側に肥厚している。口縁部外面に2条の凹線、内面端部およびおろし目との境部分に2条の凹線をめぐらせている。口径34cm。明赤褐色を呈し焼成堅緻、胎土には2mm程度の白色砂粒を多く含んでいる。216の口縁部は長く直立し、下方に若干垂下している。体部内外面にゆるいロクロ目を残す。内面に7本を1単位とする櫛目をつける。口径28.2cm、器高12cm。217は片口を有する。口縁部は直立し端部は尖り気味に終わる。内面には8本を1単位とする幅の広い櫛目を間隔をおいてつけている。口径29cm、器高13cm。暗赤褐色を呈し部分的に淡黄褐色の自然釉をかぶる。焼成堅緻、胎土は密で微小白色砂粒を含む。218の口縁部も直立てており、体部には弱いロクロナデが残る。底部は未調整。口径27.5cm、器高12.5cm。赤褐色を呈し焼成堅緻、胎土は密で微小白色砂粒を含む。219の口縁部は外傾し、端部内面は内傾し段をもつ。さらに、内面にはおろし目との境部分にも段をつくる。内面には1単位3本の櫛目を間隔をおいてつけている。外面体部上半ロクロナデ、下半は不定方向のナデ調整。器壁は厚い。口径40.2cm。淡赤褐色を呈し焼成堅緻、胎土はやや粗。これらの掘鉢は室町～江戸時代に含まれるものである。⁽³³⁾

227、228は大甕の口縁部と底部。常滑焼。口縁部（227）は直立し端部は上片につまみ上げられる。外面口縁部下端は頸部から外方に屈曲するので、下方には垂下していない。内面に粘土のつぎ痕を残す。口径38cm。茶褐色を呈し焼成堅緻。底部～体部（228）にはロクロ目が残る。外面には暗緑色の自然釉が流れている。底径19.7cm。茶褐色を呈し焼成堅緻。

229、235は壺の口縁部と底部、口縁部（229）は玉縁状を呈する。備前焼。口径13.7cm。黒褐色を呈し焼成堅緻、胎土には微小砂粒を含む。底部～体部（235）の外面は暗茶褐色の釉をかぶり、部分的に暗緑褐色の釉が流れている。底部外面は露胎。体部内面にはロクロ目が残る。底径15cm。焼成堅緻、胎土には微小砂粒を含む。

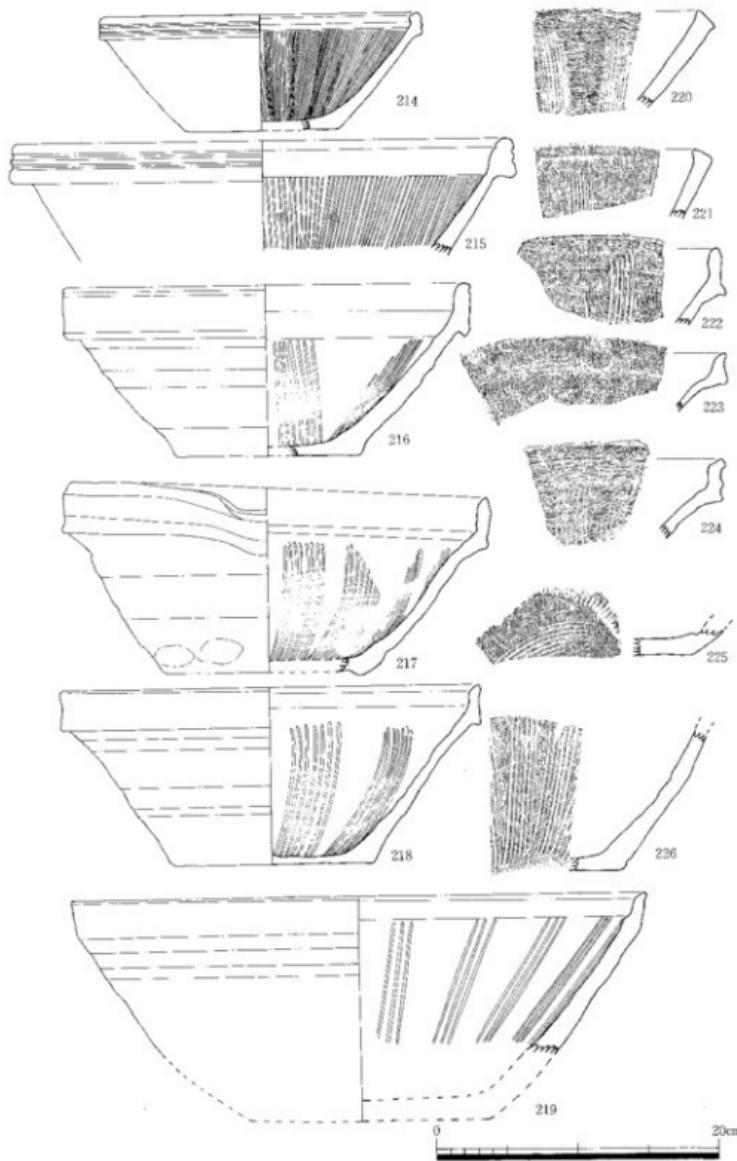


図-41 陶器 (1)

230は李朝白磁。高台疊付および内面に砂目痕を残す。口径15.6cm、器高3cm。青白灰色を呈し焼成堅緻、胎土は密。231も白磁・碗。内湾氣味に立ち上がる体部に、口縁部はやや外反する。口径16cm、232は青磁・碗。外面は線状蓮弁になるか。底径6cm。渋緑灰色を呈し焼成堅緻、胎土は密。233は乳白褐色の素地に淡茶褐色の釉がかぶるもの。削り出し高台。外面高台脇へラケズリ。高台内に墨書がみられる。底径10.6cm。瀬戸あるいは美濃地方産のものか。234は施釉胸器・碗。削り出し高台。内面全面から外面体部にかけて乳白色の釉がかかる。外面の釉は玉垂れ状になっている。口径11cm、器高3cm。焼成良好、胎土はやや粗。236は大皿。三島唐津。内面は模様を彫った後白い泥を塗る。見込みに重ね焼き痕が残る。高台は断面方形を呈す。高台径11.6cm。素地は茶褐色で焼成堅緻、胎土は密。237は鉢。備前焼。平らな底部から、体部は直立し、口縁端部はやや内傾する。外面に火だすきと思われる痕跡が残る。口径14cm、器高6.9cm。外面は暗赤色を呈し焼成は堅緻、胎土は微小砂粒を含みやや粗い。

238～258は磁器類である。238は紅皿。外面に線状の陰刻模様を連続的に刻んでいる。型押し成形による。口径4.8cm、器高1.5cm。灰白色を呈し焼成堅緻、胎土は密。239～256は染付碗、皿である。239は猪口。灰白色の素地に青灰白色の釉を施す。高台疊付以外は全面施釉されるが均一ではない。淡い藍色の染付が口縁付近にみられる。口径5.8cm、器高2.5cm。焼成は堅緻、胎土は密。240～244はいずれも梅や樹木、草等を模様とした染付の碗。240の見込みは蛇の目状に釉剥ぎしている（242、244も同様である）。口径11.4cm、器高5.1cm。青白色を呈す。241は全面施釉。口径9.7cm、器高5cm。青白色を呈し、高台疊付は赤色を呈している。242は口径11.2cm、器高4.9cm。青白色を呈す。243は高台疊付以外は全面施釉。口径7.6cm、器高3.6cm。青灰白色を呈す。244は口径10.8cm、器高4.8cm。淡灰白色を呈す。245は外面に二重線を用いた網目文の染付がみられる。高台疊付以外全面施釉。口径9.8cm、器高5.2cm。青白色を呈す。246は仏飯碗。灰白色的素地に淡青灰色の釉がかかる。脚内面は露胎。口径6.2cm、器高5.4cm。247は口径10cm、器高7cm。高台は露胎。青白色を呈し、染付は淡くぼやけている。248は口径19.3cm、器高6.3cm。素地は青白色、釉は淡青白色。内面に扇子の染付がみられる。249は口径10.7cm、器高5.6cm。青白色を呈す。250は口径11.9cm器高6.2cm。白色の素地に青白色の釉がかかる。高台疊付にハナレ砂が付着。251と255は青磁染付。251は口径7.7cm。外面暗緑灰色、内面青灰白色。255は口径11cm、器高5.8cm。外面淡緑色、内面青白色を呈す。高台内の印から鈔江窯のものかと思われる。252は口径13.3cm、器高3cm。淡青灰白色を呈す。高台疊付は露胎、内面見込み露胎で砂が付着する。253は皿。口径13.3cm、器高3cm。白灰色の素地に青白色の釉がかかる。見込みにくずれた五弁花がみられる。高台疊付ハナレ砂、見込み露胎。254も皿。口径10cm、器高2.3cm。淡青白色を呈す。高台疊付は露胎。256は碗。口径12.2cm、器高6cm。淡青白色を呈し、高台疊付は露胎でハナレ砂が付着する。外面に窓弁文、内面見込みに五弁花がみられる。「くらわんか」手のものである。

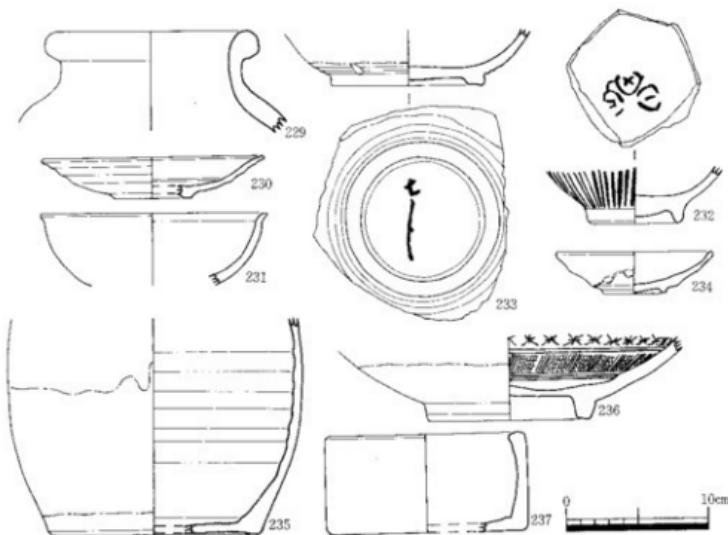
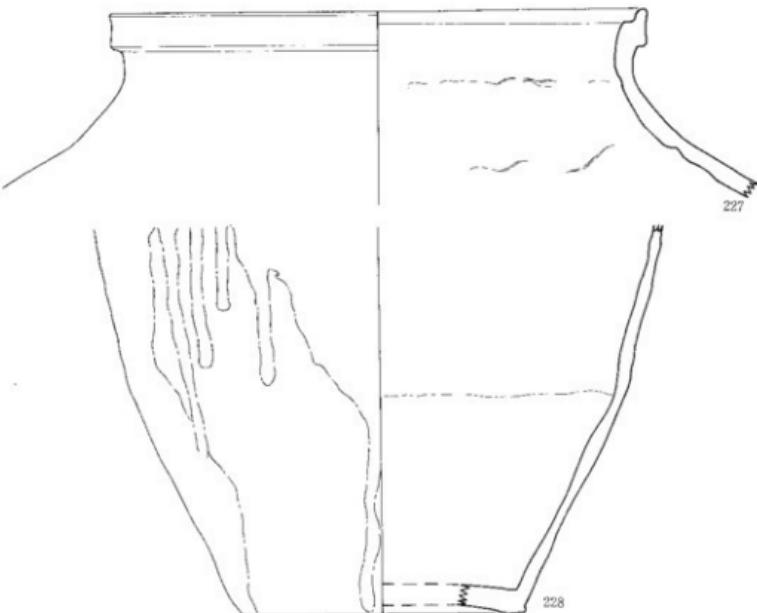


図-42 陶磁器(2)

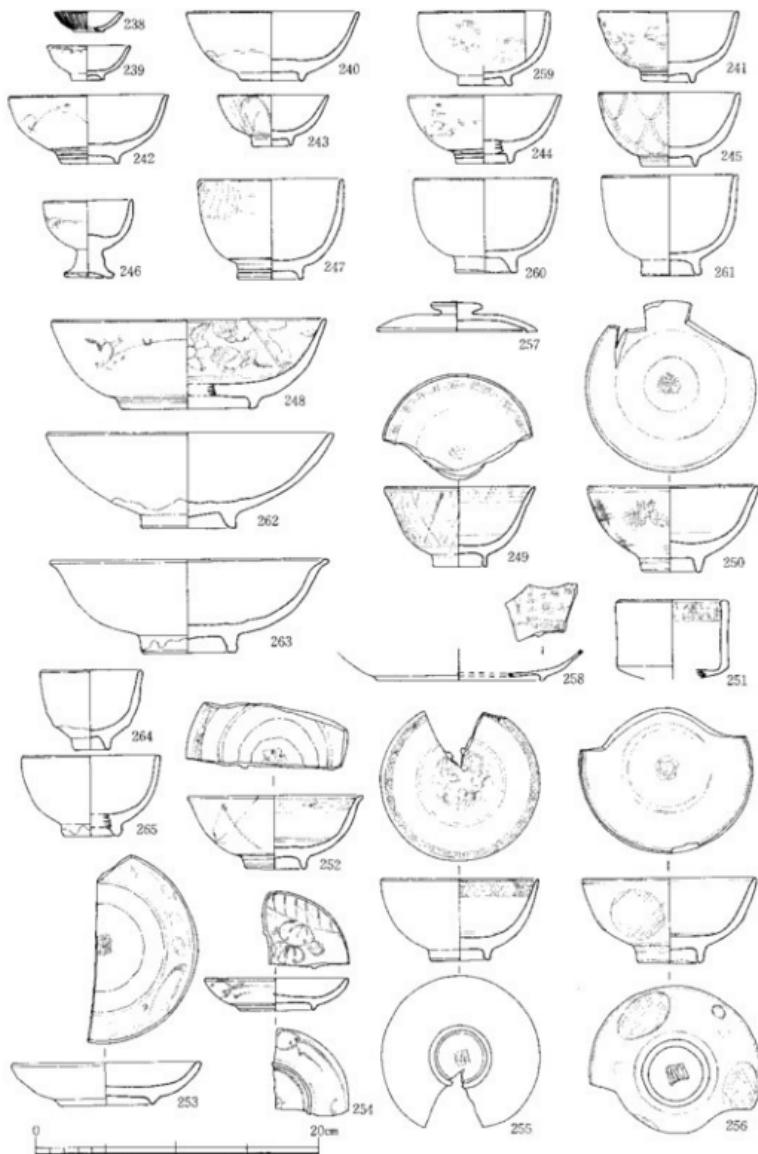


図-43 陶磁器 (3)

257は蓋。口径11.4cm、器高2cm。淡茶褐色の素地に茶褐色の鉄釉がかかる。258は青磁。高台径11.8cm。淡緑色を呈し、見込みに文字がみられる。

259～265は施釉陶器。259は碗。口径9.1cm、器高5.2cm。乳白色の素地に青白色の釉がかかる。外面に青色の花の模様が描かれている。高台脇から高台内は露台。施釉部分全体に荒い貫入がみられる。焼成良好、胎土に微小砂粒を含む。260と261は同一産地のものであろう。262は口径10.2cm、器高6.8cm。261は口径9.5cm、器高7cm。素地は淡黄褐色、乳白色の釉がかかる。高台脇付は露胎。262は碗。口径20cm、高台径6.8cm、器高6.8cm、乳茶褐色の素地に外面は灰緑色の釉、内面は淡茶褐色の釉がかかる。高台内はトキン状を呈する。263も同様な碗であるが口縁部が外反する。口径19.6cm、底径6.4cm、器高6.7cm。淡茶褐色の素地に乳白色の釉がかかる。高台脇から高台内露胎。高台内トキン状を呈する。264は碗。口径7cm、高台径2.5cm、器高5.6cm。淡赤褐色の素地に暗茶褐色の釉がかかる。見込みに部分的に無釉の部分がみられる。高台内トキン状を呈する。素地に化粧がけしているものと思われる。焼成良好、胎土には微小砂粒を含むが密。265は口径9.6cm、高台径4cm、器高5.7cm。素地は白茶褐色、釉は乳白色。焼成良好、胎土には微小砂粒を含み粗い。

染付碗の245は二重線で網目文を表現するもので、18世紀代のものと思われる。また249は19世紀に入るものであろう。出土した磁器類は、18世紀代を中心とする伊万里系のものが多い。施釉陶器では259が17世紀後半～18世紀にかけての瀬戸美濃系のものである。

p. 屋瓦（図-44～46）

屋瓦は各区で出土しているが、特に4F区周辺、調査地東部の高所に位置する平坦面から東南部の一段低い平坦面へ降る斜面の下からまとまって出土している。大半は平瓦片で、軒瓦の量は少ない。小片になっているものが多く、平瓦で全形を復元できるものはなかった。

軒丸、軒平瓦

軒丸瓦には、瓦当文様が蓮弁のものと三つ巴文のものとがある。蓮弁のものは複弁8葉蓮華文軒丸瓦で2点出土しているが、両者にはかなり違いがある。1は瓦当径14cm程度に復元でき、径5.5cmの中房に1+6の蓮子がみられる。瓦当面には范割れや板目がみられる。2の瓦当径は13cmとやや小振りで、1に較べ花弁がやや小さくなっている。径5.5cmの中房には「圓」の字がヘラ書きされている。瓦当面には細かい布目痕がみられる。2は瓦当裏面の上端近くに凹線を入れ、そこに丸瓦を差し込み、上下に粘土を補充したもので、丸瓦凸面はケズリ調整、凹面は布目痕を残している。両者共に黒灰色を呈し焼成良好、胎土は精良である。

三ツ巴文軒丸瓦は、瓦当の全形が残るものはない。巴文はいずれも右巻きで、瓦当文様が三ツ巴文と珠文帯とで構成されるものと、三ツ巴文のみのものとがある。前者の巴文には、巴頭部が尖るものと肥厚して屈曲するもの、丸くなるものとがある。巴頭部が尖るものには、径8mm程の大きな珠文の内外に圓線があり、巴尾部が圓線に結合するもの（3）、巴頭部が密接



图-44 軒九、軒平瓦当文様

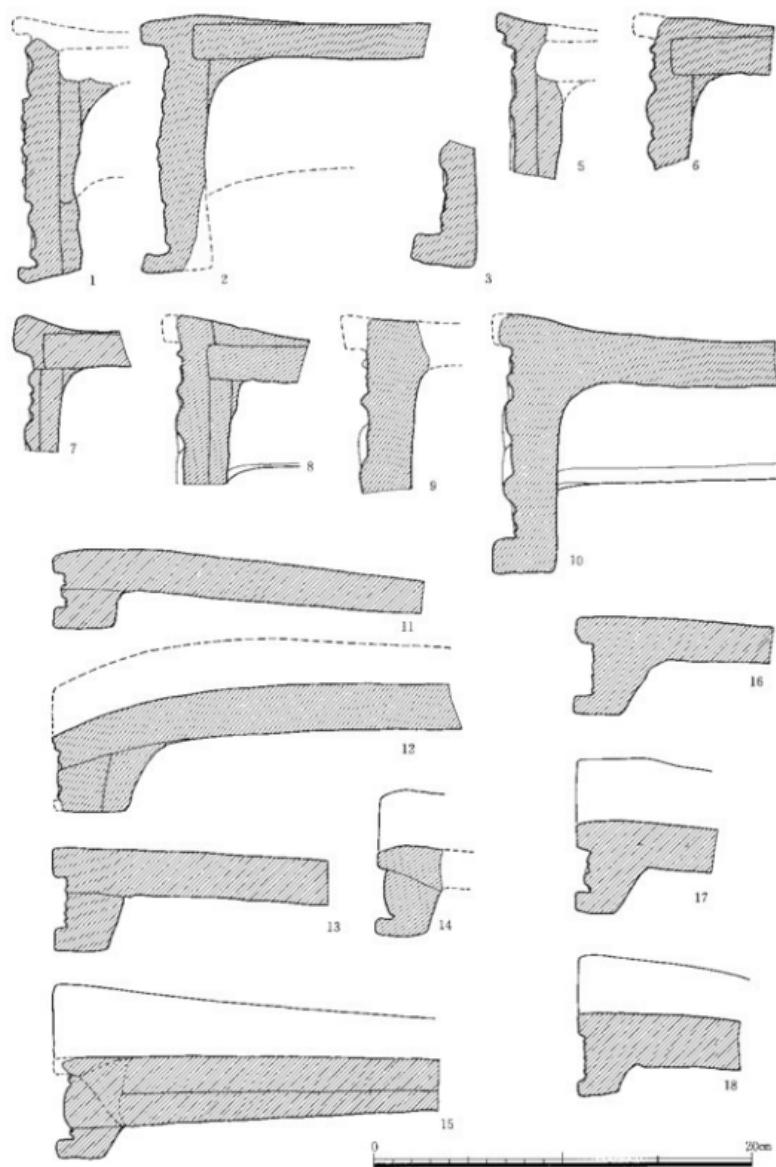


图-45 軒丸、軒平瓦断面图

するもの（4）、巴頭部間隔が大きく、小さな珠文内側の圈線に巴尾部が結合するもの（5）がある。巴頭部が肥厚し屈曲するものには、三ツ巴頭部の中央に珠文を置き、巴尾部が小さな珠文内側の圈線に結合するもの（6）、二ツ巴文が小形のもの（7）がある。巴頭部が丸くなるものは、小さな珠文の間隔が粗くなるもので、珠文内側の圈線に巴尾部が結合するもの（8）、結合しないもの（9）がある。珠文帯のみられないものは、巴頭部が丸くなるもので、三ツ巴文、圈線、外縁という構成になっている（10）。これらの三ツ巴文軒丸瓦の瓦当径は12.5cm～15cmの間にあるが、14cm以上のものが多い。瓦当と丸瓦の接合は、蓮華文のものと同じく、瓦当裏面の凹線に丸瓦を差し込み、上下に粘土を補充するもので、丸瓦凸面はナデ調整、凹面は布目が残る。色調は灰色系のもので、胎土には石英粒を含むものが多い。瓦当面には離れ砂がみられる。

軒平瓦瓦当面の文様は、連珠文（11）と唐草文（12～18）とがある。唐草文はいざれも均整唐草文と思われる。連珠文は圈線内にみられ、唐草文には圈線の有無がある。唐草文には、意匠的にはレリーフ様のもの（12、17）と線描風のもの（13～16、18）とがあるが、どれも蕨手状に硬直化している。軒平瓦の大きさについては、完存するものが少ないため明確ではないが、12、15などは瓦当幅25cm以上に推定され、18は21cmと小形である。瓦当の形成は、平瓦広端部凸面側に別粘土を盛って瓦当面を造るもの（11～13）、平瓦広端部を凹面側に薄くなるように斜めにカットし、そこに別粘土を盛って瓦当面を造るもの（14）などがみられる。別粘土を盛る部分には、接着効果を高めるために数条の沈線が刻まれている。他に平瓦部の厚い15は、やや薄めの2枚の粘土板を重ねて一枚の平瓦を造り、その広端面に瓦当部を接合するという方法を探っている。頸の断面には段頸と曲線頸がある。数量的には圧倒的に段頸が多いが、例えれば同じ連珠分の瓦当文様をもつものでも、頸の形態には両者が存在している。頸の厚さには、平瓦部よりも厚いもの（11、12）、平瓦部とはば等しいもの（13、14、16、17）、平瓦部より薄いもの（15、18）がみられる。色調は11、16が茶褐色、他は灰色系である。焼成良好、胎土には石英粒を含むものが多く、瓦当面には稍粗の離れ砂が認められる。

元興寺極楽坊の瓦の調査によると、三ツ巴文軒丸瓦については、平安時代中期に出現し、鎌倉時代以降軒丸瓦文様の多勢を占めるという。巴頭部は初期には尖っており、室町時代以後頭部と尾部との境が明瞭になり、珠文帯内側の圈線が省略されるものが多くなり、江戸時代には完全に省略されるという。⁽¹⁰⁾こうした観点に従えば、ここに報告した軒丸瓦は平安時代末～室町時代初頭の間に年代を求めることができよう。軒平瓦についても、鎌倉時代のものは頸が厚く年代が降るに従い次第に薄くなる傾向にあり、外縁は室町時代後期以降急激に幅広くなるといわれる。従って、軒平瓦についても、前記年代の範囲に相当するものであろう。

丸瓦、平瓦

丸瓦は完形のものが多く、長さ、幅等の法量を復元できるものは少ない。基本的には行基葺

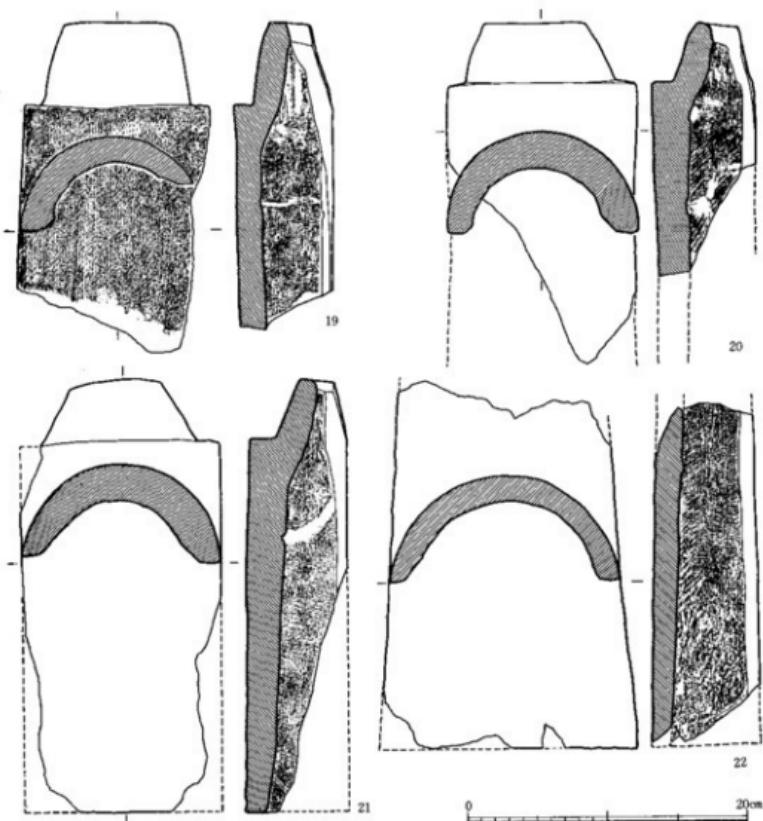


図-46 九瓦実測図

きのもの（22）と玉縁付きのもの（19～21）がある。22は暗灰色を呈し、胎土には石英粒を含む。凸面は繩叩き後ナデ調整、凹面は糸切り痕がみられる。玉縁付きのものについては、21が全長31.2cm、幅14.3cm、厚さ2.4cm、玉縁の長さ4.6cmである。他に全長について示すことのできる資料はないが、玉縁の法量についてみると、長さが4.3cm～6.8cmの間にある。図示した九瓦については、側端面が比較的広く、面取りは浅いが、全体としても同様な傾向が認められる。玉縁付きの九瓦には、色調は灰色系と茶色系のものとがあるが、焼成は良好で胎土は比較的粗く、砂粒を多く含んでいる。凹面は布目痕や糸切り痕が残るが、凸面は粗い繩叩きの後ナデ調整される。

平瓦には全形を復元できるものはないが、形状としては台形のもの、正方形に近いものがあ

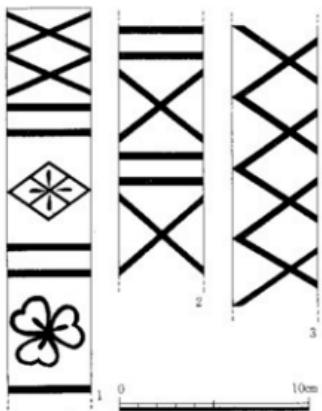


図-47 平瓦凸面の印き文様

る。凸面の状態は、繩叩き痕が残るもの、叩き文様がみられるもの、糸切り痕の残るもの、完全にナデ調整され、叩き痕の残らないものがある。繩叩き痕の残るものは非常に少なく、糸切り痕のみられるものは、凹型を使用したものと思われるが、数量的には極めて少ない。凸面の印き文様は数種類あるが、ほとんどが破片のため、復元できたのは3種類である。印き板の幅は4.5cm程度、「×」印のみのもの（3）、「×」印、「=」印が組み合わさるもの（2）、「×」印、「=」印、花菱、花文等が組み合わさるもの（1）がある。2の文様をもつものには、凹面にも同種の文様がネガティブな状態で現れているものがある。これは乾燥時に複数の平瓦が重ね合わされていたことを示すものであろう。

平瓦の印き文様については、繩叩きは平安時代末には消滅し、室町時代後期以降は完全にナデ消されるようになるという。また「×」印のみのものは鎌倉時代に属するとされる。⁽¹⁰⁾今回出土した平瓦は（丸瓦を含め）平安時代末～室町時代にあたるものであろう。

註

- (1) 赤堀次郎（1979）「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』第90号
- (2) ノ（1979）「古市方形埴輪整理ノートより」『古代学研究』第89号
- (3) 川西宏幸（1978）「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- (4) 註(3)と同じ。
- (5) 註(3)と同じ。
- 春成秀爾（1977）「埴輪」『考古資料の見方＜置物編＞』（地方史マニュアル6）柏書房
- (6) 八尾市恩智遺跡の縦長刻片について、佐藤良二氏は風化度の点から旧石器時代に属する可能性を説いている。こうした資料との比較、検討も必要になろう。
- 米田敏幸・佐藤良二（1982）「八尾市・恩智遺跡の石器再考」『旧石器考古学』24
- (7) 註(3)と同じ。
- (8) 古代学協会（1984）『法住寺殿跡』（平安京跡研究調査報告第13輯）
- (9) 野田芳正（1983）「第4章－2、甕」『小坂遺跡発掘調査報告』堺市教育委員会
- (10) 香原正明（1983）「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』同朋舎
- (11) これらは広い意味で備前焼であるが、焼成の状態をみると屏で生産されたものの可能性もある。
- (12) 元興寺文化財研究所（1982）『中・近世瓦の研究一元興寺篇一』
- (13) 註(12)と同じ。

第4章 横穴群の調査

1. 位置と地形（図-1、48）

第Ⅰ期調査の際、調査対象地南端で横穴群が検出された。ここから南約100mには大阪府史跡安福寺横穴群があり、本横穴群も安福寺横穴群の一部を構成するものと判断された。先述したように本横穴群は（株）トーメンの御好意により柏原市に譲渡され、府史跡安福寺横穴群として範囲拡張指定、保存されることになったため、第Ⅱ期調査の際には横穴群の現状を記録することにとどめた。したがって、今回の報告も主に各横穴の実測調査の記録である。

安福寺横穴群の位置する玉手山丘陵の西斜面は、石川東岸の底地部に張り出す小尾根や谷が入り組み複雑な地形を呈している。34基の横穴で構成される安福寺横穴群は西に開く比較的大きな谷筋に営まれている。ここを横穴群の中心部とすると、その周囲のいくつかの小谷内にも横穴が営まれていたものと考えられるが、今回の調査地を除いては住宅が建ち込めており、現状からは全体としてどのくらいの規模をもつ横穴群であるか不明なのは残念である。しかし、調査地の地形の項でも触れたように、横穴部北側の小尾根よりも以北は比較的単純な地形を呈していたものと思われ、ボーリング調査の結果でも、その位置では凝灰岩層が確認されていないことから、本報告の横穴群がその北限であると考えることもできる。

横穴群は北西に開く小谷に営まれている。現状では谷底と尾根頂部とは約10mの比高差があり、谷の人口部と奥部とは約14~15mの距離がある。北側の尾根の末端部は凝灰岩の露出した崖になっている。横穴は谷の南側、北東を向く斜面に2基、谷の北側、南西を向く斜面に3基築かれている。南西から北東に順に1~5号横穴とした。このうち4号横穴は明らかに掘削途中のものである。この小谷はかつて溜池として利用されていたらしい。今では谷の部分ではほとんど水気は存在しないが、2、3号横穴といった谷奥部に築かれた横穴の床面は水泥で覆わっていた。第Ⅰ期調査の際、横穴群発見の契機となった一部開口していた横穴は1号のみであり、他の横穴の入口部分は土砂、草木で覆われていた。こうした状況は、この小谷が溜池としての機能を失った後、相当量の土砂が流入、堆積したことを示すものと思われ、その時期は第2次大戦後、玉手山丘陵に宅地開発の波が押し寄せた頃であろう。今回はこの小谷内は調査しておらず、地形図も現状を記録したものである。

なお今まで知られていた安福寺境内域の横穴群をここではA地点とし、本報告の横穴群を安福寺横穴群B地点と仮称しておくことにする。

2. 各横穴の概要

a. 1号横穴（図-49）

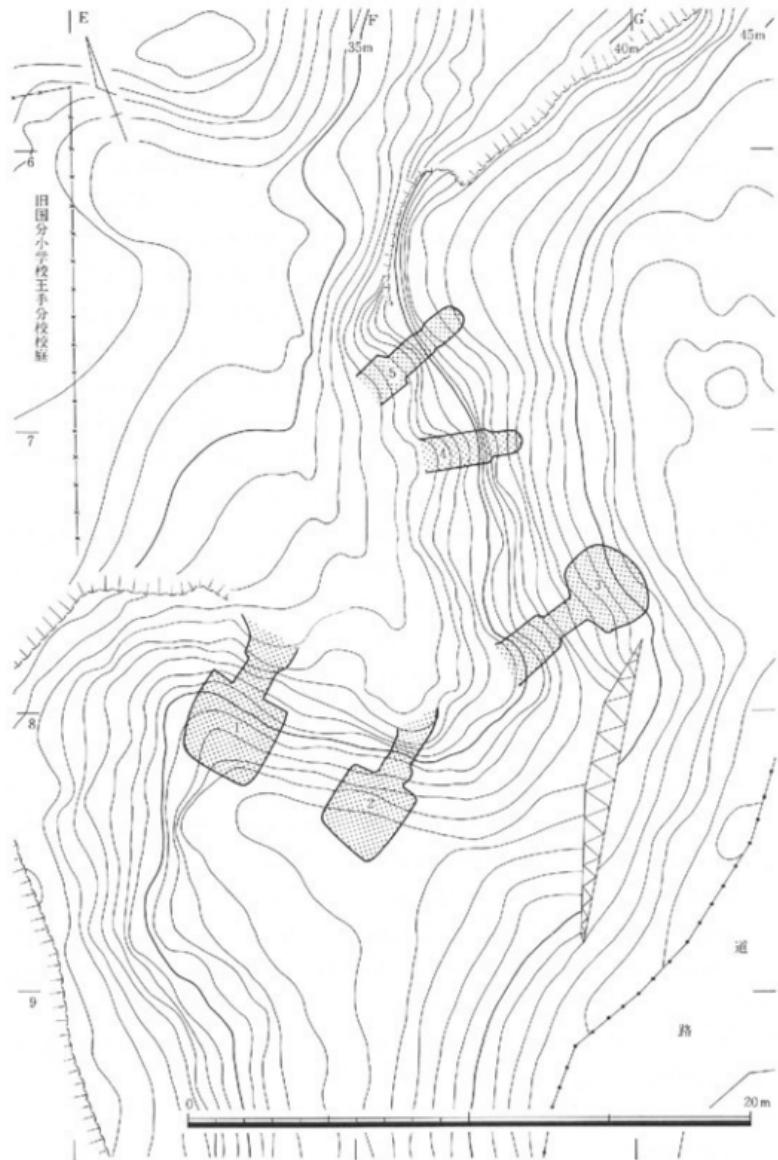


図-48 横穴群地形図

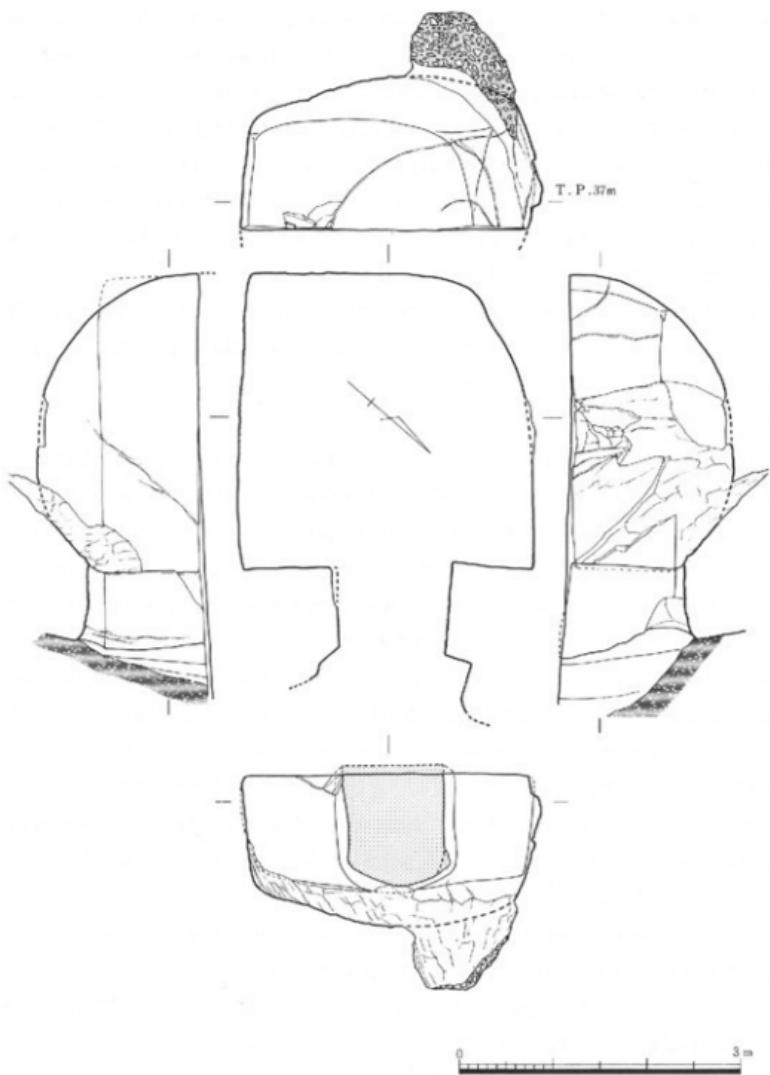


図-49 1号横穴実測図

小谷の南側斜面、入口部に位置し、N-49°-E方向に開口する。玄室平面形はほぼ方形を呈する両袖式のもので、最大長3.18m、最大幅3.15mを測る。左右袖壁、左側壁、奥壁は直線的であるのに対し、右側壁は緩く湾曲している。したがって右側壁と奥壁との境界は明瞭ではない。天井・壁面境の段は存在せず、天井は壁面から緩くカーブを描きドーム状を呈している。床面には10cm程土砂が堆積しており、玄室の最大高は約1.8m、壁の高さは、左側壁中央部で約1.5mになると思われる。誤道は玄室のはば中央に取り付いており、最大長0.85m、最大幅1.2m、最大高は約1.4mであろうか。玄門部で幅が広く、墓道側に向て一端狭くなり、羨門部では外側に開いて、墓道は羨道よりも幅が広くなっている。墓道から羨道、羨道から玄室へと序々に高くなっているようで、玄室床面は約T.P.36.5m前後にあたる。

壁面は浅いノミ痕が残されるが比較的平滑に仕上げられている。天井部には荒いノミ痕が残されている。右側壁から天井部にかけては大きく崩落しており、礫灰岩層を覆うと考えられる礫層が露出している。

b. 2号横穴（図-50）

小谷の南斜面、奥部に位置し、N-49°-E方向に開口する。玄室平面形はほぼ方形を呈する両袖式のものである。最大長2.8m、最大幅2.75mを測る。各側壁はほぼ直線的に造られており各壁の境界は比較的明瞭である。天井は中央部の高いドーム状を呈するが、天井・壁面境の段は存在せず、その境界もあまり明瞭ではないため、方形を呈するという平面形のわりには玄室は丸味をもった印象を受ける。床面には約10cmの土砂が堆積しており、玄室最大高は約1.5m、壁面の高さは、左側壁中央部で約1.05mを測るものであろう。玄室内には小谷の奥部で湧出すると思われる水が流入している。玄門は若干左寄りに位置する。羨道は最大長約1.1m、最大幅1.05mで、中央部でやや外側に脛らみ気味になっている。最大高は約1.2m。羨道と墓道との境界は明瞭ではなく、墓道は羨道とはほぼ同様な幅をもち、羨門から約1mの間は直線的に延び、そこから谷間に向てやや屈曲しているようである。また墓道の左側壁は小谷奥部の斜面に相当するものと思われる。羨道から玄室に向て序々に高くなっている。玄室床面はほぼT.P.37.5mの高さにある。したがって、隣接する1号横穴とはほぼ1mの比高差をもって架かれていたことになる。

各壁面には、幅の広い深いノミ痕が残されている。横穴の規模や平面形からみて、本横穴が掘削途中のものとは考えられないでの、壁面の造作には、平滑に仕上げるとこいう工程が省略されているものであろう。壁面にはかなりの数の亀裂が生じており、天井の一部は大きく崩落し、礫灰岩を覆うような礫層が見えている。

c. 3号横穴（図-51）

小谷の北側斜面、奥部に位置し、S-73°-W方向に開口する。玄室平面形は隅丸不整横長方形を呈する両袖式のものである。最大長2.45m、最大幅3.07mを測る。各壁面は直線的な部

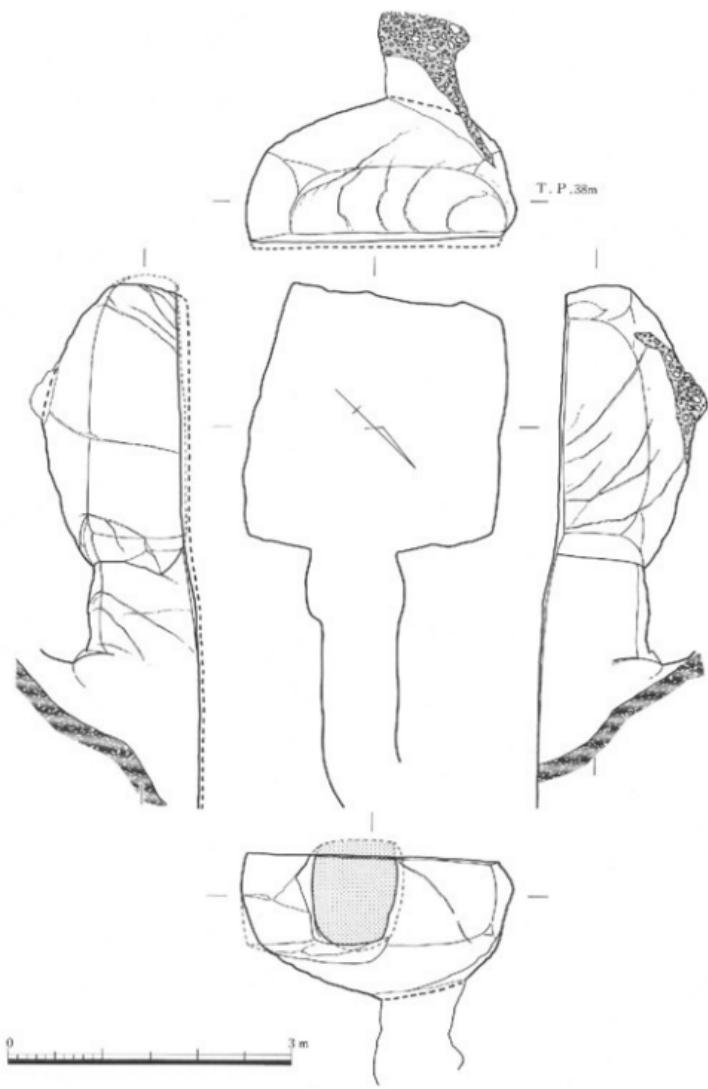


图-50 2号横穴实测图

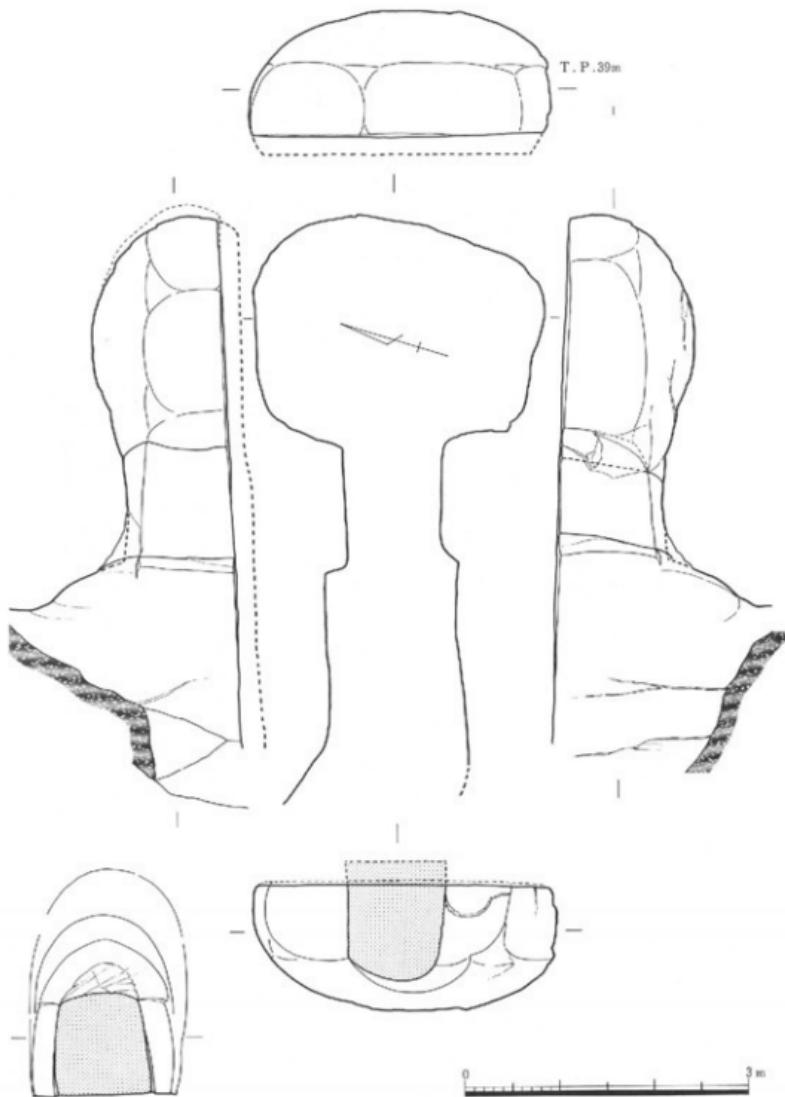


図-51 3号横穴測図

分が少なく、各壁の境界も明瞭ではない。天井はドーム状を呈するが、天井・様面境の段は存在せず、各壁から緩く弧を描いて連接する。玄室には約20cmの厚さで土砂が堆積しており、玄室最大高は約1.55m、壁の高さは、左側壁中央部で約1.05mを測るものと想定される。2号横穴同様玄室内には谷の湧水が流入している。玄門は中央部に取り付いており、幅1.05m。羨道は最大長1.25m、中央部での幅1m、高さは約1.3mを測る。羨門は幅1.05m。羨門は、床面から約2.35mの高さの所からアーチ状に4段掘り込まれて築かれるが、最終的に羨門の上縁は直線気味になっている。羨道は幅約1.4mで羨道よりも広くなっている。羨門から約2m直進し、そこから谷内に屈折している。羨道の右側壁は、小谷奥部の斜面を若干掘り込んで造られているようだ。墓道から玄室に向かい序々に高くなっており、玄室床面はT.P.38.3m前後に位置し、横穴群中では最高所に築かれている。

玄室の各壁面、天井は幅の広い深いノミ痕が残されており、壁面の平滑化という仕上げ工程が省略されている。ただし、羨道から羨道に至る壁面は平滑に仕上げられている。羨門上縁、玄室右袖壁の一部が崩落しているが、ほぼ良好に遺存している。

d. 4号横穴(図-52)

小谷の北側斜面、中央部に位置し、N-80°W方向に開口する。掘削途中のものであり、墓道から羨道部にかけて築造された後放棄されている。小谷の斜面部から現在掘り込まれてい

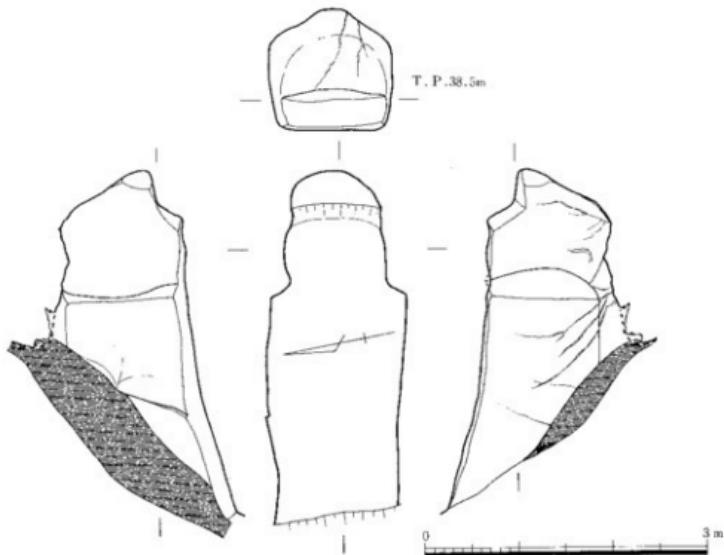


図-52 4号横穴実測図

る部分まで3.65mの距離がある。墓道の長さ2.45m、最大幅1.45m、墓道床面は水平面から約15°の傾斜で高くなっている。墓道は現在の幅約1.05m。床面は墓道のものに較べ、やや水平に近くなっている。最奥部は造り付け棺台状になっているが、これは掘削途上の姿であろう。

墓道壁面は平滑に仕上げられているが、それより内部は深いノミ痕が残されている。本横穴には、掘削を途中で放棄させるような壁面の崩落や亀裂、他の横穴との位置関係などの地質上、位置取り上の問題はないように思われ、その要因は他に求めなければならないだろう。

e. 5号横穴（図-53）

小谷の北側斜面、入口部に位置し、S-69°-W方向に開口する。横穴の北側は凝灰岩の露出する崖面になっている。本横穴は平面形態上からは玄室と墓道とを区別することは難しい。確かに最奥部から約1.35m入口に寄った位置の側壁部に、玄室と墓道を区別するような段が存在するが、ここでは床面に残る塊石を棺台として考えたため、この棺台の塊石が遺存する場所をも含め玄室と考え、墓道はなかったものと想定しておきたい。したがって、玄室は最大長2.95m、最大幅1.15m、高さ約0.9mを測り、平面プランは長方形のものと捉えておく。奥壁、側壁との境界、壁面と天井との境界も明瞭ではない。墓道は長さ1.55m、幅1.4mを測り、約45°の小谷傾斜面から、水平面に対し約10°の傾斜をもって掘削されている。玄室も全体に奥部に向かい高くなっている、最奥部の床面はT.P.35.3m前後の高さに位置している。

墓道の側壁は平滑に仕上げられていが、玄室の各壁面、天井は荒いノミ痕を残している。奥部付近の天井は若干崩落している。

玄室の堆積土は、玄門から玄室中央部にかけて、次第に厚さを減じるように堆積しており、若干の炭混り層を挟み大略上層、下層に区分することができる。また玄室中央部から奥部にかけては、ほとんど土砂の堆積はみられなかった。上層は玄門部に厚く、玄室中央部に薄く堆積しており、この中から陶棺片が出土した。下層は玄門部に薄く堆積しており、床面上に須恵器杯蓋が内面を上に向けた状態で出土した。

床面には長さ約2m、幅約0.8mの範囲に塊石が乱雑に置かれていた。塊石は玄門側では大きなものを、奥部側では小さいものを用いており、床面の傾斜の影響を少なくし、棺を水平に保つように選択的に置かれたものと考えた。玄室の規模や塊石の配置からみた場合、当然1棺が安置されたものである。その場合、先述した陶棺片は玄室を埋没させた堆積土の上層から出土したため、本横穴に付属するものとは考えられない。塊石の状況や、天井部と塊石との間があざかわな空間しかないとからみて、木棺のようなものが想定される。ただし、棺釘は検出されなかった。玄門近くから出土した杯蓋に対応する杯身が出土していないので、玄室内は若干荒されているものと思われる。塊石周辺部では、床面についた状態で、棺の下にあたる位置に土師器・高杯、左側壁から塊石の間に倒れ込むように土師器・小形甕、須恵器・壺が出土している。高杯は脚部を欠損しており、送葬儀礼の一端を示しているものであろう。

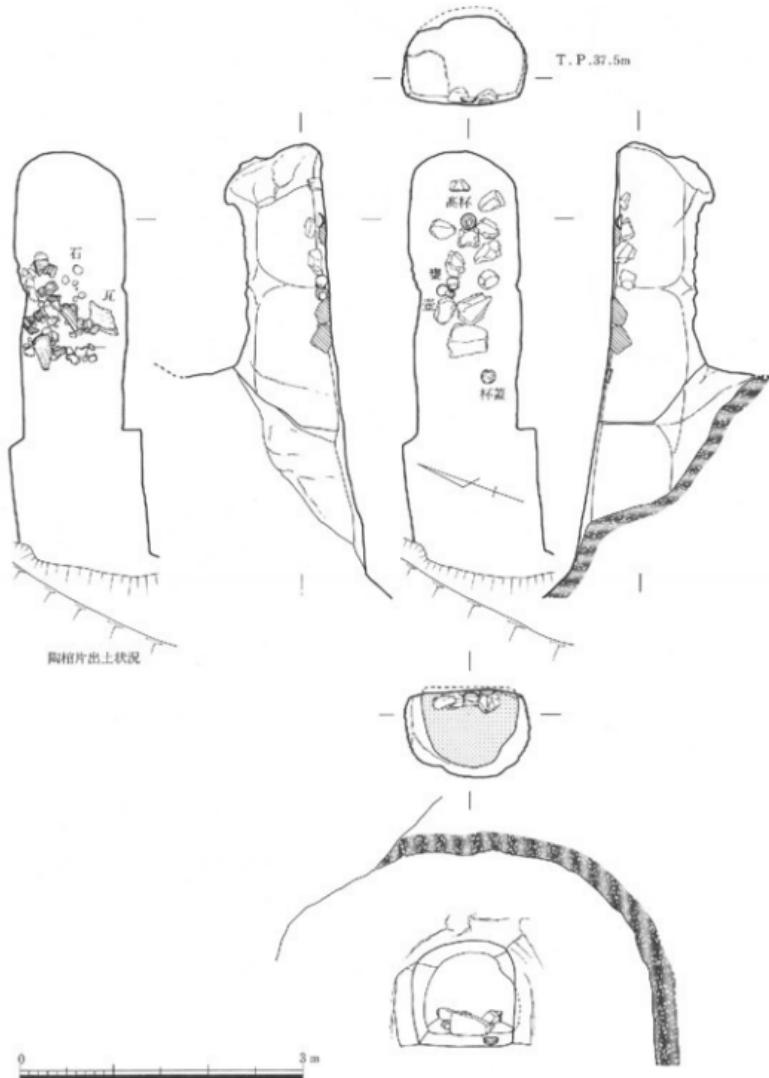


圖-53 5號橫穴實測圖

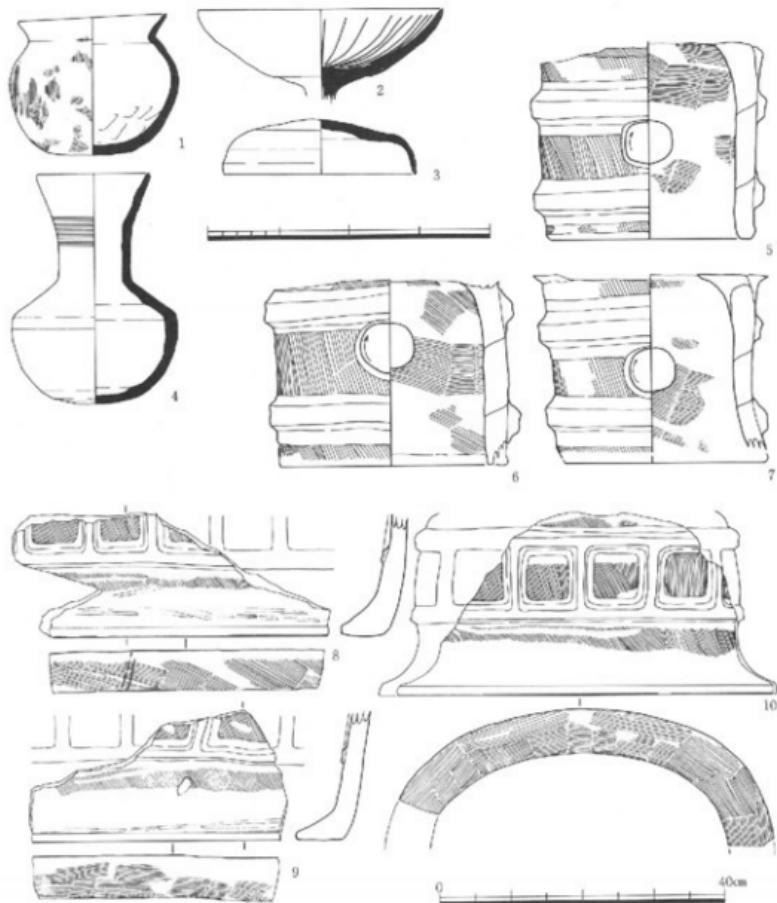


図-54 5号横穴出土遺物

遺物

1、2は土師器、3、4は須恵器。1は小形甌。明茶褐色を呈し、焼成良好。口径10.4cm、高さ9.9cm。外面はハケ調整後ナデ調整、内面はナデ調整。2は高杯。明茶褐色を呈し、焼成良好。口径17.3cm。外面ナデ調整、内面には粗い正放射暗文がみられる。杯と脚部との境は屈曲する。脚部はないが、破損面が研磨されたような痕跡はない。3は杯蓋。暗灰色を呈し、焼成良好。口径13.5cm、高さ3.9cm。4は壺。明灰色を呈し、焼成良好。口径7.8cm、高さ16.4cm。頸部は直立し、口縁部は外反する。体部は上半で屈曲し肩部を作る。

5～10は陶棺片で、5～7は脚、8～10は蓋。身の部分は出土していない。脚は6世紀代の円筒埴輪と良く似た形状、調整手法をとっており、断面台形の2本の凸帯間に1対の円孔を穿つ。幅3～5cmの粘土帯を積み上げて整形し、外面は粗いタテハケ調整、内面は密なヨコハケ調整後ナデ調整、凸帯はナデ調整される。いずれも明赤褐色を呈し、焼成堅緻、胎土は粗く、大粒の砂粒が多い。上縁は粘土帯を厚くして棺身との接着面を大きくするとともに、粘土を補って補強している。5は底径14.2cm、高さ14cm、6は底径16cm、高さ13.2cm、7は底径14cm、高さ(13.5)cm。蓋は畿内型亀甲形陶棺の形態を示している。⁽¹⁾幅は約56cmと推定される。内外面ともにハケ調整後部分的にナデ調整される。下縁は鈙状に平坦面を作り、棺身の蓋受けに対応する。明赤褐色を呈し、焼成堅緻、胎土は粗く大粒の石英粒が目立つ他くさり疊等も含まれる。身部の断片が存在しないが、おそらく他の横穴にあった陶棺が壊され放棄される際、その一部が開口していた5号横穴に投げ込まれたため、他の部分は小谷内に投げ棄てられているかもしれない。

3. 横穴群の変遷と年代

今回発見された安福寺横穴群B地点は、小谷内に4基の完成した横穴（1～3、5号）と1基の未掘状態の横穴（4）とで構成されている。いずれの横穴にも天井・壁面境の段は存在せず、平面形態をみると1、2号横穴は方形、3号横穴は隅丸方形、5号横穴は一体分の埋葬スペースしかもたない縦長方形になっている。このうち1号横穴は各壁面の境、壁面と天井の境が比較的明瞭であるのに対し、2、3号横穴ではこうした境界が不明瞭になっている。このような各横穴間の相違は、横穴を掘削し、仕上げていく上での工程の次々、仕事の粗雑化に由来している。

安福寺横穴群（A地点）の分析では、横穴の示す形態を家屋形態を模したものと捉え、横穴を年代的に序列する際の視点として家屋構造の簡略化、細部構造の省略、規模の小形化を挙げている。その上でA地点の横穴を分類し、Aタイプ：方形の玄室プランで、細部構造（例えば天井・壁面境の段）も整っているもの、Bタイプ：ほぼ縦長方形の玄室プランで、細部構造の簡素化、省略化（例えば天井・壁面境の幅が減少したり、一部の壁面にしか存在しなかったりする状態）されるもの、Cタイプ：玄室プランが隅丸方形、縦長方形など多様で、A、Bタイプよりも小規模、細部構造の省略されるものという3つの型を設定している。そしてA（6世紀後葉）→B（6世紀末葉）→C（7世紀初葉）というように変遷し、この背景に数体埋葬→1体埋葬という変化が想定された。

B地点の横穴は、こうしたA地点の分類に比較すると、すべての横穴で天井・壁面境の段が存在しないことはCタイプ的であり、玄室規模は1～3号横穴でBタイプ、5号横穴でCタイプにあたり、玄室平面プランでは各横穴ともCタイプ的であるというように、A地点の分類基

準をそのまま適用できるわけではないようと思われる。下の図は天井・壁面境の段の有無をもとにA地点の横穴、さらに同じ玉手山丘陵上にある玉手山東横穴群⁽³⁾をみたものである。

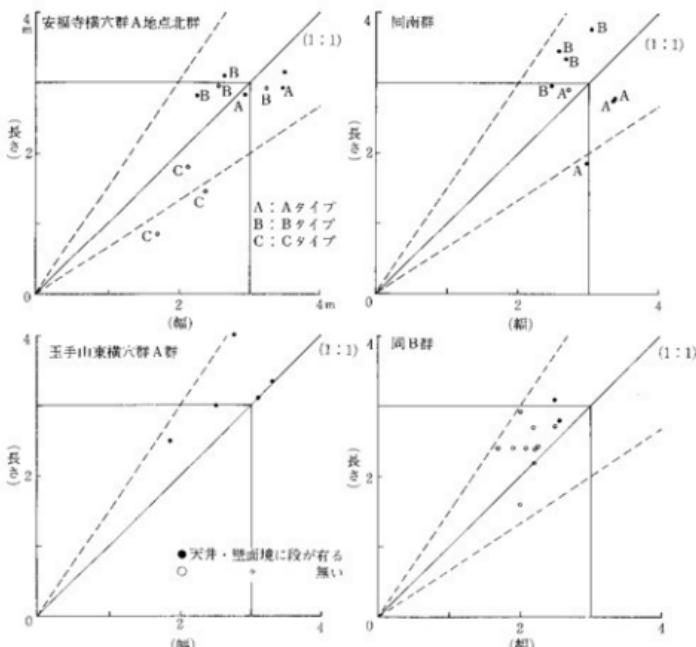


図-55 玉手山丘陵の横穴群玄室規模、形態の比較

この図からみると、A地点で分類されたA、Bタイプは玄室平面形態の変化であり、両タイプとCタイプとの間に著しい規模の違い、すなわち一横穴における被葬者数の減少が認められる。一方玉手山東横穴群では、天井・壁面境の段の有無という相違からは、玄室平面形態の変化ではなく縦長方形という形態は一定であり、そこには玄室規模の縮小という傾向を読みとることができるのである。また天井・壁面境の段と同じく、玄室の細部構造に属する排水施設をみると、玉手山東横穴群ではB群に主体的な天井・壁面境の段の存在しないものについても設けられているものがある。玉手山東横穴群B群の玄室平面形態が縦長方形を示す一群は、安福寺横穴A地点の同種のものよりも相対的に小規模であるようにも思われる。

このようにみると玄室の平面形態や規模、細部構造の一つ一つといった個々の要素からだけでは、横穴群あるいは横穴群内における小群を分類、序列化することは困難であり、より総合的な視点が必要であるとともに、一義的には土器等の遺物の出土状態や年代の検討が重要性を増すようと思われる。ただし、横穴の変遷全体において玄室平面形態や仕上げの粗雑化、細部

構造の簡略化、省略の傾向は首肯しうるものではあろう。それは高井田横穴群の分析で示挙されるように、連続して築成されたと考えられるような隣接あるいは墓道を共有する一群において、横穴相互の比較や先後の検討をする際により有効な基準になると考えられる。

そこでB地点の横穴群を検討してみると、地形的には小谷内に位置し、墓域全体としての安福寺横穴群からみても他の小群とは隔絶される墳域と考えられ、また、5基（未掘のものを除くと4基）の横穴はいずれも小谷内に向けて開口していることから、谷底を通ると考えられる墓道を共有する一群とみることができる。これらの横穴は、先にまとめたようにいずれも天井・壁面境の段が無く、玄室内は1号横穴がより精巧であり、2、3、5号横穴の順で粗雑化している。1、2、3号横穴の玄室は長さ、幅ともに3m前後の値を示すのに対し、5号横穴は幅が極端に減少し、極めて小規模なものになっている。こうした特徴から、B地点では1号→2号→3号→5号の順で横穴が掘削されたものとは考えたい（4号の位置づけは不明）。すなわち小谷入口、北面する斜面から掘削が始まり、次に小谷奥部へ、さらに南面する斜面に移動し奥部から入口へと掘削が進んだものである。

5号横穴では土器が出土している。土師器・高杯は脚部を欠失し、横穴内からそれが見出されないことから葬送儀礼用の土器とも考えられるが、杯体部は若干内湾して屈曲し、脚部との接合を示す段が残る形態のものである。こうした高杯は、石川を挟んで対岸に位置する土師の里遺跡からまとまって出土しており、その報文では須恵器・杯蓋に宝珠つまみが出現する直前のものとされている。また5号横穴出土の須恵器・杯蓋は、調整や口径から判断するところした段階よりも若干遡る可能性もある。これらの点から、ここでは5号横穴の掘削時期を6世紀末葉に考えておきたい。また、安福寺横穴群（A地点）、玉手山東横穴群、高井田横穴群では、横穴の出現を大略6世紀後葉で捉えられている。初源期の横穴は天井・壁面境の段も幅広く、玄室も精巧な造作であったと考えられるので、B地点で始めに掘削された1号横穴にこうした特徴を認められない以上、1号横穴も6世紀後葉以降の年代を考えるのが妥当であろう。このように安福寺横穴群B地点では、6世紀後葉～末葉の20～30年間に4基の横穴が掘削され、1基が未掘状態のまま置かれており、7世紀に入ると新たな横穴の掘削は行なわれず、追跡あるいは追善祭祀等のみが行なわれる墳域となっていた。

註

- (1) 間嶋茂了（1983）「岡山の陶棺—白猪屯倉への一私見」『岡山の歴史と文化』
- (2) 久貝健（1973）「第3章安福寺横穴群をめぐる諸問題」『玉手山安福寺横穴群調査概要』大阪府教育委員会
- (3) 大阪府教育委員会（1969）『柏原市玉手山東横穴群発掘調査概報』（大阪府文化財調査概要 1968）
- (4) 安村俊史（1986）「第3章－3まとめ」『高井田横穴群I』柏原市教育委員会
- (5) 松村隆文（1983）「第4章79-17区の調査」『土師の里遺跡発掘調査概要・V』大阪府教育委員会

第5章 まとめ

今回の調査では、古墳時代の遺構として埴輪棺、溝、横穴群、平安時代の遺構として古墓、鎌倉～室町時代の遺構として祭祀土塙やピット、近世の遺構として井戸が検出され、遺物としては縄文、弥生時代の土器、石器、古墳時代の土器、埴輪、奈良（前、後期）、平安時代の土器、鎌倉～室町時代の屋瓦、土器、江戸時代の陶磁器などが出土した。これらの遺構、遺物からは多様な土地利用の状況が想定されるが、調査地は低地への傾斜変換点付近にあり、玉手山丘陵としては高度の低い急斜面地にあたっており、しかも耕地として開発されていたという現状からみれば、すべての遺物が遺構と直接的に結びつくとも考えにくい。遺物の多くは谷内や崖下から出土しており、尾根上の削平、谷の埋め立てなど土地の改変がかなり進んでいるものと考えられる。最後に調査結果を概観し、問題点を指摘しておきたい。

弥生時代中期の土器片が比較的まとまって出土している。玉手山丘陵では、中期の資料はあまり知られておらず、石川流域の低平地あるいは対岸の国府台地上の遺跡を見渡す位置に集落が営まれていたことを示す資料であろう。いわゆる生駒西麓産の土器である。石器には縱長剣片剝離過程を示す石核があり、風化の度合いからだけでは時期的な判断は困難なため、今後その所属時期の検討が課題となろう。

埴輪棺が2基検出された。埴輪棺1は、棺体が砾床の上に置かれ、東位に円筒棺底部を利用した枕が置かれており、埴輪棺が薄葬を原則とすることからみれば、かなり特異な一基である。埴輪棺は土師伝承地との関係が深く、埴輪工人集団との関係で説かれており、大阪府では古市、百舌鳥古墳といいう中期の大形古墳群周辺に分布している。⁽¹⁾ 今回調査地内から埴輪棺が出土したこととは、以前に出土が報じられていた埴輪棺と合わせ、玉手山古墳群に付随する埴輪棺群が存在することを想定させる。玉手山古墳群は4世紀代に築造が始まり、5世紀代にも古墳が築造されており、指呼の距離にある古市古墳群とは系譜を異なるものと考えられる。埴輪棺が古墳あるいはその被葬者に示される集団に所属するものとすれば、今回出土した埴輪棺に示される埴輪工人は、古市古墳群の同工人集団とは異なる集団に属していたものであろう。例えば応神陵の東に位置する茶山跡の埴輪棺を構成する円筒埴輪には、貼り付け口縁が顕著にみられる⁽²⁾、これは近畿一円に広がりをもち、埴輪工人集団の技術的交流を示すものとの見解もある⁽³⁾。埴輪棺1の棺身を構成する埴輪はこうした特徴をもたず、また包含層出土の埴輪にもみられない点は、先の推測を傍証するものかもしれない。

埴輪棺1、2を構成する円筒埴輪は、1の棺本体がタテハケ調整である点を除けば、黒唐がみられ、B、C種のヨコハケ2次調整が施されるものである。すなわち野焼き焼成、回転台の使用を示すものであり、おそらく5世紀前半に位置づけられるものであろう。包含層から出土

した埴輪には一点のみであるが、口縁部を外曲させ端部を上方につまみ上げる土管状の形態で、外面調整は断続的なナナメハケ、高い断面M字形の凸帯をもち、凸帯間に三角形透しが4ヶ所穿孔されるものがある。おそらく、4世紀後半に属するものであろう。また破片のみで全形が分からぬため黒斑の有無は不明であるが、B、C種のヨコハケ調整をもつものがあり、5世紀代とみることができる。他に窓塗焼成で外面はナナメハケ1次調整のみ、凸帯の断面形は低い台形や三角凸帯のものがある。これは6世紀前半にあたるものであろう。このように調査地からは古墳時代前、中、後期の埴輪が出土することになる。

ところで、調査地内において以上の埴輪が樹立されていた各時期の古墳の存在を想定するのは困難である。調査地中央の尾根上に円弧状を呈する古墳時代の溝が検出されたが、溝底の土器からみれば、中期に属するものではある。この溝は古墳の周溝の可能性がある。玉手山丘陵ではT.P.36mという比較的低い位置においても、中期の方墳あるいは前方後円墳の存在が推定されており、今回検出された溝もT.P.37m前後にあたり、復元すると径11m前後の円墳が考えられる。しかし、この1基をもって出土した全ての埴輪片の原位置にあてることは、時期的、数量的にみて不可能であろう。おそらく、調査地外上方において、すでに削平された古墳が予想できようし、その一つに東方約50m離れてかって存在した玉手山4号墳（図-2）を考えることも可能であろう。また、埴輪棺1、2は、4号墳の東に位置したとされる埴輪棺、箱式石棺などとともに、玉手山4号墳に関係する埋葬施設であると考えられる。

横穴群は、位置的にみれば安福寺横穴群に所属するものであるが、地形的には安福寺横穴群の主体をなす同寺参道のA地点とは谷を異にし、隔絶した墓域を形成する。小谷内に5基の横穴が掘削されているが、1基は未掘のまま放棄されている。横穴は日当りの悪い北向きの斜面、谷入口部から掘削が始まり、奥部→日当りの良い南向き斜面奥部→谷入口という順で造られている。この順序が一貫したものであるとすると、未掘の横穴は途上にあるものであり、地質的には横穴を掘削する上で何ら問題は認められないでの、他に放棄した要因を求めなければならない。

年代的にみると、掘削開始時期が6世紀後葉、最後に掘削されたものは6世紀末葉と考えた。A地点の横穴群は、やはり6世紀後葉に掘削が始まるとされるが、玄室の構造や形態など型式的な見方をすれば、今回検出された横穴群はA地点に後続するものである。最後に掘削された5号横穴は、出土土器から6世紀末葉と考えられるが、その玄室基模や形態はA地点の最終段階にあたるものである。A地点ではその年代を7世紀初頭と捉えており、年代的な齟齬をきたしている。また、A地点では日当りの良い南向き斜面に優先的に造墓が行なわれたとされるが、今回検出された横穴群では北向き斜面から掘削が始まっている。このように年代や葬法に関する占地の問題など、両地点に対する評価は相違することになったが、今後安福寺横穴群の全体的な構成を探る上で重要な問題だけに、検討を続けていきたい。

平安時代中期になると、調査地には古墓が営まれるようになる。これは炭で充填された土塙内に、藏骨器としての土師器・甕を倒立させて埋置するものであった。土塙内には焼土等はみられなかったため、他所で火化された焼骨を灰と共に埋葬したものであろう。もちろん数基存在したものと思われるが、調査では1基しか検出されず、すでに削平を受け消滅してしまったのであろう。調査地周辺、特に古墓が営まれた西向き斜面下に広がる低地帯では、現状ではこの時期の集落址は発見されていない。ところが石川を挟み、対岸の国府台地上、例えば十師の里遺跡などでは、当該期の集落址が営まれ、多数の遺物が出土している。調査地とこうした遺跡との距離はわずかで、約1~1.5kmの間にある。もちろん、この時期の墓域は集落の周辺地に設定されるものではあろうが、そうした空間が十分に確保できない場合、石川を挟み対岸の丘陵地帯（玉手山丘陵西斜面）は恰好の墓域候補地として考えられたのではないだろうか。こうした問題を解くためには、両地域の上器の詳細な比較検討が必要になろう。

鎌倉、室町時代の遺物は、屋瓦、生活什器類などかなりの点数が出土しているが、祭祀土塙、ピットなどの性格不明のもの以外は、例えば建物等を示す明確な遺構は出土していない。屋瓦は平安時代末期～室町時代後期に及ぶもので、調査地東部のT.P.35m付近の平坦地から西へ降る斜面下にまとめて出土している。ここは、調査地東南部のT.P.30m前後の平坦面の隅にあたり、この平坦地に鎌倉時代初頭、寺院の小堂宇が建てられていたのかもしれない。ただし、この寺院に関する文献資料は全く知られていない。調査地から望むことのできる石川右岸の低平地には、13世紀代の上器を出土する鎌倉時代の建物群が検出され、報告者は武士あるいは土豪等の居住空間を想定している。⁽¹⁷⁾ 調査地から出土した多量の瓦に示される鎌倉時代に建立された寺院、あるいはその一部にあたる小堂宇は、こうした村落と関係をもつものであろう。

ところがこの村落の調査では、14世紀代の遺物は出土しておらず、居住域の移動が想定される。今回の調査地から出土した鎌倉、室町時代の土器は、例えば瓦器碗は低地の村落出土のものからは1時期下るもののが大半であるように、14、15世紀代のものを中心としている。この低地における村落の14世紀代に入っての衰退と、調査地における14、15世紀代の遺物の多量出土という現象は、機を一にしていると思われ、村落の丘陵斜面地あるいは丘陵上部への移動が、13~14世紀の間に行われたものと推定したい。もちろん、先のように瓦葺きの小堂宇を推定すると、調査地内にこうした村落が展開するための空間はなく、その位置は周辺地域に求めなければならない。

14、15世紀代の遺物は、これまで柏原市域ではあまり知られていない。この中には常滑焼の大甕、大和型の土釜などのように、在地系の製品以外も含まれている。こうした遺物を検討していくことによって、調査地あるいは周辺地域に広がった村落の経済生活、地域交流を探っていくことが可能であろう。

近世の遺物は伊万里、瀬戸美濃などの陶磁器類が中心であり、前代から引き継ぎ居住が推定

されるが、この時期の屋瓦は出土していない。あるいは、この時期鎌倉時代から営まれた村落に伴う寺院の解体が行なわれたのだろうか。17世紀には、近接地に尾張候徳川光友の援助によって安福寺が建てられている。屋瓦の時期からだけでは、寺院の解体時期を決めるのは困難ではあるが、少なくとも近世の時期に、従来の村落によって支持された寺院の、安福寺への吸収、解体が行なわれたものと想定され、その後谷1、2の埋没と共に耕作地へと移り変わっていったのであろう。

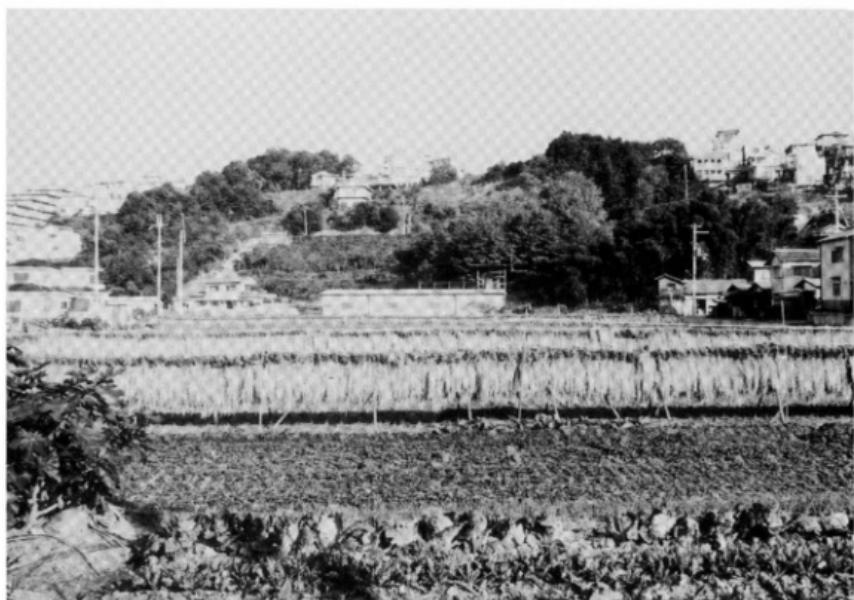
註

- (1) 橋本博文(1980)「円筒埴と埴輪棺」『古代探叢』
- (2) 長原遺跡調査会(1978)『長原遺跡発掘調査報告』
- (3) 羽曳野市教育委員会(1984)『古市遺跡群V』
- (4) 註1に同じ。
- (5) 川西宏幸(1978)「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- (6) 安村俊史(1983)「玉手山遺跡82-5次調査」『柏原市埋蔵文化財充掘調査概報-1982』柏原市教育委員会
- (7) 北野重(1985)「第5章まとめ」『玉手山遺跡-玉手中学校用地内埋蔵文化財調査』柏原市教育委員会

図 版



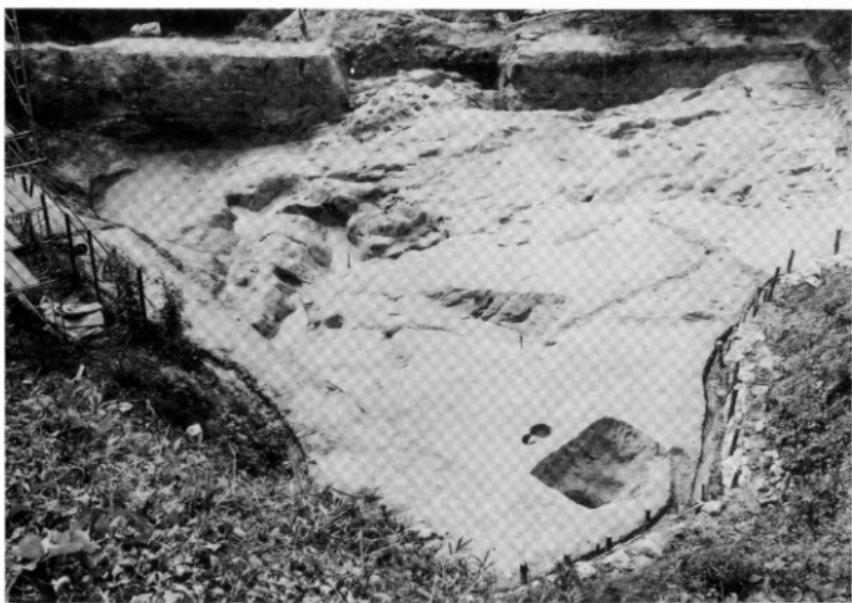
埴輪棺1に用いられた埴輪



調査地遠景



第Ⅰ期調査



井戸、埴輪館1、谷2



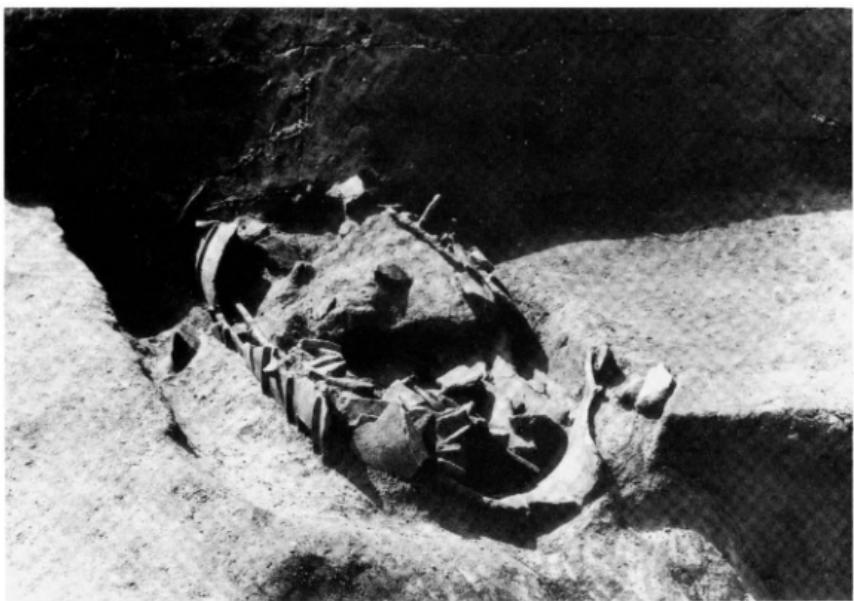
谷1



谷2の堆積



谷1の堆積



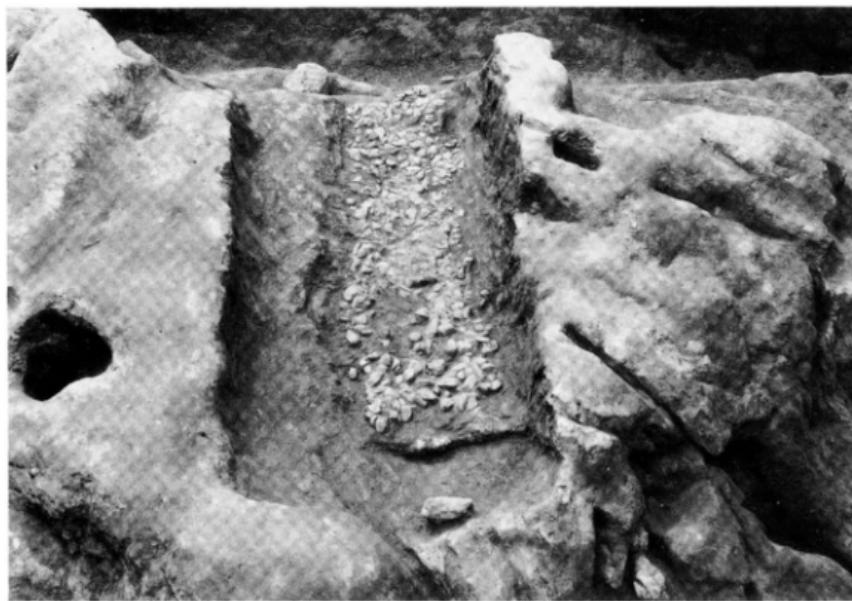
埴輪棺 1



埴輪棺 1



埴輪棺 1



埴輪棺 1 墓塚底の礎床



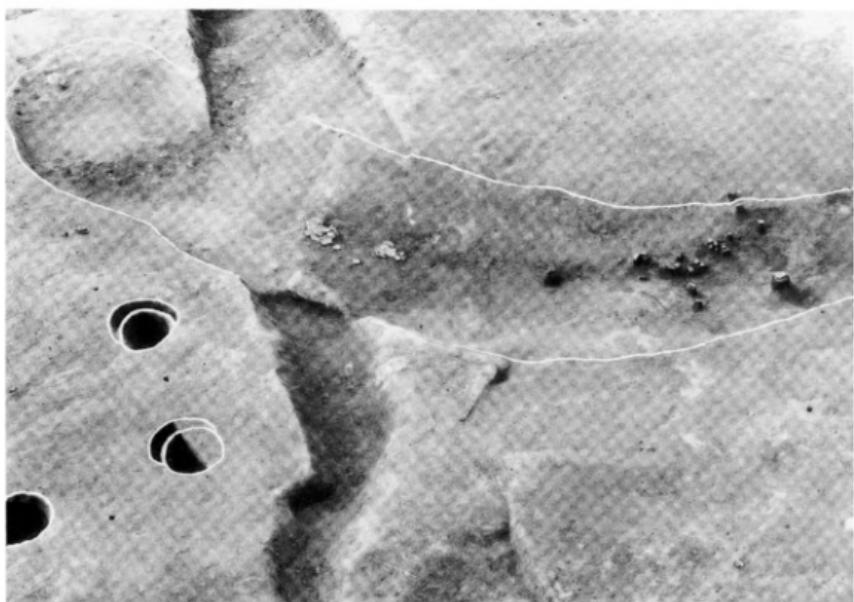
埴輪館 1 検出時



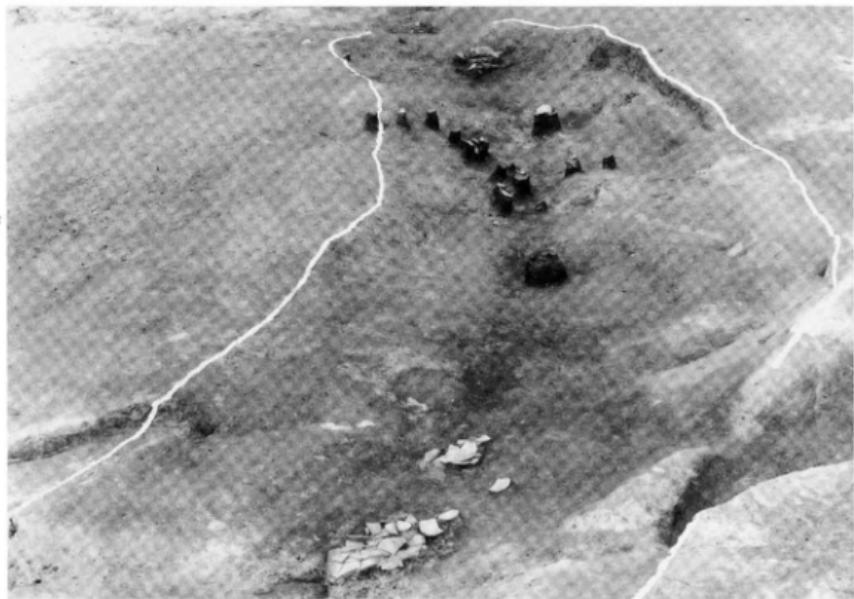
棺体の支持



棺体結合部の礫床



溝



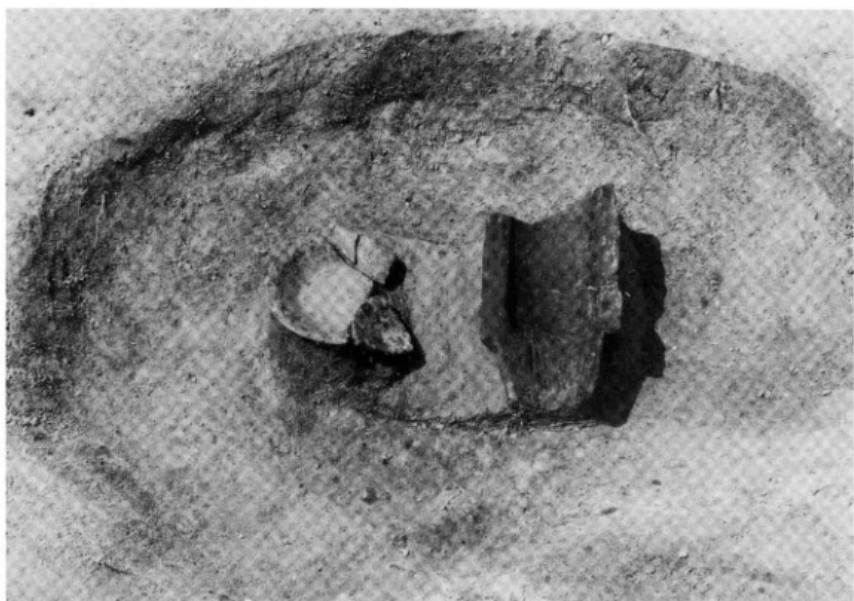
遺物の出土状況



古墓



炭層と藏骨器



祭祀土壙



瓦溜まり



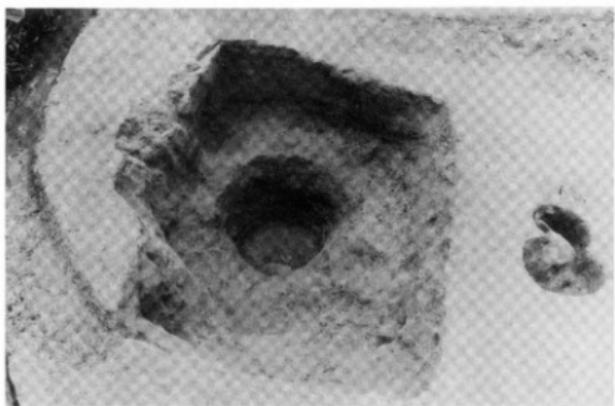
瓦溜まり



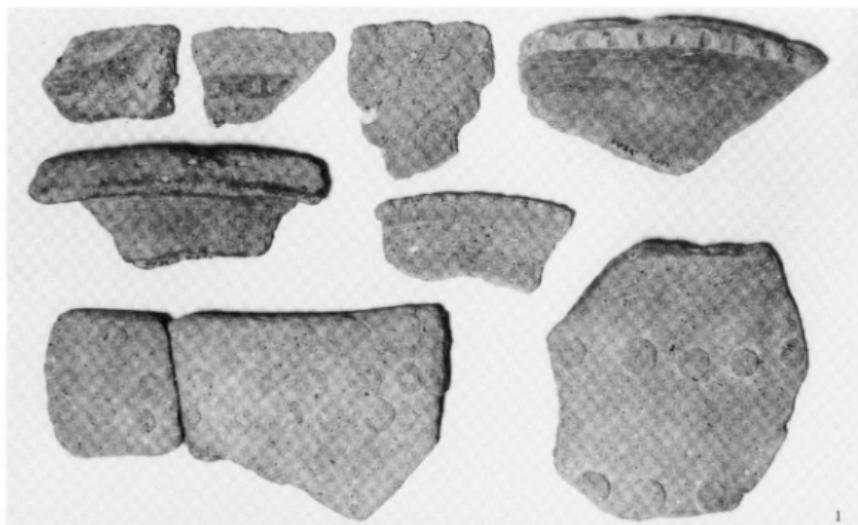
円筒埴輪出土状況



ピット 1



井戸



1



2



3



4



5

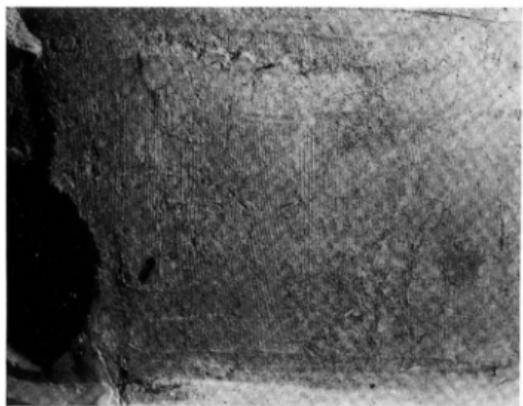


6

1・2 縄文・弥生土器、3・4 石器、5・6 石核



2

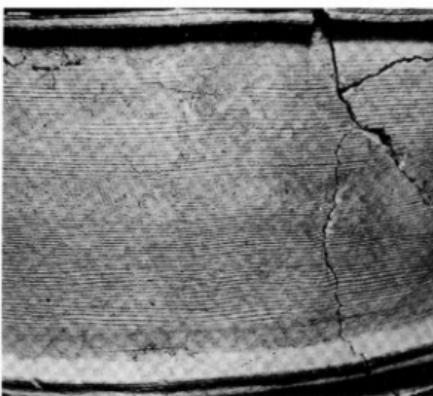


5

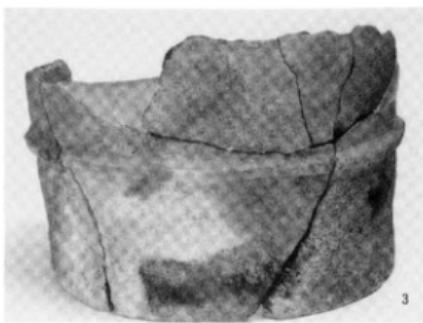
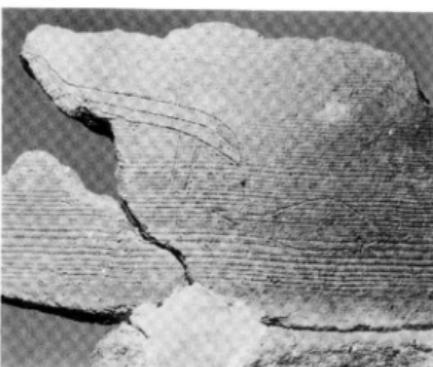
埴輪棺1用いられた埴輪



7



4



3



8

埴輪館1用いられた埴輪



6



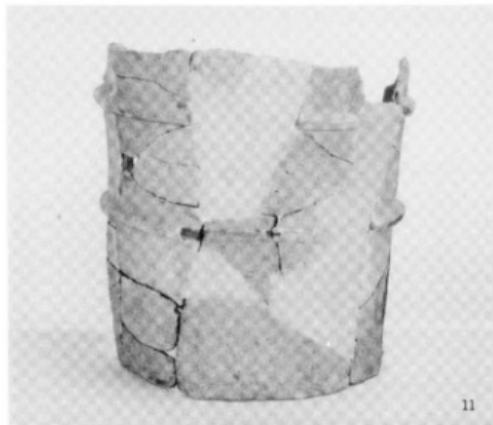
9



10



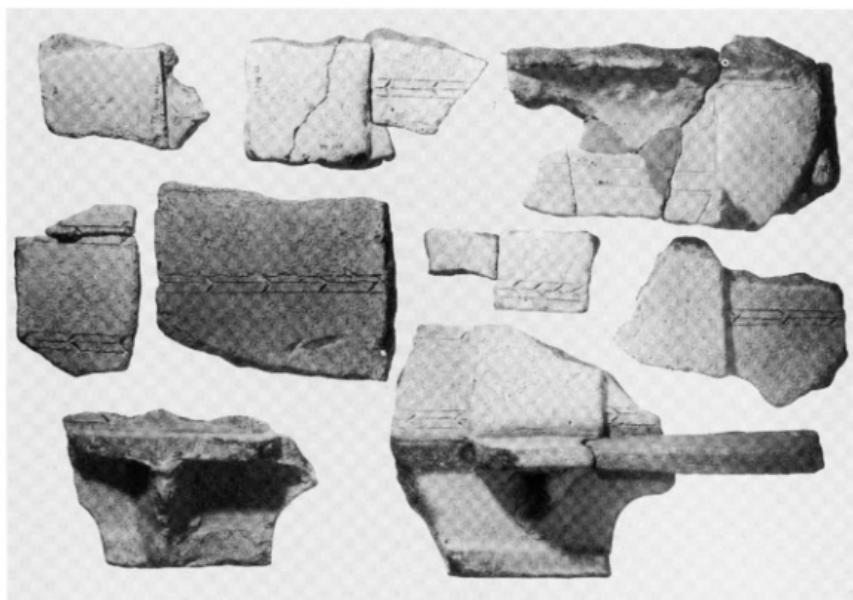
10



11

埴輪棺1、2に用いられた埴輪





家形埴輪



2



3

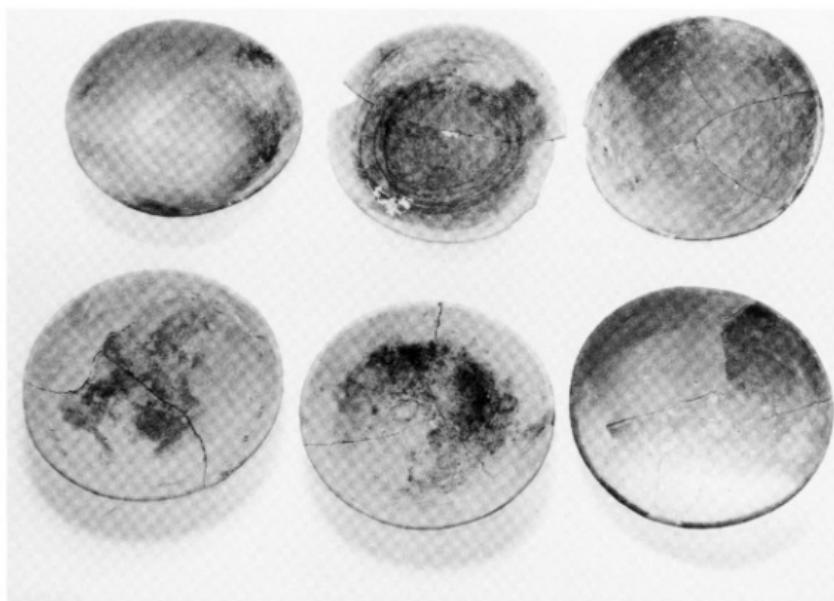


5



4

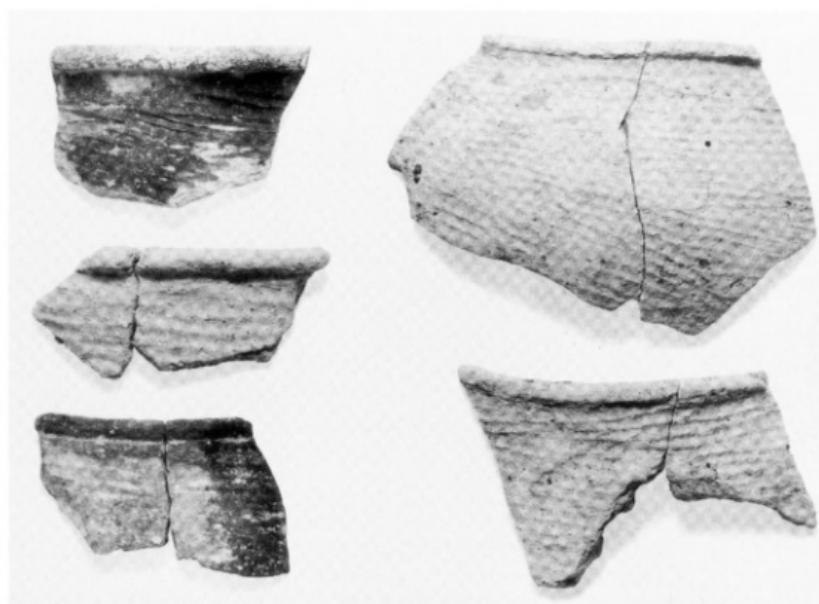
溝、古墓出土の土器



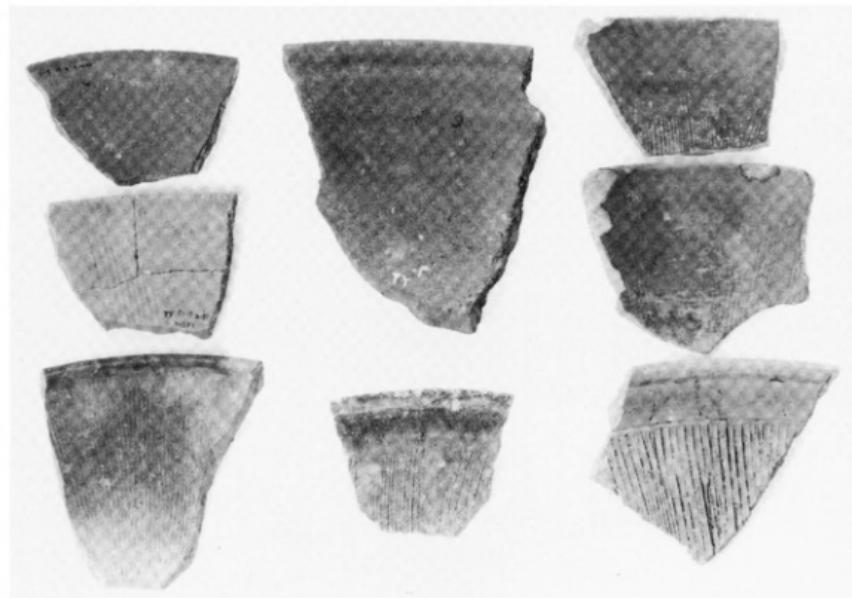
瓦器碗



土師皿



瓦質、土師質甕



瓦質、陶質推鉢



118



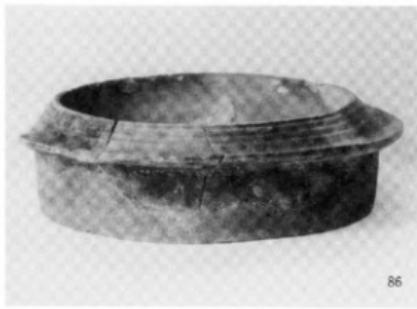
52



188



189



86



197



202



203

甕、擂鉢、釜、鉢



205



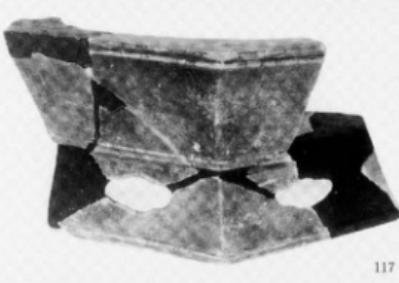
206



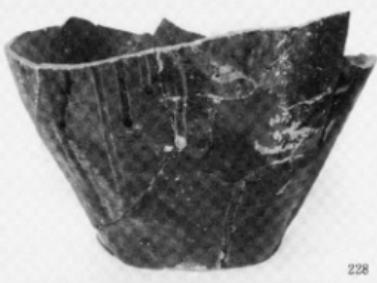
198



201



117



228



230



231



232



243

蓋、鉢、火舍、陶磁器



1



2



6



10



(11)



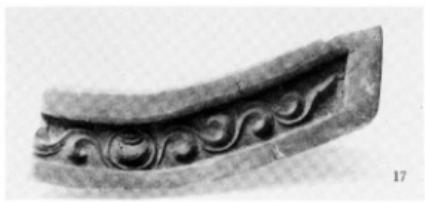
12



15



16



17



18

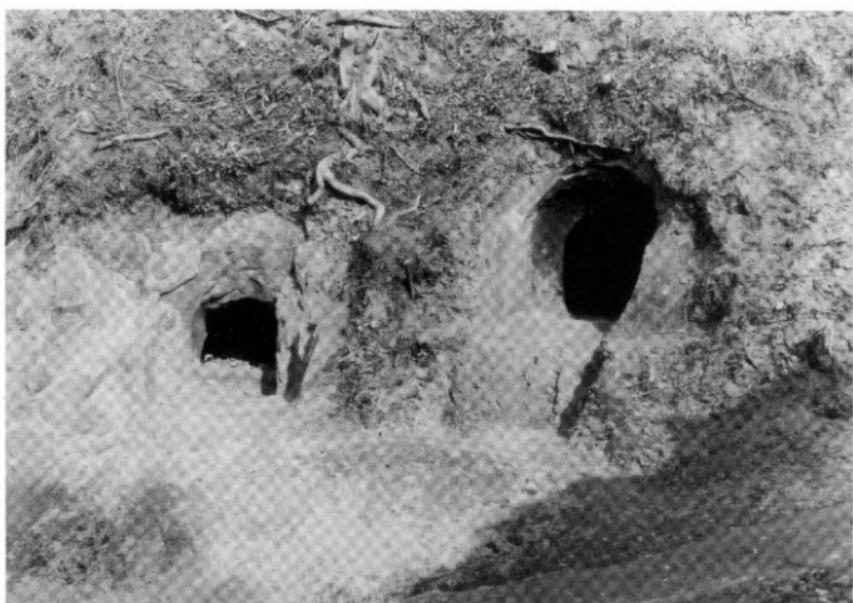
軒丸、軒平瓦



全景



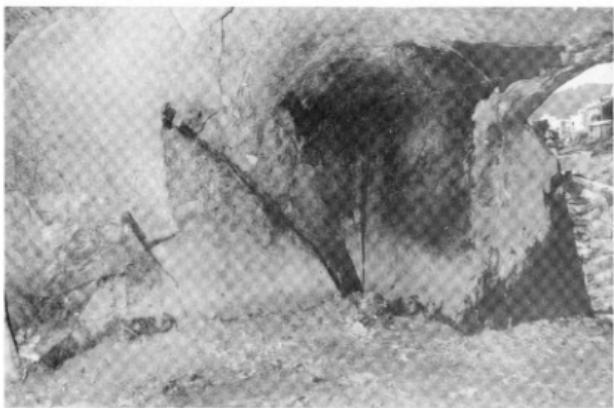
1、2号横穴



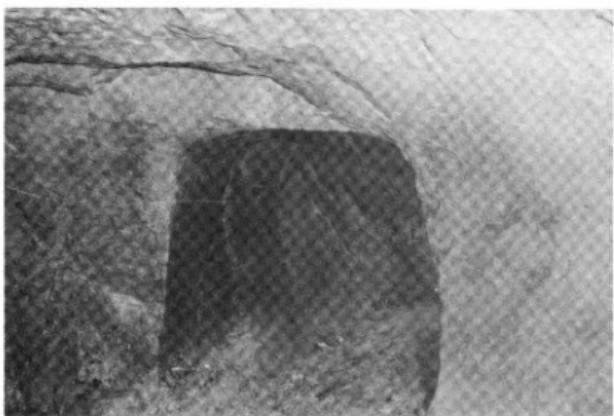
4、5号横穴



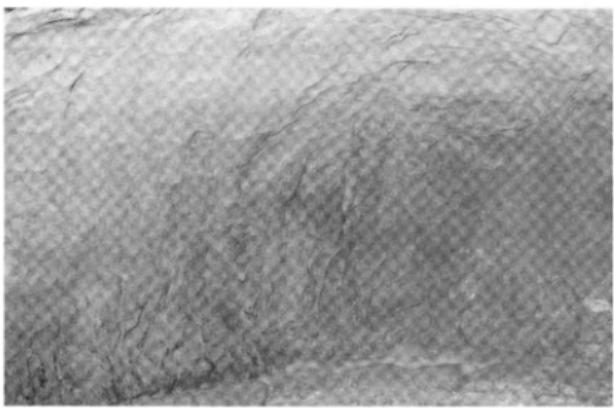
3号横穴



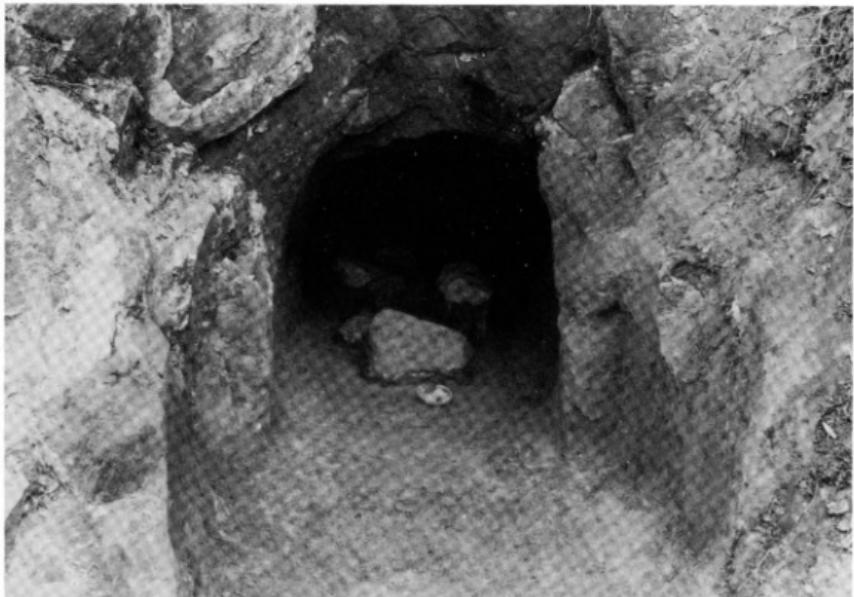
1号横穴



2号横穴



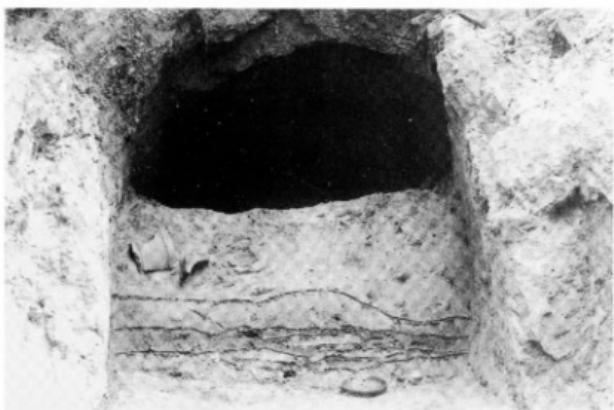
3号横穴



5号横穴



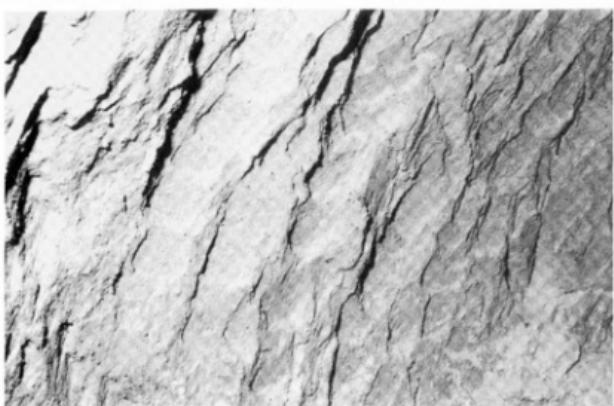
5号横穴棺台と土器



5号横穴入口の堆積

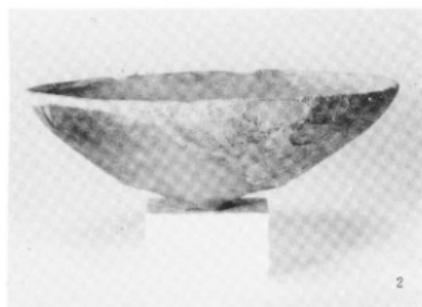


5号横穴陶棺出土状況



5号横穴壁面

図版二七 横穴群遺物



2



1



3



4



5号横穴土器、陶棺

玉手山遺跡

1983・1984年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1-43

電話 (0792) 72-1501 (内)716

発行年月日 昭和62年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所
